

# 溪 稜

No.25



40周年記念号  
浦和溪稜山岳会



あ  
い  
さ  
つ

幾度かの盛衰が有りましたが、此の度四十周年を迎える事が出来ました。皆々様に厚くお礼申し上げます。

当会は昭和三十一年十二月に浦和市立高校山岳部O.B会として渓稜山岳会発足 昭和三十八年四月 類似名称の会と誤解を避けるために浦和渓稜山岳会と改称するとともに 同年六月に一般社会人山岳会に改組し 丹沢から谷川岳、そして穗高へと高嶺を目指して登り続けてまいりました。

会組織としては果たせませんでしたが、昭和四十二年東洋大・アラスカ遠征隊グルカナ山塊ツイン峯登頂の隊長として山崎弘一氏を始め、昭和四十七、五十、五十五年のネパール・ヒマラヤ、ヨーロッパアルプスに多くの会員を海外の山に送り出しました。今後も海外の山への夢は追い続けていきたいと思います。

四十年の間には六回の滑落事故を起こし 骨折などの負傷者を出してしまった関係各位に多大のご迷惑をお掛けしてしまいました。此の苦い経験を生かす為に歴代の会員一同が遭難対策活動に勤しみ、幾度かの遭難事故に携わり救助搬出に微力ながら協力する事が出来るようになりました。今後とも会の方針として 安全登山の普及促進のために遭難対策活動に努力してまいりたいと思います。

四十年の間には多くの会員が 汗を滴り落としながら重荷に喘ぎ山道を辿ったり 冷や汗をにじませて恐怖に耐えて岩壁を捩ったり 桅火を囲みながら酒を交わし語りあかしたり 会員それぞれの青春を謳歌してまいりました。しかし、現在は時代の流れで会員の減少と高齢化の一途を辿り、青春を語り合う場所とはならなくなりましたが、皆々様のご指導を賜り 五十周年に向かって一步一步あゆみ続けてまいりたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

浦和渓稜山岳会 会長 牧野要雄

# 目次

あいさつ	三十四
O.B.から	三十五
会発足の頃	三十六
山の雨	三十八
北岳周辺	三十九
無題	四十
少し昔の私の山の話	四十一
山行報告より	四十二
牧野	一
辻勝四郎	一
辻勝四郎	一
辻勝四郎	一
菅野達也	一
山縣昌彦	一
小仙丈沢遡行～仙丈岳～大仙丈岳沢下降	一
西ゼン～平標山	一
種池新道～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳	一
白毛門岳～谷川岳	一
剣岳	一
谷川岳 東尾根	一
白馬岳主稜	一
鹿島槍ヶ岳 北壁	一
奥穂高岳コブ尾根	一
阿武隈川白水沢左俣	一
阿武隈川南沢右俣	一
一里滝沢右俣	一
茂倉沢槍又谷本谷	一
日光白根山南面・庵沢遡行	一
北岳バットレス第四尾根～中央稜	一
剣尾根紀行	一
南ア小太郎山日影シナクボ沢	一
北岳バットレス第四尾根	一
北ア水晶岳	一
五月 北アルプスを滑る	一
野反湖～堂岩山～白砂山	一
足尾松木川黒沢	一
谷川岳一ノ倉尾根	一
谷川岳幽ノ沢右俣リンネ	一
前穂北尾根	一
正月の朝、奥穂高岳に登る	一
のぼれなかつルート	一
初めての合宿とロッククライミング	一
滝谷第四尾根の登攀	一
北岳バットレス第四尾根	一
北岳バットレス「第四尾根～中央稜」	一
北鎌尾根縦走	一
新穂高より涸沢岳西尾根至由奥穂高頂上	一
源治郎尾根と八ツ峰の縦走	一
冬のキレット越え 槍ヶ岳奥穂高岳縦走	一
勘七ノ沢の遡行	一
小同心ルンゼ～小同心左岩峰正面クラックルートの登攀	一
剣岳・チンネの登攀	一
八ヶ岳裏同心ルンゼ	一
剣岳小窓尾根	一
その他	一
初めての冬山	一
娘達に残すもの	一
冬合宿感想	一
会員名簿	一
秋田誠	三十四
掛川統之	三十五
秋田誠	三十六
秋田誠	三十七
秋田誠	三十八
秋田誠	三十九
秋田誠	四十
秋田誠	四十一
秋田誠	四十二
山下京一	四十三
秋田誠	四十四
中山法行	四十五
牧野要雄	四十六
宮里正代	四十七
秋田誠	四十八
中山法行	四十九
牧野要雄	五十
秋田誠	五十一
秋田誠	五十二
秋田誠	五十三
秋田誠	五十四
秋田誠	五十五
秋田誠	五十六
秋田誠	五十七
秋田誠	五十八
新井千鶴	五十九
秋田誠	六十
正野嘉宏	六十一
内海正人	六十二
牧野要雄	六十三
加藤覚	六十四
加藤覚	六十五
加藤覚	六十六
加藤覚	六十七
加藤覚	六十八
加藤覺	六十九
内海正人	七十
牧野要雄	七十一
秋田誠	七十二
秋田誠	七十三
秋田誠	七十四
秋田誠	七十五
秋田誠	七十六
秋田誠	七十七
秋田誠	七十八
秋田誠	七十九
秋田誠	八十
秋田誠	八十一
秋田誠	八十二
秋田誠	八十三
秋田誠	八十四
秋田誠	八十五
秋田誠	八十六
秋田誠	八十七
秋田誠	八十八
秋田誠	八十九
秋田誠	九十
秋田誠	九十一
秋田誠	九十二
秋田誠	九十三
秋田誠	九十四
秋田誠	九十五
秋田誠	九十六
秋田誠	九十七
秋田誠	九十八
秋田誠	九十九
秋田誠	一百

## 会活動記録（一九九一～一九九六年度）

秋田誠	三十四
秋田誠	三十五
秋田誠	三十六
秋田誠	三十七
秋田誠	三十八
秋田誠	三十九
秋田誠	四十
秋田誠	四十一
秋田誠	四十二
秋田誠	四十三
秋田誠	四十四
秋田誠	四十五
秋田誠	四十六
秋田誠	四十七
秋田誠	四十八
秋田誠	四十九
秋田誠	五十
秋田誠	五十一
秋田誠	五十二
秋田誠	五十三
秋田誠	五十四
秋田誠	五十五
秋田誠	五十六
秋田誠	五十七
秋田誠	五十八
秋田誠	五十九
秋田誠	六十
秋田誠	六十一
秋田誠	六十二
秋田誠	六十三
秋田誠	六十四
秋田誠	六十五
秋田誠	六十六
秋田誠	六十七
秋田誠	六十八
秋田誠	六十九
秋田誠	七十
秋田誠	七十一
秋田誠	七十二
秋田誠	七十三
秋田誠	七十四
秋田誠	七十五
秋田誠	七十六
秋田誠	七十七
秋田誠	七十八
秋田誠	七十九
秋田誠	八十
秋田誠	八十一
秋田誠	八十二
秋田誠	八十三
秋田誠	八十四
秋田誠	八十五
秋田誠	八十六
秋田誠	八十七
秋田誠	八十八
秋田誠	八十九
秋田誠	九十
秋田誠	九十一
秋田誠	九十二
秋田誠	九十三
秋田誠	九十四
秋田誠	九十五
秋田誠	九十六
秋田誠	九十七
秋田誠	九十八
秋田誠	九十九
秋田誠	一百

## 会発足の頃

辻 勝四郎

創立四十周年と聞いて改めて時の流れの速さを感じる。

考えてみれば、当時まだ学生だったぼくが、役所を定年退職してから既に三年にもなるのだから無理もない。それでも、この間曲がりなりにも会活動がよくも継続してきたものだと記憶する。

ここでは全体的な軌跡は他に譲って、創立の頃の会とぼく自身とのかかわり、当時の世情などについて、個人的な独断の筆法で簡略に回想してみよう。

当会発足の直接のきっかけは、多分に他動的受け身のものだった。ある日、一年後輩の吉田泰彦がやつてきて、「浦

和市に山岳連盟を結成しようという機運があるので、そろそろお宅あたりもOB山岳会を作つて参画してくれないか」という打診が某山岳会スジからあったと言う。当

時、山岳部OB同志が顔を合わせることも希で、ぼくなどはもっぱら前記の吉田等とペアで、時折現役の面倒をみたり、丹沢、南ア、谷川岳あたりを登っていたものだが、OB組織があれば現役指導の面でも便宜があった。とにかくそんなひよんな動機で話が転がり始めて、昭和三十一年十二月に浦和市立高校山岳部OB会として、現在の会の前身「渓谷山岳会」が発足する運びとなつた。ぼく自身が代表と

実はそれ以前に、会が発足するのを既定の事実として、浦和市内の玉藏院で開催された浦和市山岳連盟設立準備会に、ぼくと吉田が出席していた。谷峰、岩峯、浦和アルバインクラブなどの山岳会や、高校山岳部など七团体十名程の代表者が参加したが、その中に後年会員となる牧野要雄の兄や、顔見知りの酒屋の旦那がいたのも奇縁だった。

山岳部発足と同時に、まず目的としたのが、会員個々の登攀技術のレベルアップだった。当時、例えば谷川岳一ノ倉沢の経験者はぼくと吉田しかいなかつたが、その経験も浅かつたので、自らの鍛錬も含めて、もっぱら西丹沢や谷川岳をゲレンデとして精力的な合宿活動を行つた。一ノ倉

沢では多勢で登るには無雪期の一ノ倉や二ルンゼ、四ルンゼなどが格好のトレーニング場だったが、たとえ初心者でも登りたいという意志があれば、本番で鍛えるという方針を探つた。だからバーティの顔振れも多彩で、試みに、ぼく自身始めて登つた一ノ倉沢や幽ノ沢の各ルートの同行者を思い出してみても、「一ノ倉では、『残雪期』吉田泰彦、「無雪期」菅野達也、「積雪期」楠山正毅、「二ノ倉右股」単独、「滝沢上部」単独、「中央壁」齊藤良則、「三ルンゼ」藤原健二、「四ルンゼ」吉田泰彦、「五ルンゼ」山縣昌彦、「南稜」山縣、吉田、菅野、山崎弘一、村田俊満、「エボシ沢奥壁」山崎、村田、「アルファールンゼ」篠崎介二、「幽ノ沢」ルンゼ」柿沼博、「右股リンネ」菅野、・などといった顔

振れである。どんな場合でも、トップのぼくは嘆ちるわけにはいかなかつたが、幸いなことに、その後も一人の事故者を出すことはなかつた。

時あたかも、マナスル登頂を契機とした登山ブームの到来で、谷川岳では未登の衝立岩正面に何本もの試登のザイルが垂れ下がり、コップ状の基部では試登の落石の集中砲火を浴びる始末だった。三十三年の二月、一ノ倉沢出合の小屋ではコップ正面の初登を狙う雲表の松本竜雄や、緑の山本勉といった連中と顔を合わせたが、最後に声をかけてきたのが幽ノ沢中央壁を狙うという古川純一だった。翌年二月の南稜の偵察のときは、衝立正面の積雪期初登のため登つたのが幽ノ沢中央壁を狙うという古川純一だった。翌年二月の南稜の偵察のときは、衝立正面の積雪期初登のため行は僅かに穂高・屏風岩東壁(時間切れ中退)北岳バットレス・第四尾根・甲斐駒・尾白川本谷・谷川岳・湯檜曽川本谷ぐらいのものである。

最後に、近況報告として、六十歳を過ぎてからぼくの山行を挙げておこう。尾根歩きでは、七月・穂高岳(雨天のため西穂高のみ)、十月・甲武信岳(五月・平標・仙ノ倉～万太郎～吾策新道、七月・谷川岳～一ノ倉岳～中芝新道、十月・苗場山～鳥甲山、九月・日光男体山、奥白根山、九

トルの麻ザイルにアブミなども手製で、ようやく世間並にナイロンザイルを使用したのは三、四年後のエボシ奥壁が最初だった。冬幕など勿論なく、谷川岳や上州武尊では夏天の二重張りで炭俵を敷いて頑張ったし、東尾根ではオーバーシューズもなくアイゼンもたしか借物だった。それでも次第に装備も揃いはじめ、八ヶ岳や北ア、南アなどの冬合宿も出来るようになった。

会が発足して数年を経ると会員の大半も職業人となり、会員数も減りはじめ、会全体の活動も停滞期に入る。OB会としての限界でもあつたろうか。そこで活性化の方向として一般社会人山岳会に改組することとし、会名も現在の「浦和溪谷山岳会」と改めて会員募集を行うようになつた。それ以降活動の舞台も穂高の屏風岩や滝谷、北岳バットレスなどと進展し、連盟活動も市岳連、県岳連、そして昭和四十二年の埼玉国体と統いていくのだが、そのあたりはもう他に稿を譲つたほうが良いだろう。

この四十年間、振り返つてみるとやはり色々なことがあつた。だが、この間一定レベルでの山行を重ねながら、唯一の一人も会として遭難者を出さなかつたことは、他に誇つても良いだろう。ただ、一ノ倉など何回となく山行と共にし、幽ノ沢や滝谷もペアで登つた柿沼博さんが、元気だと思われていたのに、この六月突然に他界された。心から冥福をお祈りする。

後年ぼく自身も会山行への参加が少なくなり、職場仲間との山行が多くなつた。この数年間を見ても、会員との山行は僅かに穂高・屏風岩東壁(時間切れ中退)北岳バットレス・第四尾根・甲斐駒・尾白川本谷・谷川岳・湯檜曽川本谷ぐらいのものである。

最後に、近況報告として、六十歳を過ぎてからぼくの山行を挙げておこう。尾根歩きでは、七月・穂高岳(雨天のため西穂高のみ)、十月・甲武信岳(五月・平標・仙ノ倉～万太郎～吾策新道、七月・谷川岳～一ノ倉岳～中芝新道、十月・苗場山～鳥甲山、九月・日光男体山、奥白根山、九

月・会津磐梯山、十月・会津駒ヶ岳、六月・荒沢岳（雨天中退）といったところである。沢登りでは、谷川岳・湯檜曽川本谷、白毛門沢、赤谷川笹穴沢、西ゼン、巻機山・米子沢、西丹沢・箱根屋沢、秩父・笛吹川又沢・・・といふ具合である。

かって登った山や沢も勿論あるが、楽しく登ろうと温泉や山小屋を組み合わせての無理をしないのんびり山行だ。米子沢の帰りに谷川温泉に泊まつた折には、外の食堂でヒックゴー沢帰りの元会員の奥園とばったり出会うという偶然もあった。

中高年登山も盛んな折、ぼく自身もまだ引退は考えていないが、会の今後の発展を祈つて筆を置くこととする。

## 山の雨

### 辻 勝四郎

誰でも山に登るときは晴天を望む。だが潤滑な日本の山では、何日か山に入れば必ず必ずのように雨に遭う。雨が降れば行動は制約され山道は滑つて難渋する。逃げ場のない岩場では事態はもっと深刻だ。春先きや晚秋などにはみぞに變つて、疲労凍死の原因にもなる。だが半面、雨に濡れた新緑の滴りや紅葉の鮮やかさに趣致を覚えることもある。

その年は七月の中旬を過ぎても梅雨は上がりなかつた。だが母校山岳部の南アルプス行の事前踏査をせかされて、一人でテントを担ぎ芦安から夜叉神峠を越えて野呂川に入つた。清冽な流れが梓川にも比較される野呂川は、連日の雨で水かさを増し、濁流が岩を噛んで、谷間に低く垂れこめた雨雲と川霧で両岸の山々もど芒様と霞んでいた。普段なら何の変哲もない対岸の懸崖に幾筋にも大きな滝が掛

かって、まさに山水画の風情を呈している。

雨に濡れた鞍道や沢筋を辿るうちに、前方に流れに網を打つ人の姿が見えた。霧が濃淡を描いて、遠目にはそれは一幅の墨絵だった。だが、近かずいてみると情景は妖気の一派う異界の様相に一変した。投網と見えたのは錯のようないくつかの金具で、ぼくの存在などには一瞥もくれずに、男は阿修羅のように長い網を振りまわしてはガツンガツンと岩に打ち当て濁流に投込んでいた。振り向きざまにそれが頭上に飛んでくるよう殺氣を感じて、ぼくは足速にその場を離れた。だがそれから間もなく、ある事に思い至つて、「」

厳頭の狂人<sup>リ</sup>の謎は氷解した。数日前、二人の東大学生がこの川の上流で渡渉中に流されたのだ。出鼻を挫かれたそんな出会いがケチのつき始めだったのか、その後の山行は散々だった。

その日支流の荒川に入つて何回かの渡渉中に流されて、時計を壊し、衣服の着替えで有金の大半も失つた。その夜、沢のほとりで雨中幕営。翌日も雨の中を滝を登り、沢をつめ、ヤブをくぐり、這松を漕いでようやく間ノ岳に出て日没とともに稜線で野営。次の日、雨の中を迂闊にも鞍道に紛れ込んで彷徨の末に尾根に出たが、水場を求めてガレを下りテントを張る。日暮れとともに、獸が次々と水を飲みにやってくる。翌日の塩見岳も深い霧の中。ここでも下降ルートを間違えたが、遙か下方に伐採跡が見えたのでそのまま下ると、予想どおりに營林署の宿舎に山た。

その日の夕方は物凄い雷雨だった。だが、それがこの年の梅雨明けの前触れだった。翌日渓谷沿いの森林鉄道のトロッコに使乗して伊那の人里に近づくころ、次第に雲が切れて、久し振りの陽光が渓谷とあたりの木々の緑を眩しく照らし出した。モンスターのようなこんな連日の雨を、それ以後もまだ経験していない。

立山から剣岳に登り、黒部川に下つて下廊下を探勝し、祖母谷から後立山へと渡り歩いたことがある。ロープウェイやバスで労せずして立山に立てる現在とは違う昭和三十

年頃のことでの黒部ダムもまだ工部中だつた。三千米級の

山に登つて深い谷へ下り、また登り返すという、十日間程のテントを背負つてのハードなスケジュールだつたが、幸い大した雨にも遭わず黒部から唐松岳へと辿り着いて、頂上直下のキャンプ地にテントを張つた。信州側は素晴らしく夕映えの一面の雲海だった。だから「あしたもお山は晴天」と、と高校時代の恩師と二人、安心して寝袋にもぐり込んだまでは良かったが。

夜中にお尻のあたりが濡れてきた。夢うつつに幼い日の記憶が蘇つて「しまった」と思い寝返りを打つ。だがどう考へても尋常ではない。ハツと思つて起き上がってライトを点けて見ると、概にあの祭り。テントの中をとうとうと水が流れていて、またたく間にテントの底全体が水びたし。横になることも出来ず、濡れ物に腰を下ろして、水音を聞きながら一夜を過ごした。寝耳に水とはまさにこのことか。我々も鹿島槍を越える計画に水を差されて五竜岳から下山した。

似たようなことをその後再び経験するのだから情けない。

越後の魚沼三山を縦走する計画で枝折峠から胸ヶ岳へ登つた。谷川岳では自衛隊の銃撃による遺体収容のあった谷川岳では自衛隊の銃撃による遺体収容のあった日である。山頂の手前にカ百草ノ池<sup>カ</sup>というキャンプに恰好な平坦な草地がある。予定には早かつたが、こんな快適な所を見逃す手はないとテントを張つた。だが間もなく夕立がやって來た。雷が鳴るとテントのポールがビリビリと震える。そんな危険な状況が暫く続いた後に「青天のヘキレキ」ならぬ突然の大洪水がやつてきた。テント全体に沢のように水が流れ、もう寝るどころの騒ぎではない。さても不思議と夕立がおさまつてから調べてみると、やや上方に池塘があつてダムの堰を切つたように水が流れ直撃されたのだった。

岩場での突然の雷雨も難儀である。退避する岩かけもなじるルートでは下降する以外に手段はない。命からがら逃げ

降りたのも一度や二度ではない。谷川岳幽ノ沢では丁度岩場を抜けた時だった。いきなりの雷雨である。背中の登攀用具がチリチリと鳴り出して夢中で急峻な草付を辿るうちに、谷間の光景が一変したのに気がついた。数百米にわたって回繞する岩場一面に上端から水が溢れ出て、かつて見たこともない壮大なスケールの瀑布を現出させていたのだ。「あと三十分遅れていたら、鯉の滝登りか、或いは敢えなく転落の運命に出会ったか」そんなことを思いながら、なおも反響する雷鳴に追われるよう、草付の急崖を登り、続けていた。

## 北岳周辺

### 辻 勝四郎

「北に遠ざかりて、雪白き山あり。問えば甲斐の白峰といふ」・深田久弥などが山の叙述に好んで引用する平家物語卷十の、平重衡の有名な東下りの一節である。

南アルプス北部の北岳、間ノ岳、農鳥岳を呼称して、白峰三山、または白根三山と言う。の中でも、四周にどつ

しりと根を張つて、涼と鋭峰を屹立てる北岳は、その気品と

いい風格といい、まさに王國の盟主といった存在である。

南アルプススバーリン道が広河原まで開通する以前は、何処から入山するにしても、北岳に登るには何日分かの食料装備を背負つて、一千メートル級の前山を越えねばならなかった。同行者に故障があつて前山の途中で野宿になつたり、単独行の野呂川支流の渡渉で流されたり、ルート勘の鈍い僕は、道を失つて獸径を歩き、何時間も這松こぎをしたものだつた。

ところで、僕が北岳に初めて登つたのは、昭和二十九年の夏。黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳に登り七丈小屋に一泊。翌朝、山顶から初めての北岳に見参した。その日は仙丈岳まで登り、翌日台風で荒れた仙塩尾根を辿つて野呂川辺の両

俣小屋に下つた。次の日、左俣の沢をつめ、入山四日目にしてようやく北岳の山頂に立つた。そのときの感慨を、當時次のように残している。

「…憧れの剣岳の頂上が汚い空缶に埋もれているのを見て幻滅を味わつたと同じように、紙屑と空缶の人臭さを撒き散らした山頂に、それまで抱いていた北岳への期待は、無残にもぶち壊された。それは五米先も見えない深い霧の中だった。

ヒマラヤ登山などという大げさな特殊な山登りをのぞいては、登山の黎明期に人々が抱いていたような山頂に対する強い憧れや敬虔さは、もう我々には縁遠いものになってしまつて、限られた未開の山や、積雪期の山登りにわずかにそんな期待を残すだけである。ケーブルができ、道が改修され山小屋が所構わず建てられ、そして、危険な所には針金が渡されて、どんな険しい山でも、一般ルートから

なら比較的容易に頂上に辿りつくことが出来るようになってしまった現在では、元来が頂上に登るための行為である登山から、山頂のもつウエイトが失われていくという事実は、三千米峯しか持たない我々の宿命として、諦めねばならないことだろう。(中略)それが空しい消極的なものであるとしても、せめて心中に自分なりの山の頂きへの期待だけは築き上げておきたい。

ある爽やかに晴れ上がつた日に、バットレスでも最も手強いという中央稜を這いつて、もう一度北岳に立つてみただけは築き上げておきたい。

山頂に直接突き上げる中央稜は、日本では最も高い処に位置する岩場である。だが、重い登攀用具を背負つての峰越えの煩わしさに、その後、バットレスには足を向けなかつた。

「バットレスの中央稜を登つてみませんか…」

昭和四十四年の秋、後輩のMからそんな誘いを受けた。

五十七歳になつた平成二年。僕はMと再び春の北岳に

高の屏風岩などとともに、積雪期の初登攀が新聞報道になつた中央稜も、その頃はすでにありふれたクラシックルートに変じていた。

バスの通じる広河原には、今はやかっての面影はなかつたが、大樺沢に入るところは以前のままだった。鮮やかな紅葉の樹間に斜めに木洩れ日が差し込んで、その雰囲気のうちに水面から立のぼる水蒸氣がゆらゆらと揺れていた。岩場の基部の草付も一面の孤色の草もみじ『時霧が湧いて、それがはれると、岩壁下部の樹林帯の裸木が、眼にも鮮やかな霧氷に変わつた。

幕営の夜は冷え込んだ。翌朝岩壁下部に取り付くと、岩には予想もしなかつた氷がびつりと張り付いていて、登攀のピッチがあがらない。こんな調子で登つていると最終バスにも乗り遅れると判断した僕は、この日は未練もなく岩場を下つた。

その翌年の六月、僕らは再び中央稜に取り付いていた。

若いHも加わって、下部の大滝を越え、そのまま急峻なCガリの雪渓を岩場の取付きへと登り詰めた。隣の第四尾根を登るクライマーの落とす巨大な落石が、眼の前の雪にぶぶすと砲弾のよう突き刺さるのが不気味だった。

大きなツララの重れ下がつた取付きから、細かいホールドを伝わって、三ピッチで中央稜の稜角に出る。トップのHが軽快にオーバーハングを越え、ザイルを延ばしていく。

不意にMが叫んだ。「奴め、落ちる！」

夢中でザイルをたぐる背後を黒い影が翔んだ。安否を問うと元気なHの声が戻つて来た。三十メートル落しながら彼は殆ど無傷だった。古いハーケンの頭が簡単に折れるという珍しい事故だったが、精神的なショックを受けたHの意に沿つて、再び下降することにした。隣の第四尾根に移つて二ピッチ登つてザイルを解くすぐ頭の上の北岳の山頂は、すでに霧の中だつた。

根の裾をまわり込む。だが、アイゼンなしのCガリの登攀は絶望的だった。やむなくトップを交替しながら、第四尾根を末端から登る。次第にガスが湧き出して、登攀終了時には中央稜も北岳も、霧の中に姿を消していた。ある爽やかに晴れ上がった日に・・・もう一度北岳に立つことがあるのかどうか、それは僕にも分らない。

## 無題

### 菅野達也

浦和渓山岳会創立四十周年おめでとうございます。

浦和市立高校山岳部OBを中心にして会が創設された昭和三十一年は、第二次世界大戦終戦後十年が経過し、世相もやっと落ち着きはじめ、山に登る人達が徐々に増え始めた頃でした。

三人寄れば山(三)岳会といわれ、雨後の筈のようにあちこちで山岳会が結成されては消えていった中で、浦和渓山岳会が四十年の歴史と実績を重ね、浦和市岳連・埼玉県岳連の中心となって活動を続けてこられたのは、一人ひとりの会員の山に対する姿勢とともに大きな事故もなく、優れたリーダーを中心に活動を続けてきた賜物と本当に嬉しく思います。発足当初は、装備も十分なものはなく、冬山で夏用のテントを張り、炭俵を敷いてエアーマットの代わりにしたことなどが懐かしく思い出されます。

平成八年七月に発行された「浦和市高同窓会だより」第五号に、「山岳部の歴史」が特集記事として掲載されており、浦和渓山岳会発足当時の中心メンバーであった山県昌彦先生、辻勝四郎先輩、山崎弘一さんや牧野要雄さんたちの写った写真を見て、懐かしさで胸がいっぱいになりました。

会の創立当初は辻さんのお宅(当時は浦和に住んでおられた)が山話会の会場で、今考えると、家の人の迷惑も考

えず遅くまで話しこんでいた、そんな毎回でした。その頃の辻さんは、勤めの余暇に山に登るというよりも、山行の合間に仕事をしている、そんな雰囲気に皆が刺激を受けたには中央稜も北岳も、霧の中に姿を消していた。ある爽やかに晴れ上がった日に・・・もう一度北岳に立つことがあるのかどうか、それは僕にも分らない。

会の名称は、初め「渓山岳会」でしたが、同じ名前の山岳会があるということで、現在の名に改め、浦和市立高校山岳部OB会から一般社会人の山岳会に性格を変更し、現在に至っています。

私が一緒に山行を重ねた頃の会員は皆それぞれに個性豊かな人達ばかりでした。積み重ねた山行の中で、有形・無形に影響を受けていたことを後になって気が付きました。その意味で「浦和渓山岳会」は、私の人生における師であつたと言つても過言ではないと思つております。

牧野会長さんのリーダーシップのもとに、会員の皆様がさらに有意義な山行を重ね、会の存在意義を高めてくれることを期待しております。

## 少し昔の私の山の話

### 山縣昌彦

初見一雄という人の「すこし昔の話」(昭和四十四年著渓堂)という本がある。私は知らなかつたが上高地の親分としても有名であったつわものだそうで、この人が還暦に当たつて著したものである。

彼が「すこし昔」として語っている頃とその本が書かれた時との間には、いわゆる登山ブームが挿まれているから山の変容もたしかに大きいに違ひないが、今私が同じ「すこし昔」として昭和二十年代から三十年代の山を振り返るとき、「一時代前とは違つた大きな変容があるような気がする。それは一口で言えは急激な開発である。

一時代前の登山ブームというのは、登山が裕福な貴族階級(旧制の大学生も含め)だけのものではなく庶民でも楽し

めるものだという意識の変革であった。それにはもちろん一般的の経済的な向上があり、用具の普及、山の開発もあったが、用具は自分で使いやすいように工夫改造するのが常識であり、山の長いアプローチは歩くのが当たり前であった。

昔の山の道具屋の親父はおつかなかつた片桐でキシリングザックを買うのに防水はどうかと尋ねたら、いきなりザックに水道の水をじやーじゃーとかけて「この通り」と驚かされたという友人の話もある。山用にスキーの縮め具を改造するのにいかに苦労したかも、今となつては良い思い出である。米軍放出の野戦用石油コンロというものを初めて見たのは昭和二十年代の後半白馬であつたが、その後に使用したもの)のシュラーフというのも、山で男は感心して見ているこちらの目を意識してか、なかなか点火せず生ガスばかりぼうぼうと燃やしていた。その頃ようやく手に入れた米軍放出(朝鮮戦争の死体を日本へ輸送するのに使用したもの)のシュラーフというのも、山では夜半には寒さで目を覚ますというそれまでの常識を変えるありがたいものであつた。

広河原峠を越さなければ入れない北岳は遠い山であつた。赤堀沢から尾無尾根を辿つて越えようとした危うくバティの一人の生徒を死なせるところであつたのも、野呂川林道のできた今となつては夢のようない出である。

時は戻せない。變容した山は昔に返せないこれからも変容を続けるであろう。登山というものの考え方も多様に変化するであろう。ささやかな山歴ではあるが、昔登つておいて幸せであったとは思う。しかし今の山は今なりに良さがある。すこし昔を思い返しつつ、いまだに駄馬に鞭うつ感じで山歩きを続けている私である。

できれば次回から、「すこし昔」の山の話と今の山歩きの様子を報告して何かの参考にしていただければと思う。

## 山行報告より

八十六年度夏合宿より

### 剣岳夏合宿

日付

八十六年八月十二日～十六日

山名

剣岳

#### 《概要》

本年度当初の打ち合わせどおりに本年度の夏合宿は八月十二日～八月十六日にかけて剣岳で行った行動内容は、当会の活動内容は当然のことながら岩登り中心になつたことはいうまでもない。

また、高い運賃をかけて秋に荷上げするのを嫌って、冬山合宿用のデボもすることにした。このデボが結果的に良いか悪いかはわからないが、貴重な休みをデボのため三日使うことを考えたらこの様な考えが生まれてくるのも当然と思う。

今合宿は、ケガ人もなく天気もあり悪くなく、大体計画どおりに日程が消化でき、企画した側としては満足する結果となつた。

今合宿に参加できなかつた会員諸兄も、剣の岩はとても

なじみ易いので、一度は登攀することをお勧めしたい。

八月十二日(火)

夜行で未明の魚津駅に着き、一時間ほどの待ち合わせの後、富山地鉄の始発で上市へ向かう。上市からはタクシーで馬場島へ向かう。朝からビーカンの良い天気。三ノ窓剣尾根そして頂上が見える。

馬場島荘で朝飯を食べた後、八時に出発する。いつもながら、登攀具の入ったザックは重く、肩に食い込む。すぐに汗でTシャツはピッショリ。新人の二人も似たような状況だ。けれども、新人の二人が頑張ったおかげで、予定よりかなり早くタカノスワリの入り口に着く。予定どおり高巻き道を登る。ヤブの中の道は蒸し暑いし、ゾヨはいるし、

アブは寄つてくるし、とにかく体力を消費して三人ともバテバテで進む。それでも何とか三時間程で池ノ谷出合の河原に着く。雷岩着十一時。

ここから小窓尾根に取り付き、悪い急登を一時間、そして尾根上のゆるい登りを一時間程で一六〇〇メートルビーグに着く。目前に広がる池ノ谷の荒れた表情を見ながら、クマザサの急降下を四十分程で富岩屋へ着く。

池ノ谷の水は、シビれるような冷たさで、疲れた体に心地よい。岩屋の下にツェルトを張る。十五時。

八月十三日(水)

五時出発。池ノ谷の深いV字は、まったく日が差し込まず冷え冷えとしている。

岩屋の上から雪渓歩きとなつて、二時間程で左俣に入る。左俣はますます両側が狭まり、まるで大きな溝の底を歩いているような気分になる。時計は九時を回っているのに日は差し込んでこない。上を見上げればばららしい晴天なのに剣尾根取付を過ぎ、はるか上方に三ノ窓が見えるところまで上がって、寒い谷にやっと日が差し込み始める。

雪渓歩きに不慣れな新人の二人は見た目にわかる程必死にステップを刻んで、ピッケルを差して登高する。左俣上部で、雪渓の崩壊したところを右壁のゆるいクラックからクリアして、池ノ谷ガリ一に入る。三ノ窓十二時着。いつもこの場所にツェルトを張り、午後はジャンダルムでザイルの使用法など基礎的な技術の講習?を行う。

八月十四日(木)

八時からジャンダルム下部で岩登り訓練を行う。十一時半頃後続のバー(山下夫妻、風間、中村(泰))が三ノ窓に着く。

とりあえず彼らのテントを張った後、山下夫妻と風間氏はチネ中央チムニーへ、残つた我々は小窓の頭付近へ冬用のデボを行いに向かう。三ノ窓から一時間半程のバーの下降で一十五分程で歩いて左俣まで下れる。というのは、ウソだとわかつた。こんなところ歩いて下つたら死んってしまう。

コルBは案の定、風とガスの中で、全員がカツバを身につける。ルートは明確?でわかりやすい細いリッジ状の岩尾根が上部に続いている。中山、山下、関口及び中村、田村でアンザイレンして、濡れた気分の悪い冷たい岩場を登

ボする。休憩しながら中村(泰)と明日はどこに行こうかと、のんびり話をしながら剣尾根の鋭いギザギザをながめている。剣尾根上半に行こうと話がまとまる。

三ノ窓にもどる途中、雪渓で落ちた人を救助する警備隊を見たり、三ノ窓では着陸するヘリコプターの風圧でテンントが飛ばされないようにテントを遺したりと、遭難騒ぎに巻き込まれ、気分的にいやな思いをする。

その晩は明日の天気を気にしながら早々にシュラフに入る。

八月十五日(金)

四時起床、六時出発。山下(京)、風間はチネ左稜線へ、残りの五名(中山、中村(泰)、山下(裕)、関口、田村)は、剣尾根上半へ取り付くために池ノ谷ガリ一を下る。運悪く、天気はガスが掛かり、今にも雨が降りそうである。池ノ谷左俣まで降り、左俣の急な雪渓を登り返す。メンバーはアイゼンを持っていかつたり、ピッケルを持っていかつたり、運動靴だったりと、リーダーとしてはだいぶ不安だったのだが、私がカツティングでステップを切つてトップで登る。一〇〇メートル程登つたところで、R2と間違えてガラガラの急な壁に取り付くなど、地図上の距離はたいでしないのに山稜を取り包むガスのためルートファインディングに気を使う。

無事に傾斜のゆるいR2を見つけ、狭いガラガラのルンゼをコルBに向かって登る。完勝で登れたのはほんの十五分程で、すぐにチムニー滝となり、コルB直下ではクラックの登攀となる。よくガイドブックに書いてあるコルBからの下降で一十五分程で歩いて左俣まで下れる。というのは、ウソだとわかつた。こんなところ歩いて下つたら死んてしまう。



る。気分が悪いとはいっても、谷川の一ノ倉のよくなツルツルの岩でなく濡れてもかなりフリクションが効くので、技術的にはまったく困難を感じない。新人達も楽勝で登っているようだ。コルBから四時間程で長次郎の頭へ上がつて終了。十二時半。

一時間半程で三ノ窓へ戻り、先に戻っていた山下、風間と共に、全員でジャンダルムに取り付く。下部中央のハングの張り出しのない部分からP1の肩までストレートに二匹で登る。下降はP1の裏ルンゼを空懸を交えた四〇メートル目一杯の懸垂で合宿の最後を締めくる。

夜は、簡単に打ち上げをする。どの顔も満足感でいっぱい。

八月十六日(土)

七時に三ノ窓を全員で出発。あいにくの天気の中、頂上経由で長い早月尾根を下降する。上部では涼しくて気持ち良かった雨も、下るにつれてじっとりと蒸し暑くなつて、靴を泥だらけにしながら下る。幸い馬場島へ着くころには雨も止み夏の強い日差しが差し込んでくるようになる。足にマメをつくる者、足が痛くて真っ直ぐに歩けなくなり、カニ歩きする者など、長尾根の下りの最後はいつも悲喜こもごもでおもしろい。十三時馬場島着。例のごとく上市で風呂に入り、魚津で寿司を食べて夜行で帰つて来る。

八月十四日 晴れ

白荻川沿いに平坦な道を黙々と歩く。他に数バーティのみ。取水口の左山側につけられた踏跡に入る。あまり踏まれていないと見え、多少荒れているが特に危険もなく、下の河原を渡渉しているバーティを横目に白荻川の河原に降り立つた。河原を少し歩き、右手の小窓尾根の急登をあえいで登ること二時間。

一六〇〇メートル地点より池ノ谷の河原に下降。富高岩屋の手前で設営する。一日目とあって、荷も重く苦しい登高だった。午後は寝寝をして過ごす。

八月十四日 晴れ

出発後まもなく雪渓。三ノ窓が目前に見えるが、なかなか近づかない。二俣はたいして平らなところもなく、これより先は傾斜もきつくなってきた。アイゼンなしで慎重に登る。今日は昨日と違つて、陽が当たらないので汗をかくこともなく高度を稼ぐ。途中、劍尾根に突き上げる雪渓を右に見送り、ガラ場をひと登りで三ノ窓に飛び出した。ジャンダルムの基部でザイルワークを練習中の、中山、田村、関口三名に声をかけ、天場を探すが良い場所がなくしかたなしに雪渓にテントを張った。荷物を整理した後、中山(泰)田村、関口は小窓ノ頭へ、風間、山下(京)、山下(裕)はチシネへ向かう。

## 剣岳池ノ谷左俣～三ノ窓定着

### ～早月尾根下山

(昭和六十一年度夏山合宿 B隊)

日付 八十六年八月十三日～十六日

山名 剑岳

参加者 中村(泰)L、風間、

山下(京)、田村、山下(裕)、関口(中山)

筆者 山下京一

八月十三日 晴れ

魚津で中村氏と待ち合わせ、タクシーで馬場島に入る。

前日までガラガラだった我々の周りは、今日はもうテン

トだらけとなつた。張り綱に注意しながら登攀具を着けテントを後にする。今日は風間、山下(京)でチンネ、他のメンバーやは尾根上半と分かれての行動である。

前日に引き続き我々が運動靴でヒヨコヒヨコ歩いている

と、他のバーティはアイゼン、ピッケルで雪渓をトラバースしている。そのうち傾斜も増してくると、二人とも青息吐息で左稜線の取付へ下つた。なんとまあ、既に十五～六人の順番待ちしかも手前は急峻な雪壁だめだこりやと、ルートを変更すべく草付きを直上した。

左下カンテの取付はここだろうと見当をつけて登攀を

開始する。二匹で、フェースからハングをアブミで越え、ボルトでビレイ。アブミは二台しかないので、ザイル伝わらせてセカンドの風間氏に渡した。上を見るとホールドの細かいカンテが白い岩の右に続いている。このピッチは楽しいが難しかった。ビナクルを越えると、T5のにぎわいであった。我々は左稜線のバーティの間に、ちやつかり入り込んでしまつた。我々の後のバーティに付き時間を尋ねると、五時半とのことであつた。我々は六時半の取り付きであるから、およそ一時間も稼いでしまつたわけだ。こんなにうまく左稜線に入れるとは思いもよらなかつた。

ルートは中央チムニー。テントより三ノ窓雪渓上部をトラバース、草付を登つた取付でアンザイレンした。山下(京)がトップで風間、山下(裕)を同時に確保するという、得意の方法で中央バンドまで登る。チムニー右のカンテ沿いに良いホールドが沢山あり実に快適。中央バンドでゆっくり休み、トップを風間氏に交替、aバンドへと登つた。このバンドの高度感は素晴らしい、スッパリと切れ落ちて、いやがうえにも気分は盛り上がる。bクラックよりチンネの頭に飛び出し登攀終了。実に爽快な登攀だった。夜は全員で「大貧民」をやつて大いに騒ぐ。

例によって下品な冗談をとばしながら、T5のすぐ上のフェースに取りく。何とかオールフリーで登ろうと思ったが、いけない、いけないと思いつつ、もう左手はハーベンを掴んでハングを越えていた。すさまじい高度感に身震いがするようだつた。両面はまさにスッパリである。運動靴が心地よく岩をかみ、ザイルはどんどん伸びていった。天空まで続くかに見える岩壁に手は自然にホールドを探す。

ナイフエッジにザイルが伸び、小窓ノ頭が雲間に霞む中、

満ち足りた思いでザイルを解いた。ガラ場を下るときまで、まだ心が浮き立つ思いだつた。

テントの中でラーメンをすすり、他のメンバーを待ちながら昼寝をする。鶴尾根より帰ってきた仲間の声を聞き、急いでシユラフから出た。次はジャンダルムへ全員で出かけた。ああでもない、こうでもないと云いながらルートにもなつてないところを強引に登る。田村、関口両名は慣れないせいか幾分ぎこちないが、不安のない登攀で登りきつた。

テントに戻り、残ったものもありつたけ使った夕食を済ませ、ウイスキーをやりながら、中村(泰)の美声に聴き惚れつつ、二ノ窓の夜は更けていった。

#### 八月十六日 晴り、小雨のち晴れ

昨日下ったガラ場をゆっくり登り、ガスで何も見えない稜線を慎重に歩く。鶴岳頂上で記念撮影。写真を撮るのも順番待ちという程のにぎわいであった。これより早月尾根をたどひたすら下る。伝藏小屋の手前で雨に降られたが、すぐに止んでしまった。足にマメを作つてカニ歩きをしている者も若干いたが、二時に馬場島着。タクシーが来るまで陽射しの強いキャンプ場で昼寝をきめこんだ。

魚津で寿司を肴に酒盛りをして、夜行列車で帰途についた。

### 八十六年度会・個人山行より 小仙丈沢溯行～仙丈岳

#### データ

八月十三日 晴れ

馬場島 7:30～小窓尾根 1600メートル地点 11:00～富山岩屋手前(TS) 12:00

八月十四日 晴れ

TS 6:30～三ノ窓 11:00

八月十五日 晴れ

三ノ窓 7:30～左カント～左棱線上半～ジャンダルム～三ノ窓 16:00

八月十六日 晴り、小雨のち晴れ

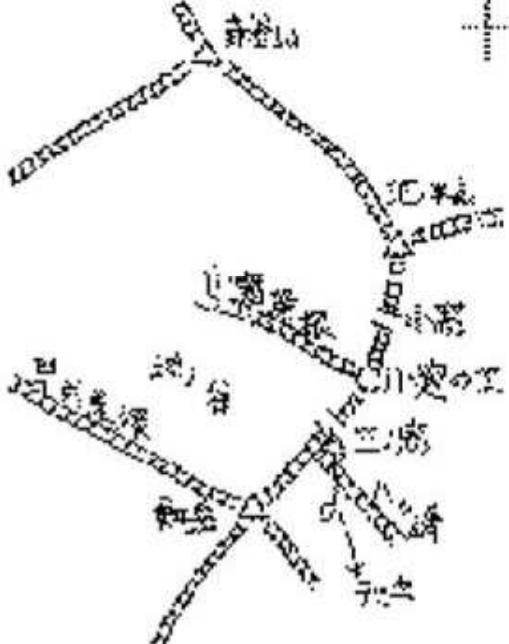
三ノ窓 6:00～馬場島 12:00

日付 八十六年八月十六日～十七日  
山名 仙丈岳  
参加者 秋田誠一、石井  
筆者 秋田誠一  
八月十六日 晴れ、夜小雨  
仕事の都合がどうしてもつかず、鶴合宿に参加できなかつたので、同じく置いてけぼりをくらつた新人の石井を誘い、前から気になっていた小仙丈沢に入つた。前夜、広河原までは石井のバジエロで入り、朝の林道を北沢出合まで、よもやま話に花を咲かせながら歩いた。

小仙丈沢は明るい沢だ。歩合から三十分程ゴーロを行くと小滝(四メートル)が現れ、左から越す。滝上でワラジを着けた。ワラジの紐を締めると、心も引き締まる。この小さな滝の滝壺でイモリを見つけていたので、イモリ滝と呼ぶことにした。

平凡な沢をさらに四十分程行くと、十五メートル二段の滝が現れた。右壁を登り滝上に出ると、ようやく沢はまとまりをみせ始めた。連続する、いずれも五メートル程の小滝を六つ越えると、大滝二十メートル四段が水量豊かに行く手をふさいだ。滝の下で休みながら、ルートを目で追つた。三段目までは比較的容易に登れそうだが、最上段の五メートルが両壁とも垂直かつ逆層となつており、人工登攀以外には登れそうもない。そこで滝の右岸の壁を登り、上部でリフジ状の部分に出て落口にトラバースした。上部は岩が脆いので念のため二十メートル程アンザイレンした。

大滝の上流はまた小滝が続き、ワラジに伝わる水音の感触が楽しい。本流と思われる流れを辿ると、やがて沢はせせらぎとなり、小さな岩の下に消えた。そこは岳樟の疎林とお花畑の境をなす所であった。僕たちはワラジをジョギングシューズに履き替え、小休止の後、お花畑を横切り小



鳥居川流域概観図

仙丈上側に隣合う流れに入った。流れはここからさらに高度差にして一〇〇メートル程上まで続いている。水の流れを少し辿ると小仙丈のかーるであった。

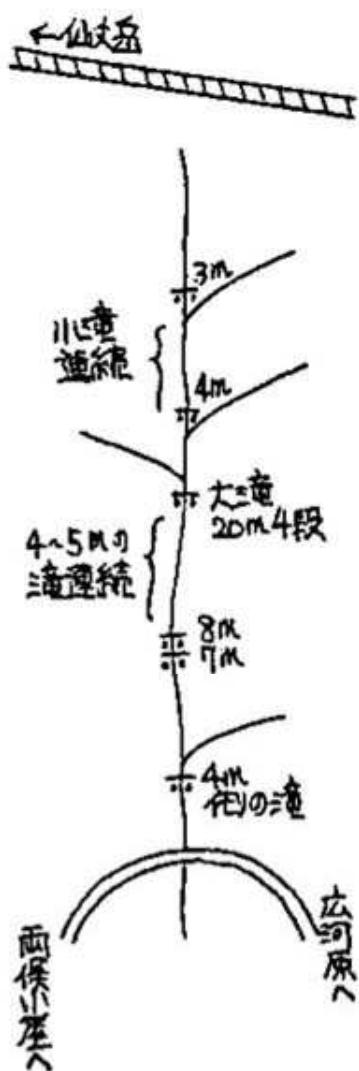
なんという静けさ、そして清らかさ。僕は嬉しくなってしまった。長年憧ってきた小仙丈カール。少しも僕の期待を裏切らなかつた。一面のチングルマの絨毯。誰かのとつておきの秘密の場所に踏み込んでしまつたような感じだ。

次は雪のある時期に来よう。そして、ここに主に申し訳ないけれど、一晩だけ過ごそう。

大仙丈沢の下降点は足の踏み場もない程のお花畠。懸命に下ると、やがてガレからハイマツが現れ、さらに一時間も下ると流れが現れた。再びワラジを着け水流に沿つて下降を続けた。ビバーク地を探しながら下るが、なかなか適当な場所が見つからない。十七時半近くになつてようやくビバークできそうな所を見つけた。

夕食の支度をしながら豪勢な焚火を楽しんでいると、小雨が降ってきた。おかげで薪で炊いた御飯はフイになつてしまつたが、ツエルトの中で飲んだビールは最高の味だった。

八月十七日 曇り、時々霧雨  
雨はたいしてこともなく上がり、濡れて不快な思いをす



ることもなく夜を過ごせた。ツエルトをめくると、昨日からずっとガスの中にあった北岳が真正面に見えた。ほとんど沢通しに下り、約一時間で野呂川林道に出た。

予想外に早く林道に出てしまつたので、大仙丈沢の出合で、石井にザイルワークの練習を一時間程してもらった。

北沢出合でちょうど下つて来たバスを拾い、広河原に戻つた。

小仙丈沢は難しい滝こそないが、長大で、終了点は三〇〇メートルの稜線まで延びている。新人をスケールの大きな沢に慣らすには格好のルートである。

データ

八月十六日 晴れ、夜小雨

広河原 6:00 ~ 小仙丈沢出合 7:40 8:10 ~ イモリの滝上 8:40 ~ 小仙丈カール 12:50 13:20 ~ 仙丈・小仙丈間の縦走路(二八〇〇メートル付近) 14:20 ~ 仙丈岳 14:50 15:00 ~ 大仙丈沢 下降点 15:05 ~ 大仙丈沢 17:30 18:00 ~ 大仙丈沢出合 18:20

八月十七日 曇り、時々霧雨

B・S 9:00 ~ 大仙丈沢出合 7:50 9:10 ~ 広河原 10:15

八十六年度会・個人山行より  
西ゼン～平標山

(昭和六十一年九月度会山行C隊)

日付	八十六年九月十四日
山名	谷川岳 西ゼン～平標山
参加者	秋田誠し、池上、関口
筆者	秋田誠
天候	曇り

平標新道分岐からワラジを着け遡行を開始した。雲行きが怪しいので、スラブ帯ができる限り早く抜けなければならぬ。はつきりしない天気のせいか、日曜にもかかわらず谷川居北面のこの沢は静かなものだ。我々の他には、谷川岳まで縦走するという雪稜会の若い女性二人のペアのみであった。

西ゼン出合から続くスラブ滝は左岸の踏跡をたどり通過し、第一スラブ出合の滝下に出た。この滝は十五メートル程であるが、傾斜があり上部に大スラブが続いているので迫力満点である。ルートは右岸のみであるがやさしい。落口に出て上部を見ると、水量が多く岩は濡れて、いかにもいやらしい感じだ。通常第一スラブは流れに沿つて右岸側を登るのであるが、今日は落口から流れをトラバースしてスラブに入つた。登り易いところをたどつて行くと、次第に流れから離れ、左岸大スラブの中央部に出てしまつた。

西ゼンでは流れから離れる程登攀は難しくなる。新人がいるので慎重にザイルを使い、下降ぎみにスラブをトラバースして流れのすぐ左岸に戻つた。以後はザイルを使うこともなく、およそ一〇〇メートルの登攀で第一スラブを終了した。

第二スラブは左岸の草付から取り付き、不安定かつ不明瞭な踏跡をたどり、スラブの中央に出た。さらに水流を横切つて、右岸のやや斜度の増したスラブ一五〇メートルを一気に登り、両岸の狭くなつた、第二スラブ最後の滝(二〇メートル)を右岸からトラバースぎみに登り、落口に抜けた。この滝は傾斜があり、また岩の脆いところもあるが、

ホールドが豊富で容易だ。しかし、二〇〇メートル以上の大スラブの最上部にあるため、素晴らしい高度感で油断はできない。第二スラブを越えると急に沢は迫力がなくなり、緊張感もどこかへいってしまう。平標山で一本入れ、赤谷川と笛六沢バー（テイ）の健闘を祈りつつ元橋に駆け下った。

データ  
土樽6:30～西ゼン出合9:50～10:00～第一スラブ終了11:30～平標山13:50～14:10～元橋15:30

## 八十六年度会・個人山行より

### 種池新道～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳

(赤岩尾根下山)

日付 八十六年十一月一日～三日  
山名 爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳  
参加者 中山L、畠岡、石井、田村、  
宮里正代

筆者 宮里 正代  
十一月一日 晴れ

扇沢から見上げると、稜線は雪をかぶり、太陽の光を浴びて白く輝いていたが、山すそには秋の気配が満ちており、冬の訪れにはまだ間がある様子である。

登山口からジグザグした登りがしばらく続くと、やがて連華、針ノ木が姿を現した。眺めの素晴らしさは私達の疲れを癒してくれるようであった。

種池山荘で大休止 私は疲れで元気を失いかけていたが、これからこの道のりを目で追うと、なだらかな登りと下りだけなので一安心。爺ヶ岳へ出発。中山さんは足が怪しそうに前へ前へと進んで行く。私は足が重たくて、かなり間をあけてしまった。爺ヶ岳の山頂からは遠くの山々の姿がくっきりと見えた。朝から歩いてきた道のりを振り返り、ここまで来たんだなあと思うと、自分に「偉い！」と言つてしまつた。これから二日間頑張ろうと心に誓つた。

どうにか冷池山荘に着いたが、中山さん以外は元気がない。今にも泣きそうな顔をしてボーッとしている。中山さんが紅茶のカップを差し出しててくれた。けれども私は、バー（テイ）がいくつも入り、眠やかだった。私は小屋のわきにテントを二張設営した。

夜中に突然、ドサーンと雪の落ちてくる音がした。どこに落ちただろうと思いつながら寝返りを打とうとしたが、身体が重たくて動かない。シュラフから顔を出すと、テントが雪に潰されて私の身体の上に乗っている。私はうめき



谷川岳周辺概念図

声を上げ、やつとのことで這い出した。中山さんもびっくりした様子だった。私の寝ていた側だけが、小屋の屋根から落ちてきた雪をまともに受けて潰れてしまったのだ。隣のテントに眠っている仲間は気付かないのか、声さえ掛けてくれない。雪を取り除き、何とか眠れる状態にして、私は不安なまま再びシユラフにもぐり込んだ。

### 十一月二日 晴れ

昨夜の騒動の疲れが残っていて、食事はあまり喉を通りなかつた。出発前からバテバテそうな予感がしたが案の定少し歩いただけで不調になつてしまつた。テントに返してもらおうと、口実を考えながらうつむいて歩いていたがなかなか言い出せなかつた。それでも何とか鹿島槍南峰にたどり着くと、大パノラマが楽しめた。白馬剣八ヶ岳、南アルプス、富士山……。これだけ眺めが良いと苦しいことも忘れてしまった。元気が出てきた。

北峰へ続く岩稜は二十センチ程雪が付いており、ト

レールは全くなかつた。ここで転んだらおしまい。中山さんのステップを新人一同慎重に追い、ピッケルの使い方の講義を受けながら、あつという間に北峰に着いた。

行動食をあまり持つて来なかつた畠岡さんがお腹を空かせて騒ぐのを見て、リーダーが「情けない！」と漏らすことしきりだった。帰りはトレールがしつかり踏み固まつたので、安心して歩くことが出来た。

冷池に戻り、テントを安全な場所に移動させた。昨夜被害を被つたのは私達だけ。まったく不運だった。一通り整理を済ませ、テント場の見晴らしの良い場所で酒盛りをした。

### 十一月三日 晴れ

冷池乗越で山々に別れを告げ、西俣出合へと一気に

下つた。赤岩尾根はとても急な尾根で、時折ハツとするようなクサリ場やハシゴが現れ、変化に富んでおり、かんなか天候に恵まれた二泊三日、雪の量も私達の歩行訓練に丁度で、良い山行であった。

天候に恵まれた二泊三日、雪の量も私達の歩行訓練に丁度で、良い山行であった。

データ

### 十一月一日 晴れ

種池新道取付き7:00～種池山荘10:55/11:55～冷池山荘

十一月二日 晴れ  
冷池山荘7:25～鹿島槍ヶ岳北峰10:30/11:00～冷池山荘  
13:00

十一月三日 晴れ  
冷池山荘7:15～西俣出合9:45

13:00

八十六年度会・個人山行より

### 白毛門岳～谷川岳

(昭和六十一年十一月度会山行A隊)

日付 八十六年十一月二十三日～二十四日

山名 白毛門岳～谷川岳

参加者 中山L、秋田誠、新井

筆者 秋田誠

十一月二十二日

曇りのち小雪、夜になつて晴れ

合理化で土合は無人駅となつたのに、その周辺には二軒もスキーコンペティションが建つた。なんと皮肉なことだ。白毛門の取付きでタクシーを捨て、身支度を整えた。

雪は思いのほか少なく、しばらくは厚く積もつた落ち葉を踏みしめひたすら登つた。東黒沢の滝場が遙か足元に見える頃、ようやく尾根は初冬の気配を見せ始めた。何回目かの休憩の後、僕達は樹林限界を越え、「ノ倉沢を湯檜曾川の向こうに望んだ。上部岩壁から国境稜線は厚い雲が覆つていて見えなかつた。夏道とおしに瘦せた稜線をたどり、露岩をいくつか越えると、そこはひつそりとした白毛門の頂上であった。

明日からの長い道のりを考えると、笠ヶ岳あたりまで進んでおきたいところであるが、今日は出足が遅かったので、



爺ヶ岳周辺概念図

頂上を下った最初のコルで泊まることとした。

新人の新井は露岩の乗り越しで少しもたついたものの、結構余裕を持って登っていたようだった。夜はピールで無事の入山を祝った。

十一月二十三日 晴りのち快晴

テントをたたむ時は曇っていた空も、歩き始めるとたちまち晴れ渡り、ピーカンになってしまった。朝日岳までは長い長い雪の稜線漫歩だ。笠ヶ岳を越した告げのピークで先行の二人バーティーとすれ違った。朝日岳を往復して來たらしい。

夏にはこの辺り一帯はお花畠で、可憐な花達が咲き乱れ水さえ湧いているのだよなどと新井に話すと、こんな高い所で?と驚いていた。朝日岳では巻機山から中ノ岳、そして平ヶ岳へと続く雪の上越国境の景観を満喫した。

ジャングルショーンピークからは、清水峠めがけて一気の下りだ。視界の悪い時は気を使うこの下りも、今日はルンルン気分だった。下り初めの五十メートル程であろうか、ナイフリッジが続いたが、すぐ幅広い尾根の下りとなつた。午後の日差しを受けた雪面は、所々意地悪な落とし穴を用意して僕達を悩ませ、五〇〇メートルの大下りを終え、清水峠にたどり着いた。もう午後三時をすっかりまわっていた。そろそろ幕営地を探さなければならぬ時刻であったが、明日の下山を少しでも楽にするため、後ろ髪を引かれているので峠をあとにした。

蓬峠を目指して、クラストし始めた夕方の稜線をたどつたが、七小屋山直下で時間切れとなり、稜線の幾分か広くなつた所で設営することとなつた。夜、近くのコルを渡る風が騒がしかつた。

十一月二十四日

晴れ、前線通過のため一時曇り突風

強風にあおられたながらテントを撤去し、アイゼンを着け出発。昨日五時の交信で、平標山からのバーティーは万太

郎山で設営したことを見た。さぞかし風に吹かれて一夜を過ごしたことだろう。先が長いので、蓬峠の休憩もそこ

そこに武能岳の登りにとりかかった。ちょうどこの頃、前線が次々と通過し始めたため、僕達はしばしば立ち止まって風をやり過ごさなければならなくなつた。初めオロオロ

して、今にも風に飛ばされそうだった新井も、やがて何とか突風に對して安定した姿勢が取れるようになった。

笹平は雪稜となっており、無雪期のようなく心休まる所ではなかつた。茂倉岳の下りでは風も治まり、再び青空となつた。一ノ倉岳では一ノ倉尾根を登つて来たという三人バーティーと言葉を交わした。この寡雪ではきっとブッシュに悩まされたことだろう。

一ノ倉岳からはアイゼンを外して下った。武能岳の登りから極端に不調となつた新井は、その後も一向にペースが

回復しなかつた。そこで、谷川岳での集中を断念する旨、中村バーティーに連絡し、先に下山してもらう事とした。

ロープウェイの最終便に間に合わせるため、肩ノ小屋から、新井を空身にし、中山が付き添い天神尾根を一足先に下ることとした。秋田は新井のザックを担ぎ、後を追つた。

熊穴沢の避難小屋までは下りばかりなので何とか飛ばせたが、そこからロープウェイ駅までが辛かつた。二個のザックに振られ、バテバテになりながら、やつとのことで駅に着くと、中山が待つており、新井は無事最終便で帰宅できた。

このことでほつとした。中山によれば、帰りの電車貨とビックルだけ持たせ、とにかく帰したとのこと。なんだかかわいそうな気もしたが、朝帰りよりはましだろうということになつた。

牧野さん宅に下山の報告をした後、スキ一場の間にテントを張つて寝るという話も出たが、結局軟弱になり、この夜は天神ロッジに泊まつた。翌朝始発、とはいっても九時

ロープウェイで下山した。

ロープウェイから見る谷川岳の山肌は、十一月末とは思えない程雪が少なかつた。

データ

十一月二十二日

曇りのち小雪、夜になつて晴れ

東黒沢出合8:25～白毛門岳14:10～笠ヶ岳とのコル(T・S)14:30

十一月二十三日 曇りのち快晴

T・S 7:15～笠ヶ岳8:20 8:40～朝日岳11:00/11:10～清水

峰15:15/15:40～七小屋山直下(T・S)17:20

十一月二十四日 晴れ、前線通過のため一時曇り突風

T・S 6:00～蓬峠8:20 8:35～一ノ倉岳13:55/14:05～肩ノ小屋16:05～ロープウェイ駅17:10

八十六年度冬合宿より

## 剣岳

(昭和六十一年度冬期合宿 A隊)

日付 八十六年十二月二十七日～一月三日

山名 剑岳

参加者 中山法行 L、宮本武(装備)、

筆者 中村泰孝(食料)

《プロローグ》

「剣岳」、北アルプス北部、富山県側にある急峻な山岳。特に冬期においては前衛となる山岳がないため日本海からの季節風をまともに受け、高湿な重い雪が多量に降る。

その厳しさは、他で類をみるとこがない……。当会では、この山岳を二年程前に今回とまったく同じ特に冬期においては前衛となる山岳がないため日本海からの季節風をまともに受け、高湿な重い雪が多量に降る。

限つていえば二度目の挑戦となつた。

なお、各パーティの行動概要是、

A隊（小窓隊）

小窓尾根～劍岳～早月尾根

B隊（早月隊）

早月尾根～劍岳～早月尾根

と、なった。

十二月二七日（土）

夜九時半に大宮駅に集合。風間さん、中村（博）さんが見送りに来てくれる。

三人ともザックの重さは装備、食料の軽量化で二十七～八キログラム前後に平均化されたので、例年出発前に繰り広げられる荷物の押し付け合いはない。

九時五十分発の福井行きの急行で出発。

十二月二十八日（日）

雪の富山駅に朝六時に着く。私はここで定食屋の朝メシを食べようとしたが、せっかちな他の一人に引きずられ富山地方鉄道に乗せられてしまう。結局、上市に着いて電車から降りても真っ直ぐタクシー乗り場に行ってしまったため、私の朝メシは抜きになつた。

雨の中をタクシーは、伊折部落の先一キロの「劍岳青少年センター」まで入ってくれる。この付近には我々の他にも劍岳へ入山するパーティが出発の準備で二十人程、ガヤガヤたむろしている。我々もスパッツを付け、ザックを担いで出発する。

いきなり宮本が飛ばし始める。それに誘われてか、中村も同じように飛ばすので、「ゆっくり行こうよ！」と連発する。しかし願いも空しく、途中から他のパーティ十名と馬場島富山県警備隊派遣所まで無言？の激しいバトルを繰り広げる。

警備隊派出所十時着。

条例通り入山届けを済まして十時半発。早月尾根へのトレースと別れて我々は白荻川のトレースを進む。幸いにも

トレースはしっかりと付けられており、荷は重くても楽勝気分で歩く。

ほとんど五月頃のコースタイムでタカノスワリの取入口に着く。ここから赤谷方面のトレースが別れる。ここからはいよいよ気の抜けない行動となるので、我々も気を引き締めてタカノスワリに入る。

取水口堰堤の上の雪の河原で、水量の多い白荻川の水流を右岸から左岸に走り幅跳びのように飛び越し（宮本は何とか歩いて渡ったようだが）、第一関門は通過。ここは五月の雪の中、ジャブジャブ渡渉した冷たい思い出がある。

雪の量は少なく、この後も少ない雪で埋まりきらない歩きにくい河原をほとんど右岸通しに歩き、池ノ谷出合付近で二～三回水流を飛んで、何とか無事に雷岩に着く。一時半。ここで先行の関西登高会五人パーティと声を掛け合う。彼らは一六〇〇メートルのテン場まで一気に登るらしい。

しかし我々はここでテントを張ってしまうことにした。これは單にリーダーの私がバテていたためで、他の二人はすこぶる元気で、これからこの先の急登で二人にシゴかれるのがイヤだったためである。

しかし、ここでテントを張ったことが運のつきだった。昼ごろから降り出した雪は、前線の通過で夕方から翌朝にかけて五十センチメートル程の大雪となつた。

十二月二十九日（月）

すっかり雪に埋もれたテントを掘り出し、ワカンを付け腰まで潜る雪をラッセルしながら出発する。七時。

小窓尾根取付の急な斜面を新雪崩に注意しながら登る。

しかし平らな所で腰まで潜るほどの雪は斜面を登る時は、ひたすら頭上に雪があり、行程が全くはかどらない。

「あつ」という間に時間が過ぎ、一時間で一〇〇メートル程しか登れない。ひたすら雪の斜面に大きな深い溝を作りながら、トレースがあれば一時間ちょっとで登れる斜面を、

四時間かかって小窓尾根主尾根上に登る。

この頃より薄日が時々差しこみ、天気は回復する。

ここからの登りは相変わらずのラッセルだったが、頭上に雪面があるラッセルからは開放された分だけ、気分的に乐になる。しかし、荷は重いし、吹き溜まりでは腰まで潜り、尾根の広い所ではルートファインディングに気を使はないと、疲れた体には結構キツイ行動となる。

三人で交替にラッセルを繰り返し一六〇〇メートルのビーグに着いたのは午後二時だった。

ここには、前日にここまで登った先行パーティのテン場の跡が残っていた。また、ここから先は前日と同様にしつかりとしたトレースが付けられていた。

このトレースに気をよくしたのか、先頭を進む宮本が急に早くなる。中村がだいぶバテテいたのでなんとか彼の急ごうとする気持ちを押さえようと、展望のきく池ノ谷を右にみながら休憩を取り。

どこかのパーティだかわからないが、二人パーティが池ノ谷の谷底をラッセルしながら二俣目指して行動しているのが見える。

「あれは条例違反だな」「どこを登攀するのかな？」と会話している間にガスはどんどん上昇し早月尾根から劍岳頂上にかけて、展望が広がり歓声を上げる。

すでに太陽は早月尾根の陰に入り寒気が押し寄せてくる。とにかくトレースのあるうちに行動しておこうということでバテバテになりながら、一九〇〇メートルビーグ直下まで登り、テントを張る。午後四時。

富山の町の灯がきれいにまたたいている。明日の天気に期待する。

一二月三十日（火）

懐中電灯を照らしてテントを撤収して六時出発。

昨夜遅くからの雪と風で、我々の進む先のトレースも昨日たどつたトレースも全く残っていない。昨日と同じようにしか登れない。ひたすら雪の斜面に大きな深い溝を作りながら、トレースがあれば一時間ちょっとで登れる斜面を、ワカンを付けてのラッセルとなる。

しかし昨日までのラッセルと比べて雪が締まってきたせいもあり深く潜らなくなる。また気温も下がっているため

か雪が少し軽く感じられる。

三人無言でラッセルを繰り返す。約二時間で二二〇〇メートルのピークまで登る。ここには先行三バーティーがテントを張っていた。

我々のラッセルの音を聞いてか、みんなテントから首を出し雪の降る中どこまで行くですか?と聞いてくる。とりあえず「行けるところまで行つてみます。」と答える。

二一〇〇メートルのピークを過ぎ、コルへ下つたところでアイゼンに履き替える。

いよいよ小窓尾根最初の核心に入る。まず五〇メートル程の雪壁を上部から雪崩に注意しながら右寄りを登り、中段より右の小尾根の雪のハングの一番小さい所を崩して上部へ抜ける。

我々がここでラッセルとルート工作に時間をかけている間に二二〇〇メートルにいたバーティーが続々と追いついてくる。雪壁を抜けたところで後続のバーティーにラッセルを素直に譲る。関西登高会、凍稜会等合計十二名でラッセルを繰り返す。

体力的にはものすごく楽になつたが、進む速度は三人だけのラッセルの時より遅くなる。先頭がベースを守ってラッセルしているため、ベースなど関係なく馬力で雪を押すようになり、疲れたらどんどん交わればもつと早く進むのだけれど、と思いながらトレースをついて行く。

途中ニードルへの細いリッジ手前で中村が先頭でラッセル

している時、「あ!」と言う声と共に白秋川の雪庇が中村と共に崩れ、中村の姿が視界から消える。

一瞬、「やつちやつた!」という言葉と共に、激しい動搖が私の胸を打つ。

幸いにも五メートル程下の木に引掛かって安定した中村を発見した時は助かった。と内心思い、あわてながらザイルを出し、上に引き上げる。怪我の有無を確認し、気を取り直して一層慎重に行動を開始する。

ニードルは下部のリッジをサイル二ビッチでクリアし、ニードル本峰はトラバースルートを選ばず、まっすぐ直上、

してニードルピークの二〇メートル程下部に出て、白秋川側の雪面をアンザインでドームとのコルに下る。

ドームのコルからはまた急な雪壁と草付をアンザイン二ビッチで軽くクリアする。

ザイルはいらないのではないかという意見もあったが、慎重を期してザイルを使用する。十二時にドーム頂上に着く。

相変わらずガスは濃く、視界は全くきかない。白秋川側に張り出した雪庇に注意しながらピラミッドのコルに下る。

ピラミッドはその名通り黒っぽい草付きの三角形の壁に所々雪を付けている。

ここで我々のバーティーが、またも先頭になってしまい、宮本がトップでアンザインしながら黒い壁の雪を払い落としながら登る。荷が重いせいか、いつもより慎重に登っている。

やがて彼の姿が視界から消え、私、中村の順で登る。スタッフでの登攀は一ビッチのみで、後は宮本と中村でザイルを組んでもらって、私は慎重にノーザイルでトップを進む。

キックステップのきく雪壁だとはいえあまり気持ちの良い事ではない。

途中で早月尾根に入山した牧野隊とトランシーバー交信をとる。

慎重にピラミッドのピークまで登り、反対側のマツチ箱のコルに下る。このコルにはなんと馬場島を十二月二十二日に出発した法政大学バーティーがテントを張っていた。我々も時間が時間でということで、ここにテントを張る。

午後三時。

十二月三十一日(水)

一月一日

朝五時起床。外は相変わらず吹雪。キジを打ちに外へ出る。夜半の寒冷前線通過で風向きが変わり、テントは半分位埋まっている。しかし風は強いものの突風が吹かなくなつたので行動することを決意する。

他の二人は一瞬不安そうな顔をするが「冬の朝はこれが普通なのだ」ということで納得してもらう。それでも納得しない宮本は他のバーティーのテントに出かけて情報を集めている様だったが、テントを撤収し終わるとあきらめたらしく、だまつてアイゼンを履き始める。

テント場からスタッフカットでアンザインする。四〇メートルザイルをのばすと声は全くとどかず、なんとかお互いの姿を確認して身ぶりでコールし合う。

昨日の気象通報で、前線をもつた低気圧が日本海を北上して来ているのがわかつっていたので、一部の先に進みたいという意見を押さえて停滞する。

入山四日目で、体もだいぶ疲労しているので、体力回復も含めて停滞する事も含んでいるのはもちろんのことである。

特にマツチ箱のコルの先、水平リッジでは強風のためザイルが四〇メートル目いっぱい空中を舞うほどで、とにかく雪が痛くて風上に顔を向けられないところが続く。

クスが一部出ていたので、それを掘り出しておおいに利用する。

リッジを五匹チ程でぬけ、最後の核心、マツチ箱の雪壁へ向かう。雪壁といつてもここは急なルンゼの中に多量の新雪が吹き溜まつたところで六十度位の傾斜があり非常に緊張する。

雪を徹底的に落とし大バケツを掘って登る。四〇メートルいっぱいクリアする。ここまで一時間半、休憩するのも忘れて行動する。

やつと小窓尾根の核心を抜け、小窓の頭へ続く広いリッジを雪庇に気をつけて登る。

途中で牧野隊と交信を取り合い十二時に小窓の頭に着く。

なんとここには前日にマツチ箱のコルを出発した凍稜会の二人ペーティーが雪洞を掘って泊まっていた。なんでも、

前日の小窓の頭付近は突風は吹き荒れるわ雷は落ちるわ、雪はめちゃくちゃ降るわ、大荒れで動けなくなり必死で雪洞を掘ったそうである。

たしかに風下側の新雪の量はかなり多い。表層雪崩に注意して小窓の頭を下る。小窓王の基部までは三つのピークがあり、大きな登降をしいられ、おまけに二つ目のピークで夏にデボしたガソリン三リットル+αを回収し荷を大きくしての行動は疲れる。風の強い稜線は雪がカチカチに凍りアイゼンの先端がやつと入る様な所がかなりあり、緊張させられる。

それでもなんとか小窓王の基部へ着き三ノ窓にトラバース下降する。ザイル四〇メートル二匹チ。  
三ノ窓着二時半。

このころより天気が回復しガスが切れ、太陽が顔をのぞかせるが、相変わらず強風が池ノ谷から吹き上げる。チネジヤンダルム、小窓王がまっ直で大迫力 テントを張つ

た跡が一ヵ所あるだけで、我々の他にはだれもいない。雪面は一面のシユカブラ、白馬、五竜、鹿島等後立の山々もまつ真な姿を見せてている。「これが冬の三ノ窓なんだ!」といつた感じ。

我々がテントを張つていると、マツチ箱のコルにいたペーティーが続々三ノ窓に入つてくる。

とにかく寒いのでテントを張つて中に入る。他の二人も同じだが、僕の足は凍傷にかかつたようだ。特に風上側になつていた右足がひどいようだ。幸い凍傷とはいえ体を内と外からあたためてやるとなんとか感覚だけは戻るがそれでも何となく足は冷たく、個人的に内心ビビる。

回収したガソリンを大いに燃やし、テントを暖めないと寒くていられないくらい気温が下がる。

この夜は寒さであまり良く寝ることが出来なかつた。

一月二日(金)

七時出発。風はすっかりおさまつたが、何となく上空のガスが濃くなる。しかしそれでも後立山の山並みから登る朝日を見る事ができる。

池ノ谷ガリ一を登る。

下部は裏勝で登つていたが、上部はダブルアックスを使いつたくなるような堅い雪(氷?)となりアイゼンのツアッケだけで登るような所があり緊張する。三人とも息をはずませ必死になつて登る。落ちたら絶対止まらない場所だからである。池ノ谷のコルまで四十分。コルで一息つく。このころよりガスが巻き始め、雪がチラ着き始める。

トトルザイルに絡がる(このアンザイレンを称して一連托生

トトルザイルと私がトップとラストでザイルを固定して四〇メートルずつ行動する。小窓隊三人の時に比べめちゃくちや時間が掛かり始める。

特に早月尾根上部のカニのハサミより上では、先行ペーティーがもともと行動している事もあって、吹きさらしの稜線での時間待ちと行動する時間が同じくらいになる。とにかく時間と共に風は強くなるし、吹き上げられる雪とガスで視界がきかない上に、メガネに雪が付き、メガネが役に立たなくなり閉口する。

我々がコルで小休止していると頂上から法政大学の出向ペーティー二人がザイルを使って雪壁状の斜面を降りてくる。我々は、彼等が斜面を下り切るのを待つて行動を開始九時半。

する。この斜面は本当に急で、新人とか雪に慣れていない人がペーティーにいる場合は絶対にザイルを使用しなければならないと思う。しかしメンバーがメンバーなのでザイルの使用は全く考えられなかった。

落ちたらおしまいなので緊張して雪壁を上る。二十分程度で雪壁を抜け、頂上に続くなだらかな稜線に出る。この稜線を十五分程たどると人が群がつている頂上が見えてくる。

先頭の宮本が頂上に向かって渓谷コールを送つたが全く反応が無い。牧野隊は下山したものと思つて頂上へ歩いていくと、渓谷コールが来る。なんと恐ろしい。偶然にも牧野隊の四人(牧野さん、中田会長、石井君、宮里さん)がいるのである。早速みんなで握手を交わす。

頂上はガスと風で視界はきかなかつたが、みんなそれぞれに苦労を重ねた登頂と、偶然の別ペーティーどうしの再会で、私の感激にもなかなか内部からこみ上げてくるものがあつた。

冬の剣岳の登頂と頂上での別ペーティーどうしの再会、天然气は悪かったけれど私の心は晴々していた。

頂上で登頂の感激を充分味わつた後に寒くなつて來たので下山を開始する。オーダーは、先頭から牧野、宮本、右井、中村、宮里、中田、中山とし、安全を期して全員で四〇メートルザイルに絡がる(このアンザイレンを称して一連托生アンザイレンと言います)。

牧野さんと私がトップとラストでザイルを固定して四〇メートルずつ行動する。小窓隊三人の時に比べめちゃくちや時間が掛かり始める。

特に早月尾根上部のカニのハサミより上では、先行ペーティーがもともと行動している事もあって、吹きさらしの稜線での時間待ちと行動する時間が同じくらいになる。とにかく時間と共に風は強くなるし、吹き上げられる雪とガスで視界がきかない上に、メガネに雪が付き、メガネが役に立たなくなり閉口する。

たつぶり時間を持つて、慎重に下降する。二七〇〇メートル付近でアンザイレンを解除し、一息つく。

ここからも、あいかわらず強風の吹く尾根だが、巾も広くなり雪庇にさえ注意すれば安全に下降できるようになる。やつと伝藏小屋付近のテントサイトに着く。三時半。便所のとなりの整地された雪面に便所のにおいを我慢してテントを張る。この夜は、牧野隊よりありがたい差し入れを受け、感謝しながら打ち上げを三人で行う。牧野隊は四人とも疲れたと言つて、早々に寝てしまう。

夜半に雨が降る。

一月三日(土)

早朝の雨で、早月尾根の下降が思いやられる。途中で石井君がテントを立山側の斜面に落としそれを回収したり、宮里さんが雪にはまり動けなくなつたのを助けたりして、それなりの下降を続ける。

途中まで降っていた小雨も何とか上がりみんなで汗をかきながら、何日か過ごした剣という山の余韻をかみしめながら下降する。

## 剣岳

(昭和六十一年度冬期合宿 B隊)

日付 八十六年十二月二十七日～一月三日

山名 剑岳

参加者 牧野、中田、石井、宮里

筆者 牧野要雄

十二月三十日

八十六年度冬合宿より  
年明けの慌ただしさをやつと逃れて、飛び乗った夜行列車では、いつもの宴会も早々に眠りにつく。

眼の目を擦りながら降り立った上市は、まだ夜の帳につつまれた上に、冷たい雨までも降っていた。朝食を取りた

が冬の朝に思いを寄せるようになつてから五年目で念願の登頂を実現した。

山から戻り、社会人としての生活に戻つて考えることは、現在の当会のレベルでは最高難度の合宿を企画、実行できることに対する会員みなさんの協力への感謝である。

（エピローグ）

当会が剣岳山頂を目指し始めてから三年、そして私個人が冬の朝に思いを寄せるようになつてから五年目で念願の登頂を実現した。

山から戻り、社会人としての生活に戻つて考えることは、現在の当会のレベルでは最高難度の合宿を企画、実行できることに対する会員みなさんの協力への感謝である。

後日談になるが、小窓付近で遭難したバーティーの情報提供をTELで求めてきた富山県警備隊の話によると、この正月前後の剣岳登頂パーティ一数は入山百バーティーに対し、わずか十四～五バーティー、小窓に限つていえば我々も含めて五バーティーのみだったということであった。たしかに気象の変化の激しさは、我々が経験した冬山では一番きびしかったと思う。

このように激しい条件の中を今まで共に苦労してきた先輩方や後輩達と登頂を果たした事は非常に大きな喜びである。

この山行をお互いに一つのステップとして次の大きな山行への自信としたい。

最後に、下山日が予定日より一日遅れ、風間さんをはじめ会員家族のみなさまに御心配をお掛けしましたことをお詫びいたします。

十二月三十一日

ただ、ただ、真っ白い世界で、山も空も無く、足下の雪を見つめて重い足を運ぶだけの長い一日でした。石井君の高度計を信じて、あと何メートル、まだかの一日でした。(高度計の高度修正ミスだった

ようです)

やつと辿り着いた伝藏小屋は、強風が吹き荒れ寒々とした所で、数張りの先客のテントが白く飾られていました。われわれもこれから数日間のマイホームを建設(布切れ一枚(いや一枚かな)でもさすがに、我が家は風にそよぐけど暖かい)。早速明日の好天を祈つて、まずは一杯。

一月一日

我らの祈りも及ばず、ラジオで得た情報のとおり、雨と雪が朝から店はまだ開く気配も無く、しぶしぶタクシーに乗り込んだ。暖房の温もりに釣られて、また深い眠りに…、「つきましたよ！」と邪険な声に起こされた所は、やはり伊折。あわよければ馬場島までとの淡い夢は吹き消され、雨の中に我々を残して、赤いテールランプを見せてタクシーは走り去つてしまつた。

一月二日

昨夜、東の間に見た星空の黒いシルエットの山並みを期

身支度も早々に七時半に出発。冬山が始めての若い二人は心逸るのか、ロートルを引き去りにして、休みをとらずに飛ばすこと、飛ばすこと。

雨もやつと上がつた馬場島に十一時に着く。ここで幕営を設立したが、まだ先が長いので、渋々登山届だけを提出して馬場島を後にすること。

（NHKが入山者が少ないせいか、我々をモデルにカメラを回したいとの強い依頼がありましたが、顔に自信のない面々はそそくさと逃げ出しました。後ろ姿には自信がありますから）

予定の幕営地、松尾平にやつとのことで三時半着。さあ一入山第一夜、好き焼きで一杯、うまかった～。(疲れ過ぎて余り飲まずに眠ってしまった人、飲み過ぎて振られた人、色々ありました)

待して、「今日こそアタック」と意気込んでテントを飛び出したが、白いカーテンに閉ざされて剣岳の姿は見あたりません。ところどころ有るフィックスロープに助けられながら、ただだ上へ上へ、時間がだけが無情に過ぎる。登頂が遅れるとホワイトアウトに捕まり下降路が断たれる恐れが、心をよぎるようになる。

あせりを感じながら登っていたら、雪の中に人影が現れた。彼らはルートに行き詰まつて立ち往生している模様である。我々も出発以来始めて休息する。ルートは上方に稜に登るか、壁下をトラバースするかで他バーティも迷っている。

行動食を一口入れてから、稜上にルートを取る。(ここが力二の横ばいであった)小さな四状の壁を抜けて岩稜を行くと、すぐ上で下山者に出会う。ルートを尋ねるとすぐそこが山頂との事、意を新たにして登り出すと、小さな社が雪と氷に包まれて、人待ち顔に吹雪の中から現れた。十時十分着。ここが剣岳山頂? 寒い寒い、しかも視界は数メートル。せめて記念写真一枚と、凍える手でもそもそも力メラを出していたら、白い世界からほつと黒い人影が突然現れた。それが待ちに待った小窓バーティであった。無線交信も出来ずにお互いの行動がわからないバーティが十分も違わず山頂に辿り着くなんであまりにもグッドタイミングである。

さあ下山、もう山頂には何の未練もない。ザイルを出して慎重に下降開始。視界もきかず、トレイスも消え分かり難くなつた往路を頭数が増えた心強さに助けられて、一気に下山。やっぱり大勢はいいな~。帰り着いた伝蔵小屋のわが家は雪にすっぽり埋まっていた。休む間もなく小窓バーティのテント設営と除雪にかかる。登りは四時半、下りは五時半の一日でした。

一月三日

昨夜は、強風と雨に悩まされる。朝の明るさで見るあります、強風に立ち折られた木々の枝が辺り一面の雪面を

汚している。強風に打たれたわが家のテントはいつのまにか高台の高級住宅になっていた。自然は本当に恐ろしい。八時半、雨が上がつたので下山。山が好きで入山した剣だが、登つてしまえばやはり町が恋しい。雨を吸つた雪はよくもぐり足を抜くのが苦しいが、下界が近くなるにつれ、足は軽くなる。

ぱらついていた雨が馬場島に着いた時は本降りになる。チーフリーダーがタクシーを予約している間に各々が三三五五に下山する。雨の中をただひたすら、伊折まであとどのくらいかを頭に思い浮かべて足を運んでいたら、雪をけちらしながらタクシーが馬場島へと上がって行く。しつこく馬場島にいた人たちはほとんど歩かずにタクシーの乗客となり、早とちりにも雨の中に飛び出した者は必ずぶぬれでタクシーへ。

下着を買い込み上市駅前の温泉に漬かると、やはり下界はいいな~としみじみ思う。山と別れきめ人は富山で一杯やつてから夜汽車に眠る。人恋しい人は滑川より特急列車で待つ人の所へ。むろん私は後者です。

合宿では剣の姿を一度も見る事の無い山行でしたが、暗い雲に閉ざされた剣の山々を、曇るガラスを拭きながら返り見つつ、鉄路の人となる。

八十六年度会・個人山行より  
谷川岳 東尾根

日付 八十七年三月二十一日～二十二日

山名 谷川岳 東尾根

参加者 山下(京)、宮里

筆者 山下京一

陽が東の空高く昇つた頃、一ノ倉出合着「一」ノ沢中間稜ってどれだ?」と風間氏の質問に「ホレ」と指さす中山チーフ。「うそだろ~!」とわめく風間バーティの尻をたたいて雪面を歩き出す。三々五々、各バーティと別れ、登るにしたがい傾斜が増す。一ノ沢にうんざりする頃、上方



のガスが切れ同時にシンセンのコルに飛び出す。第二岩峰は左からかぶり氣味の岩を右斜上して雪稜へ出る。宮里は元気良くザイルにぶら下がつてくれるが何ということもなくクリア。ばつさり切れ込んだマチガ沢を左に高度をかせず、素晴らしい高度感を満喫しながら雪稜をコンテで進む。ツエルトを持ちながらボールを忘れたので、ビバークになるとやつかないので急ぐが、一、二ノ沢中間稜より登つてくるバーティと第一岩峰の下で順番待ちとなる。陽は国境稜線の後ろに消え、遙かな山波みを赤く染め始めている。

待つこと二時間通常は岩峰右下の雪壁から高巻く様だが、やつてから夜汽車に眠る。人恋しい人は滑川より特急列車で待つ人の所へ。むろん私は後者です。

合宿では剣の姿を一度も見る事の無い山行でしたが、暗い雲に閉ざされた剣の山々を、曇るガラスを拭きながら返り見つつ、鉄路の人となる。

データ  
出合7:30～シンセンのコル11:00～稜線5:30  
翌朝、六時起床、トマの耳で中山、風間両バーティと合流し雲一つ無い西黒尾根を「ビールだ、ビールだ!」と連呼しながら土合へ下山した。

18

八十七年度会・個人山行より

## 白馬岳主稜

日付 八十七年四月二十七日～二十八日  
山名 白馬岳  
参加者 中山L、畠岡、秋田  
筆者 秋田誠

四月二十七日（快晴）  
前日猿倉入りするも、終日雨のため猿倉山荘にて沈殿。

（一日中雨足を眺めて何もせず過ごした。暇のかたまりだぎや～）今朝ようやく白馬尻にテントを設営。膝まで潜る湿雪の大雪渓を息を切らせてトラバース（足が重い……）、末端のルンゼから主稜に取り付いた（ヤレヤレ）八峰につきあげているこのルンゼは、強い日射を受け雪面がかなり不安定になつたため、上部では四〇メートル二ピッチザイルを使用した（表層雪崩がオオコワ～）。八峰からは快適な雪のナイフリッジの登高となつた（シメシメ）。これから見上げると六峰へは痩せた急峻な雪稜がせりあがつており（登れるのかな？）再びザイルを四〇メートル六ピッチ使用して、慎重に登つた（なんだ大したことないヤ！）。

国境稜線はまだ通か彼方に雪煙をまいあげていた。ようやくツエルト一張り分の広さの六峰の頂上が今夜の僕らの泊まり場だ。夕暮れと共にクラストし始めた雪面に縫穴を掘り、その底にツエルトを張つた。大雪渓の向こうには長大な杓子尾根。首までのラッセルを強いらされたあげく、三日間も風雪に閉じこめられた学生時代の苦い思い出が鮮明によみがえつた。幸いなことに、風はほとんどなく、天気も上々で快適なビバークができた。

四月二十八日（快晴）

夜明け前にやや強い風が吹いたが、明るくなる頃には穏やかになつた。六峰から先は主稜の核心部となり、四峰までは不安定な痩せた雪稜が続いたので、部分的にザイルを使用した（エツチラ、オツチラ）。四峰は比較的安定したスノーピークとなつていた（ほつと一息）。二峰手前では雪稜

上に大きなクレバスが開いており（こわいこわい）、安全を期してトップのみザイルを使用した（トップはやだね～）。

## 鹿島槍ヶ岳 北壁

日付 八十七年五月四日  
山名 鹿島槍ヶ岳  
参加者 中山、宮本

五月四日  
トップで取り付いた。四〇メートルザイル二本を繋いで使用し、六〇メートルの容易なピッチであった。好天のため岩壁の基部ではかなり効率よく水が取れた。続いていよいよ国境稜線に続く最後の障壁、六〇メートルの雪壁と雪庇の乗越しである。

秋田トップで取り付き、ほぼダイレクトに登り、最後の乗越しは少し右にトラバースして、雪庇の最も小さな部分から稜線へと抜けた（ヤツタ～）。この雪壁は上部になるほど傾斜が増し、身体が後ろに引かれる感じであった。特に頂稜直下は胸をつく傾斜で、ランニングブレイも取れず、足下に六〇メートルものザイルをぶら下げての登攀はあまり気持ちの良いものでは無かつた（三人と一匹の家族がいるんだよ～）しかしビックルとアイスバイルをきかせての頂稜への最後の乗越しはさすがに爽快であつた（タマランワー）。頂上では懐かしい劍岳や立山の展望を満喫し、帰路は大雪渓を一気に駆け下った（ハラヘツタ～）。

データ  
四月二十七日（快晴）

白馬尻(TS)9:10～

六峰15:40

四月二十八日（快晴）

六峰6:35～四峰  
11:15/11:35～白馬岳  
14:25～県営小屋  
15:15/15:30～白馬尻(TS)16:30

八十七年度会・個人山行より

日付 八十七年五月四日  
山名 鹿島槍ヶ岳  
参加者 中山、宮本

四時に出発。直接、カクネ里へ一気下降。気温も下がり雪も充分にしまつていて、これなら行ける。一面デブリで埋めつくされたカクネ里を一路デールリッジを目指す。常に左右そして正面からの物音に気を付けながら体力勝負で、スノーコルに上がる。六時。アンザイレンする。二ピッチで主稜核心部真下へ出る。ここでテールリッジは尾根状を失いブッシュ混じりの急峻な壁となる。正面はとても無理で主稜核心部真下へ出る。上からバラバラと氷のかけらが落ちてくる。いやが上でも緊張させられる。正面の氷瀑を避け、もう一本左側の小尾根をトラバースして、この小尾根左側をダブルアックスで登り、アイスピントンでビル。ここで、この尾根も壁となつてしまふので、バンド状のところを右へ二〇メートルトラバースして、氷瀑二段目下に出る。あいかわらず氷瀑からはバラバラと氷が落下していく。雪崩の危険は無いようだが非常に気分は悪い。

ルンゼをはさんで対岸の主稜側壁にシユリングが有る。目で追うと主稜上部にテラスがありそうだ。ザイル三〇メートル位なので、もう一壁に取り付く。草付混じりの壁で、おまけにビショヨビショに氷が流れてくる。良いお天気なので、ショウガがないと思うが、下着が冷たく濡れてくる。ダマシダマシ登つてテラスへ着く。広くて気持ち良いテラスだ。ちょうど天狗の鼻と同じ位の標高だ。

ここからは三ピッチ雪とハイマツのリッジを登る。登り終えたところで核心と思われるところを終了する。主稜はここから一面ブッシュのリッジとなつて上昇している。これから、左へ雪面を左上トラバース三ピッチで、一本ルンゼを渡る。照りつける五月の強い日差しで雪はグサグサに

腐っており、膝くらいのラッセルが続く。蝶形右稜、右のルンゼに入りラッセルを続ける。傾斜はゆるんできたものの、下を見ればカクネ里が深く広々としているので、ザイルを外す訳にはいかない登りが続く。二人ともバテバテになる。遠く天狗尾根から溪谷コールが聞こえるが、頂上はまだ遙か上方である。ルンゼを5P程でルンゼは主稜に突き上げる。ハイ松混じりの雪面となる。ラッセルは相変わらず膝から腰くらいで、時々シユルントにはまりながら登る。コンティニアスで登ろうにも、バテバテでスタッカットで四〇メートルずつ登った方が楽なこともあって、堅実な尺取虫登攀が続く。何回スタッカットを繰り返したか、何回休んだことが、回数もわからなくなる程長い時間をかけてやつと頂上にはい上がる。PM四時。三〇P以上の長い登攀が終わつた。仲間はすでに天狗の鼻ベースへ下降中の様だ。宮本も無言で行動食を食べている。なにか安堵感の様なものが胸をよぎる。

ほんの十分の休憩で仲間を追つて天狗尾根を下降する。ベース着十八時。

### 奥穂高岳コブ尾根

八十七年度会・個人山行より  
日付 八十七年六月二十七日～二十八日

山名 奥穂高岳コブ尾根

参加者 秋田誠（単独）

筆者 秋田誠

六月二十七日（土）晴れ

オフシーズンのため上高地まで車で入れたものの、あまりの上天気にのんびり準備をしたので、出発は九時近くになってしまった。やまのひだ屋を過ぎるとすっかり人通りはまばらとなり、河童橋の喧騒が嘘のようだ。岳沢への登路は苔むしてしつとりとした樹林のなかの一本路で始まる。容赦のない初夏の陽射しも、ここでは穏やかな漏れ日となり、新緑の間にキラキラとこぼれ落ちた。やや湿り気を帶

びた土の軟らかな感触を楽しみながら登っていく。次第に身体は汗ばみ、路はいつしか岳沢右岸をたどっている。遙か彼方に岳沢ヒュッテの赤い屋根、そして奥穂高岳から西穂高岳へと続く岩の峰々、ハイ松の緑が残雪に鮮やかだ。岳沢ヒュッテのテラスには登山者の姿はなく、この夏のため作られたと思われる真新しいテープルと椅子がぽつんと置き去りにされていた。大して歩いた訳でもないのに、もう一汗かいた身体を木陰のベンチに横たえ目をつむると、僕が今ここにいることが夢のように感じられた。

コブ沢は豊富に雪を残していた。寝不足の身に辛いキックステップが切れて滝が二ヶ所出でていたが、いずれも右岸を簡単に乗り越すことが出来たルート図の「コブ尾根へのルンゼ」を確認出来ないままどんどん沢をつめた。前方の雪渓は次第に急峻となり両岸がせまってきたので、コブ尾根に向かって登路をとつた。はじめは傾斜の緩い安定したラブ状の岩場であつたが、やがて浮き石だらけのルンゼとなつた。左手のブッシュのリッジに逃げて、「コブ」の基部へ続く稜線に上がったルートはここからトライバースしその後直上して「コブ」の上部に抜けた。「コブ」の基部に身体を横に出来る格好のテラスがあつたので、整地して今夜の寝ぐらとした。貧しいビバーク食もこの大自然のバルコニーでは素晴らしい晩餐だ。夜、シエルトを破るのがもつたいないほどの星。星。星。文字どおり大自然に抱かれ自然に同化する一夜を過ごした。

六月二十八日（快晴）

今朝は出だしから岩登りとなつた。BPからコブ沢側へ一〇メートルのトラバースの後、クラックを登りビナクルの間を抜け、ハイ松のバンド一〇メートルから草付きのトランペース三五メートル。さらにチムニー左の一カ所かぶりと置き去りにされていて、これも途中がかぶり気味の残置ハーケンのある三〇メートルのトランペースを越して「コブの頭」へ。頭から五メートルの



岳三尺周辺概念図（作図 秋田）

クライムダウンをし、シユリングが山ほどかかっている二番目の支点から一五メートルの懸垂下降でギャップへと降り立った。この先是急な岩尾根を二時間程でコブ尾根の頭であった。ジャンタルム飛騨尾根も登るつもりだったが、あまり天気が良いのでトカゲを決め込むことにした。

天狗のコルからはアイゼンを装着して天狗沢の氷化した雪渓を駆け下った。下降中疊岩尾根から大規模なブロック雪崩が起こり、あつと言う間に天狗沢はデブリで埋まってしまった。もう少し下る時間が早ければ直撃を受けていただろう。意も時には身を救う。先程まで穏やかだった自然が突然キバを剥いたのだった。岳沢ヒュッテの昨日と同じベンチで少し休んだ後、まだ明るいうちに上高地に戻った。

#### データ

六月二十七日(土) 晴れ  
上高地8:45～岳沢ヒュッテ10:45/11:20～コブ沢出合11:25～コブ尾根側ルンゼ出合14:30～コブの基部16:55(BP)

80



八十七年度会山行より

### 阿武隈川白水沢左俣

(昭和六十二年度七月度会山行)

関根、山下(裕)、中村(泰)の各パーティが入谷した。

データ

七月二六日(日) 快晴

出合から二つ目の堰堤上7:15～二俣9:35/10:30～奥ノ二

俣三〇メートル滝上11:30～三〇メートル三段の滝上12:15～稜線13:40～甲子山14:25/14:40～甲子温泉15:40

日付 八十七年七月二十六日  
山名 阿武隈川白水沢左俣  
参加者 秋田、瀬藤、新井、小沢  
筆者 秋田誠

七月二六日(日) 快晴

前日入山し、甲子温泉から二十分程戻った林道沿いの駐

車場に車を置いた。甲子温泉の駐車場は泊まり客専用とのことであった。今にも泣き出しそうな空模様だったが、どうせ沢登り、濡れてもともと入谷した。出合の堰堤から

見える二段一〇メートルの滝は水量多く、その上に続く堰堤とともに、あつさり右岸から高巻いた。沢床に降りてワラジを付ける。今回が沢登り初体験の新井と小沢にワラジの履き方を教えた。ワラジの紐を締めると、気持ちもきり

りと引き締まる。新人が加わっているのでゆっくり廻行を心がけた。水量豊富な二〇メートル二段の滝を左手のリップ状より越し、一五メートル三段の滝を登ると二俣となつた。この頃より空が明るくなりセミまで鳴き出した。どうやら梅雨が明けたようだ。二俣から五十分ほど平凡な沢をたどると、奥の二俣であった。奥の二俣では、見事に苦むした三〇メートル四段の滝がある右俣にルートをとつた。この滝ではザイルを使用した。さらに一時間の廻行で結構傾斜がある三〇メートル三段の滝が現れた。ここでもアンザインして、さすがに流れの細くなつた滝身を直上し、落口へ抜けた。落口直下に残置ハーケンがあった。この滝からおよそ一時間半で稜線に出た。稜線直下のやぶこぎはわずか二十分であった。甲子山への分岐ですっかり待ちくたびれた仲間達と合流した。

この山行は昭和六十二年度七月度会山行(阿武隈川の沢)の一環として行われた。この他には、南沢(山下(京)田村、小林)、一里滝沢(宮本、畠岡)、一里滝沢右俣(掛川)、

関根、山下(裕)、中村(泰)の各パーティが入谷した。

### 阿武隈川南沢右俣

(昭和六十二年度七月度会山行)

出合は貧弱だがすぐに一〇メートル滝に出合う。傾斜は

強いが右にホールドを拾えれば楽に登れる。

小滝を越え短いナメを過ぎると左に枝沢分け一五メートル滝に出合う。右は濡れていて悪そうなので滝心の左から田村が登るが落口でつまってしまう。やはり右よりも正解なのか?。この辺から両岸がせばまり沢らしい雰囲気が強くなる。続く一二メートル滝は右より越える。古いシユリングが下がっているのでルートはすぐわかる。

二俣は右に入り小さな滝をいくつも越えていくが全く問題はなく小林も快適である。奥の大滝は三〇メートルリッジを登った方が楽しい。これより先は大きな滝もなく、奥の二俣より左に入り忠実に水流を追うと、大したやぶこ

ぎもなく旭岳と甲子山のコルに出る。

甲子山で他のルートに入ったパートナーを待ち急坂を駆け下つて甲子温泉に出る。

八十七年度会・個人山行より

## 一里滝沢右俣

(昭和六十二年度七月度会山行)

阿武隈川の沢)

日付 八十七年七月二十六日

山名 阿武隈川一里滝沢右俣  
参加者 掛川、関根、山下(裕)、中村(泰)

筆者 掛川

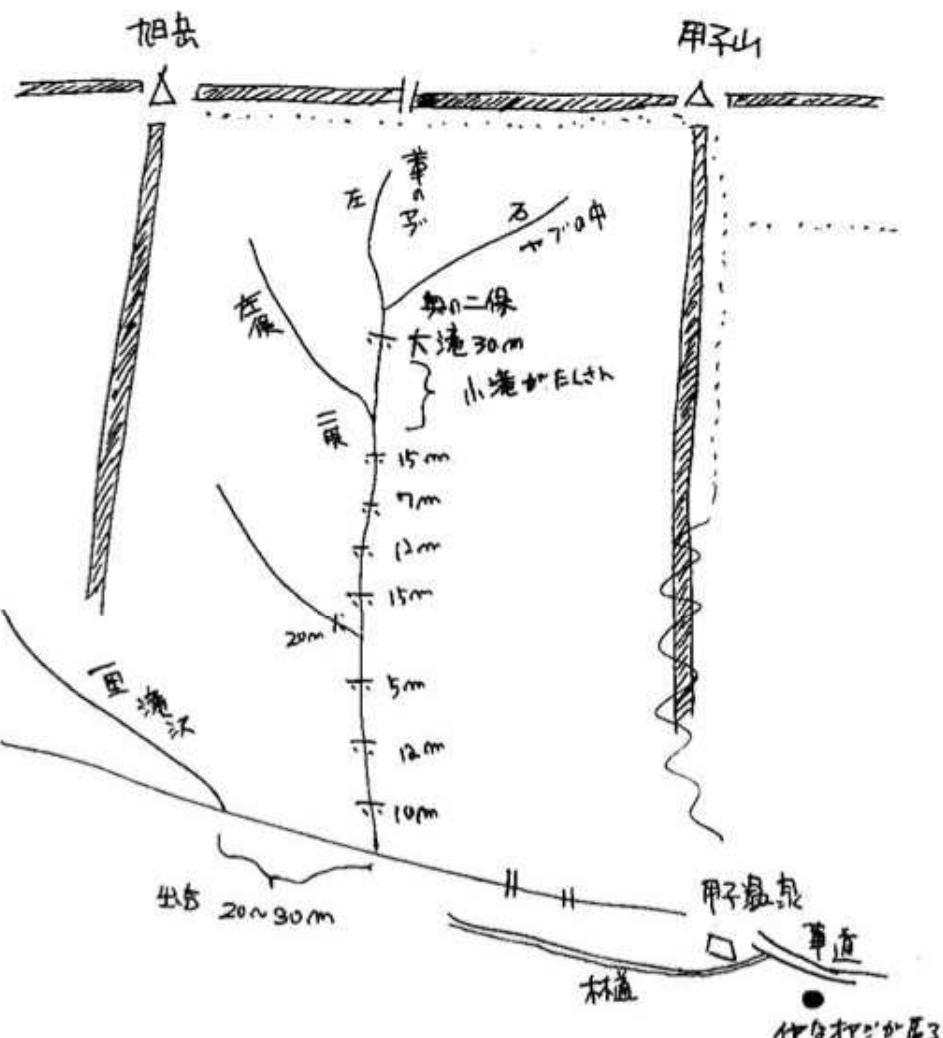
七月二六日(日)快晴

県営無料駐車場にて仮眠 四時起床 五時三十分出発 甲

子温泉五時五十分着 甲子温泉の裏手にある林道を十分ほど登り、途中から右手に見える堰堤に向かってヤブこぎ五分にて河原におりる 河原におり着いた頃より小雨になる。上空には青空が見えているため計画通り沢をつめることに決定、河原を五分ほどいくと右手より南沢が、さらに本流を五十メートルほど行くと一里滝沢の出合に着く。出合着六時頃。

本谷は左に曲がって行くが、我々は出合にて装備等を点検し、六時二十分出発。F1の滝は十メートル、水量はあるが右手より楽に登れる。F1の滝を越えると川原状となりさらに小滝を二つほど越えると二俣となる。

二俣着七時十五分。一里滝沢右俣はルート図がなく楽しみにして登攀開始とする。二俣から右俣に入谷すると倒木がありそれをいくつかまたぎ、沢は右手に曲がり、そこにF1の滝十メートルが落ちている。水量があり下には釜を持つている。ルートとしたら左手が考えられるが、岩がぬれているのと落口がシャワークライムになりそうで出口がポイントになりそう。我々は左手のブッシュを高巻し滝の落口に出る。やはり落口からの水量が多く落口はきびしきである。さらに上流へと足をのばすと十分程行った所に右俣最大の滝である四十五メートル三段の滝がある。上段十メートル、中段五メートル、下段三十メートル、水量が



多く登攀は困難と思う。左手のヤブをかなり高く巻き（二十分）三段目の滝の落口に出る。大滝をすぎてからは、ナメ状の滝、ゴルジュとなる。途中十メートル二段の滝があり、この滝を越えると二俣となる。左俣は十メートル程の滝が見える。我々はさらに右俣へと足を進める。源頭が近くなってきて回りは熊笹におおわれゴーロ状の小さい沢となり、沢を忠実に進むといつしか背丈以上の熊笹となり左右の視界がきかなくなる。ここを登攀終了点とする。終了九時二十分。後はひたすら稜線めがけて必死のヤブこぎとなる。視界（熊笹のため）がきかず、甲子山めがけて右へ右へとトラバースぎみにヤブをこぐと旭岳からの支尾根に出る。支尾根を旭岳めがけて直登のヤブこぎ四十分ようやく稜線に出る。稜線着十一時十分。後は稜線を甲子山へ、甲子山着十一時三十分。

## 茂倉沢檜又谷本谷

日付 八十七年九月十二日

山名 茂倉沢檜又谷本谷

参加者 秋田、宮本

筆者 秋田誠

天候 曇り

今年度の秋の沢登り山行は上越足拍子山の沢と決まったので、その前日茂倉岳の沢に入谷した。僕達の他には、中山、畠岡、宮里の三名が茂倉谷に入った。檜又谷は支流に雄大なスラブを多数有する興味深い谷だ。その大部分のルートはむしろ沢登りよりも岩登りの範疇に属する。今回は初見参なので、本谷通しに登り地形の概要を把握することにした。

三俣までは平凡な谷をひたすらジャブジャブ進む。三俣の少し手前に一五メートルの滝がある。他は水量が少なく全く容易な通行だ。この支流に広大なスラブ群が存在するこ

とが信じられないくらい穏やかな流れだ。二俣でワラジを着け、本流となっている右俣に入った。

右俣出合には巨大な岩あり、その下をくぐるようにして廻行を開始する。すぐ現われる二〇メートル滝を右岸の草付きから登り、落ち口にトラバースし振り返ると、水

量豊富な滝を連ねて、豪快に稜線に食い込む左俣が正面に見える。

左俣は正面から見るせいもあって、非常に急峻で、沢というよりはルンゼと形容した方がぴったりしている。右俣は源流までスラブ滝が飽きることなく続く。下半部では主として左岸の草付きにルートをとったが、上半部ではスラブにワラジのフリクションをきかせて快適に高度を稼ぐことが出来た。

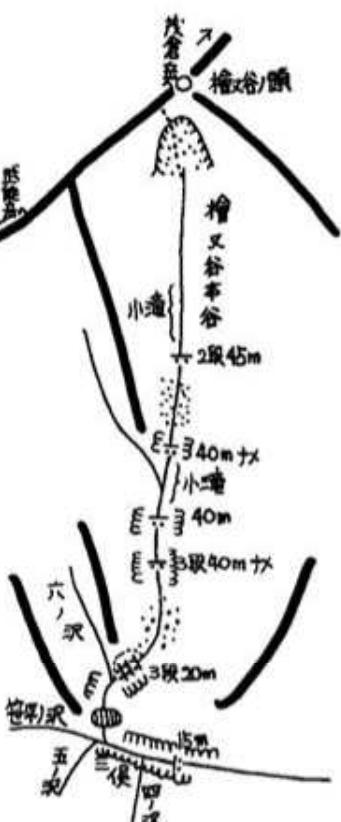
三俣から二時間半ほどで源頭となり、小さなガレを登るとヤブこぎもほとんどなく稜線に飛び出した。

この沢は四〇メートル程度の滝が数本あり、全体的にまとまつた沢だ。足が捕つていればザイルの必要もなく、快適なスラブ滝の登攀が楽しめる。

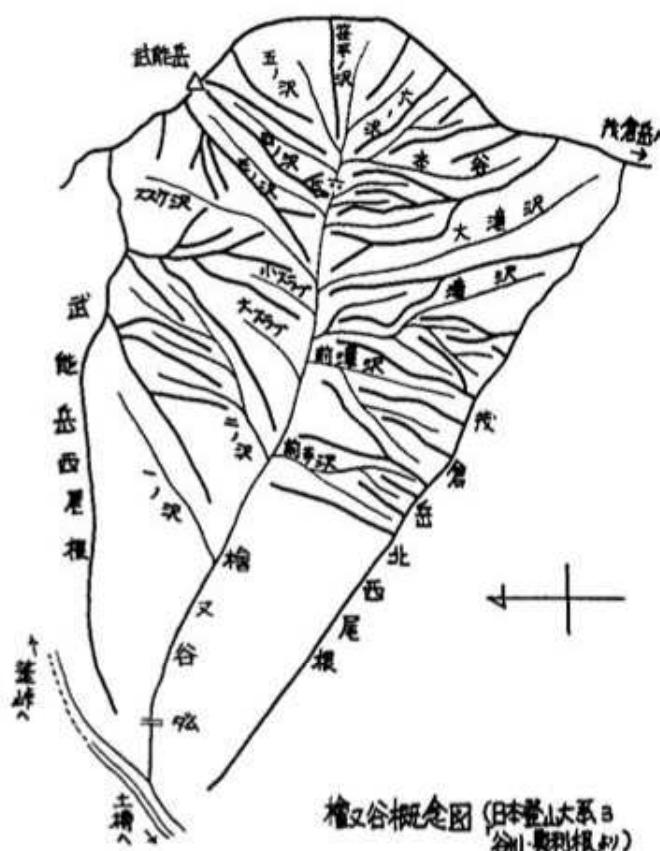
あつさり茂倉岳の頂上に着いてしまったので、暇つぶしに昼寝をしながら茂倉谷のパーティーを待ち、土樽へ下った。

データ

檜又谷出合 6:10 ~ 三俣 8:40 ~ 源頭のガレ 11:10 ~ 稜線  
11:30 ~ 茂倉岳 11:50 14:20 ~ 土樽 18:00



檜又谷本谷 (1987.9.12 作図 秋田)



## 雨飾山

日付 八十七年十月十四日

山名 雨飾山

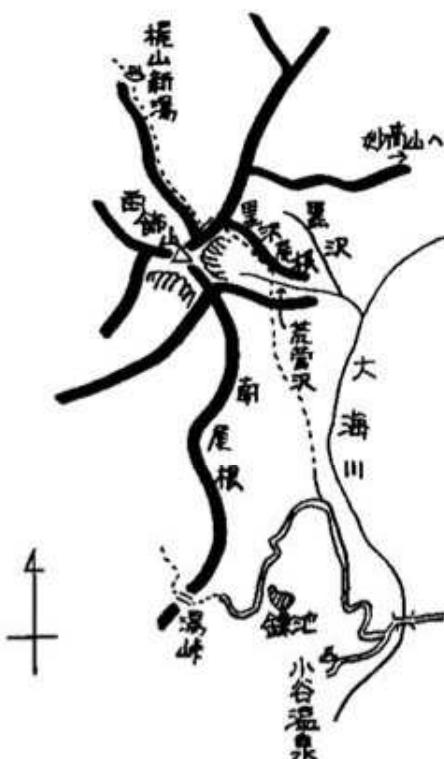
参加者 秋田誠

筆者 秋田誠

金沢の学会の帰りにちようど都合良く休暇がとれたので、いつも頭のすみに引掛かっていた雨飾山を訪ねることにした。前日の午後、糸魚川で大糸線に乗り換え小谷温泉まで入り、その晩はゆつくり温泉に浸かって旅の疲れを癒した。

温泉旅館泊りの優雅な山行もたまには良いものだ。

気をつけて行ってらっしゃい。親切な旅館のおばさんによ見送られて、大海川に沿った林道を、雲ひとつない秋晴れのもと、ひたすら歩く。ひとり歩きは速いもので、小一時間も歩くと雨飾山への登山口に着いた。よく踏まれた気持ちの良い、沢沿いの平坦な道をしばらく辿ると、登りが始まつた。秋の陽射しが折から紅葉に映えて眩しい。水曜日とあって他に全くひと気のない山道は時折り獸の体臭が残っていたりして、秋の深さが感じられた。やがて道が尾根をからむようになると登りが緩やかとなりひょっこり荒苔沢に出た。清冽な流れに喉を潤し見上げれば意外に真近くにフトンビシの岩峰が望まれた。さてどうしたものか。このまま尾根を辿って面白くないし。さりとて、何の装備も持たずに、ひとり未知の沢に入るのも決断の要ることだった。現に沢は一〇〇メートルばかり



雨飾山周辺概念図(作図 秋田)

り上流で深いゴルジュの中へ消えている。少し遠巡の後、青空に融け快適そだ。いつかこのスラブを登りに来よう。やはり安全第一と素直に尾根道を登ることにした。根曲があり竹の尾根の登りにひと汗かくと、池塘が散在する頂上直下の草原に出た。ここまでくればもはや頂上へは一投足だった見下ろせば遙か荒苔沢の源頭部のスラブが一望だ。急登に息を切らせて頂上に飛び出すと、そこにはすでに数人の先客が休んでいた。僕も仲間に加わり澄んだ秋の空の三六〇度の展望を満喫した。明星山が姫川谷をはさんで石灰岩の白い山肌を輝かせている。いい山だ。来て良かった。

天氣にも恵まれたし……。

再び急なひと下りで荒苔沢の源頭に立つ。時間もある。菅沢を下降することにした。沢は草付きからやがてスラブとなつたが結構ホールドがあり、フリクションもきくので順調に下れた。見る間に稜線は遙か頭上となってしまった。

問題なく下れそなうなので、フトンビシを見上げるスラブに寝転がつて、しばしトカゲを決め込む。上部のスラブ群が

帰宅後、深田久弥の『日本百名山』を読み直してみた。彼は天候不順のためなかなか志を果たせず、三回目にしてようやく憧れの雨飾の頂上に立てたとあった。してみると、僕はよほどついていたようだ。ほんの寄り道で、山も温泉も充分味わえたのだから……。

についた。

八十八年度会・個人山行より

日光白根山南面・庵沢溯行

日付 八十八年七月二十四日

山名 日光白根山

参加者 掛川、田村、小林、中山

赤沼から弓張峠を越し、林道途中から自然探勝林と西の湖に続く林道に入る。約五分で外山沢にかかる木橋が現れる。ここから外山沢川の廻行を開始する。飛石づたいに砂地や河原を拾いながら徒渉を続けると、一時間ほどで二俣に着く。

二俣で右に外山沢を見送り、水量の多い庵沢に入る。五分ほどでF1庵沢(二〇メートル)が大岩壁中央部から豪快にしぶきを上げて垂直に落ちている。左岸のガレ沢を涸澗の下まで登り、壁の基部を右へ草付きを回り込んで、涸澗の上へ出る。さらに瘦尾根を越えて、庵沢の上に降りる。この澗を境に庵沢はV字谷に変わることでワラジを履く。F2(三メートル)、F3(五メートル)、F4(二メートル)は右岸から、F5(一メートル)は左岸から越える。この付近から谷はゆるやかに右へ向きを変える。F6(三メートル)は右岸をへつり、F7(四メートル)、F8(二

メートル)は左岸を小さく巻く。F9(三メートル)、F10

八十八年度夏合宿より

(二メートル)、F11(二メートル)は階段状で難なく登る。

F12(二メートル)、F13(二メートル)、F14(二メートル)、F15(二メートル)も水流沿いに簡単に登る。

この付近から谷はさらに深くなり、狭い廊下状になる。

ブロックの残雪が所々残る冷々とした廊下を進むと、垂直

のF16(八メートル)に出会う。左岸はハングした高い絶壁で登れず、五メートルほど手前から右岸のボロボロの急な草付きを、滝の落口に向けてトラバース気味に登る。か

なり悪い。

この上で谷はますます狭くなり、両腕を広げれば両岸の垂直な壁に触れられるほどの谷幅となり、すぐにF17(八メートル)が豊富な水量を二段に落としている。下段は二メートル、上段は大きな岩で水流を五対一ほどに分けていたためか、水流が大きく吹き出している。下段は、滝壺の右をへつり、上段の滝壺を水流に打たれながら左へ移り、水流を分けている大岩と右岸の壁の間を登る。全身びしょぬれとなる。

右岸水流沿いにF18(一〇メートル)を越え、F19(五メートル)を越えると、左右から小沢が合流し、前面の巨大なスラブにF20外山滝三〇メートルが白綿のようにならっている。左の小沢一〇メートルほど登り、滝の右岸の草付きへ乗り移り、草付きを直上する。

外山滝の上部で谷は急に開け、なだらかな岩床を滑るよううに水が流れている。F21(二メートル)、F22(四メートル)、F23(一〇メートル)のナメ滝を次々に越え、F24(五メートル)で水流が消える。歩きにくい涸沢をぐんぐん登る。F25(一〇メートル)を越えると沢はますます小さくなる。ヤブが未発達なため、たいしたヤブこぎもなく、葉に前白根山頂に立つ。

緑沢を登った仲間と合流し、天狗平から白根沢へ下り、湯本温泉に下山する。

## 北岳バットレス第四尾根

### ～中央稜

日付 八十八年八月六日～七日  
山名 北岳  
参加者 秋田、畠岡  
筆者 秋田

八月六日(土)快晴、午後雨

今年度の夏山合宿は例年と異なり、夏休み前半の週末を利用

して、一日間のみで南ア北岳集中ということとなつた。

日程を短くして出来るだけ多くの会員の参加を期待した訳である。期間が短く、山域も日頃よく気軽に入っている北岳とあっては、いささか意欲に欠けるところが無いではないかが、気心知れた仲間と、登りつめた頂上で会えるのはまた楽しみなものだった。今回のパートナーは畠岡君。彼とは春の磐梯八峰や白馬岳主稜でザイルを組んでおり、精神

的な面では今少しの成長を望むとしても、技術的には全く心配ない。

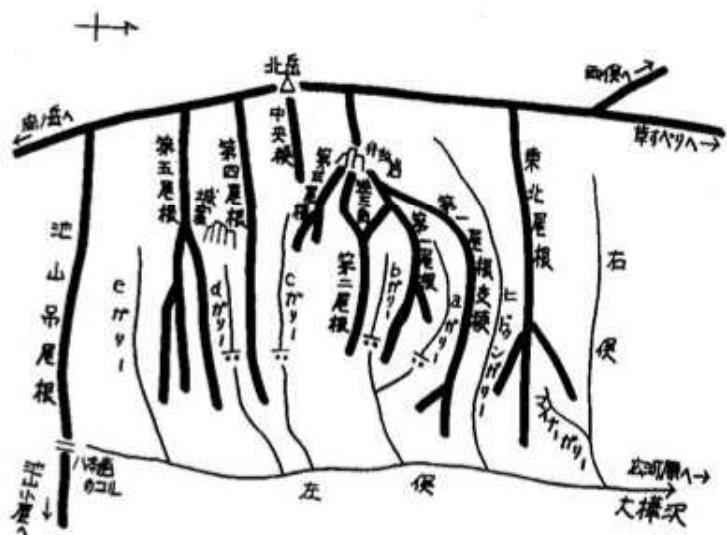
第四尾根は混雑が予想されたので、一分でも早く取付こようと、まだ夜の明け切らない広河原をあわただしく出発した。大権沢を経て頂上に向かう登山者の群を次々に追い抜き、ようやく夏の陽が照り始めたバットレス沢を喘ぎながら登った。畠岡はこの五月の連休に第四尾根は登っている。その無雪期のバットレスは初めてであつた。そこで、取付へは最もボビュラーなBガリーワーの大滝経由という事にした。浮き石に注意して二ピッチで緩傾斜帯に出て、踏み跡をたどつたところが第三尾根末端をまわり込む辺りで、うっかりトレールを外してしまい、すぐ戻れば良いものを岩が浮いてボロボロのルンゼを強引に登つてしまつたため、一時間程ロスしてしまつた。残雪豊富なCガリーワーをトラバースして少し登り、特徴的なスラブを攀ればA・Tだけで先行パートナーはCガリーワーのピッチにかかっているのか、A・Tは静まりかえつており、第四尾根には登攀者の

姿は見えない。ハーネスを着けながら、畠岡にバットレスの各ルートを説明していると、Dガリーワー側からバーティー登つて来たので、秋田トップで毎度お馴染みの一ピッチ目のクラックを攀り始めた。緩傾斜帯で時間をつぶしたおかげで順番待ちもなく、ツルべで快調にザイルをのぼした。マッチ箱のコルに降りたところで、小雨が降り出したので、あわててリッジを駆け登り、登攀終了とした。時間はまだ早いが天気が下り坂なので、中央稜への継続は明日にまわし、終了点のすぐ上部の不完全な岩小屋状の露岩でビバークに入った。トランシーバーからは緩傾斜帯でビバークとの予定を伝える、中山・田村バーティの元気な声が入つてきた。また、交信状態は良くないものの、細沢から単独で入山している中村(泰)のオジサン声も懐かしく聞こえた。みんな今夜の寝ぐらを手に入れたようだ。夕方かなり激しい雨に見舞われた。

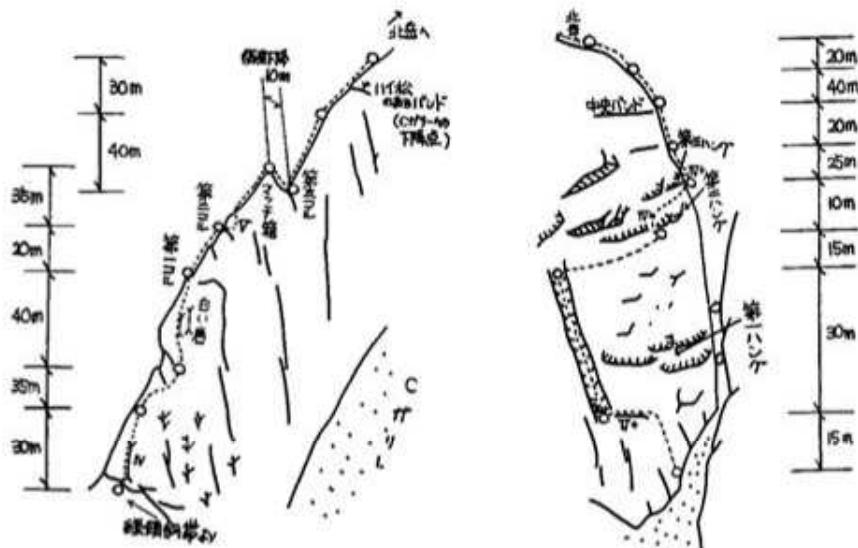
八月七日(日)快晴、午後雷雨

明け方になるとようやく雨が上がり、天気は回復の兆しを見せ始めた。終了点から三〇メートル程クライムダウンし、さらにローテルブラッテを足の下に、遙か大権沢まで見通せる二〇メートルの高度感溢れる懸垂下降を行い、第四尾根終了点一ピッチ手前のハイ松テラスに降り立つた。起き抜けの身体のかたさがまだ充分とれず、二人ともどことなく動作がぎこちない。テラスからCガリーワー側へ四メートルクライムダウンした所にかつちりした支点があり、四メートルの空中懸垂でCガリーワーへ下つた。下降ルートの岩は完全に浮いており、落石を起こさないように下るには結構神経を使つた。また、支点から数メートル下るとちょうどザイルが挟まり、そうなクラックが走つており、ザイルのセットにも充分な注意が必要だつた。下降点から二〇メートルほどCガリーワーを登り返し、巨大な雪のブロックにハンマーでステップを刻み、乗越すと中央稜の取付点で

小休の後、秋田トップで登攀を開始した。一ビッチ目（一五メートル）取付より五メートル登り、リンネへ向かって一〇メートルの悪いトラバース。このトラバースは頭がハングに押さえられて苦しいトラバースを始める一步と、トラバースの中間部が特にバランスを要した。ランニングビレーは適当に取れるが、ザイルの流れに要注意だ。トラバースを終えた所はリンネ下部のテラスであった。このテラスは小さなハングに守られており、一応落石からは安全であった。二ビッチ目（三〇メートル）畑岡トップで岩の硬いリンネを登る。リンネ内は残置ハーケン多く、傾斜はあるが、高度感がないのでグイグイ登れた。畑岡は快調に登り過ぎ、正規の二ビッチ目終了点より五メートル上のレッジで僕を確保する始末だった。三ビッチ目（一五メートル）、ガッチリしたフットホールドの容易なトラバース。素晴らし高度感だ。まさに空中の散歩といえるトラバースだ。第二ハングの真下で畑岡を確保する。四ビッチ目（一〇メートル）第二ハンジングであるバットレス中央稜のルート紹介では、よくここに乗越しの写真が使われているお馴染みのピッチだ。中央稜で一番登りたいピッチだったのでも畑岡に頼んでトップを譲ってもらった。ハングは屋根瓦状で、三ヶ所程登れそうな所があった。中央のクビレから乗越したが、思ったほどフリクションがきかず、ハング上部にも確実なホールドが無いためAOとなってしまった。第二ハング越し、第三ハンジングの下をトラバースして、傾斜の強い稜角上のレッジで畑岡を迎えた。Dガリ一奥壁から第四尾根上部にてた中山・田村バーティからコールがかかる。五ピッチ目（一五メートル）不安定な狭いレッジでトップの交代も出来ないのでさらに秋田がザイルをのばした。このピッチは高度感のある傾斜の強いリッジ、岩が硬いのでダイナミックに攀れた。六ピッチ目（一〇メートル）今度は畑岡がリッジをたどり、中間部で垂直の凹角を直上した。岩は若干脆くなつ



北岳バットレス概念図(作図 秋田)



第四尾根主稜(1988.8.6 作図 秋田)

中央稜ノーマル(1988.8.7 作図 秋田)

てきた七ビッチ目（四〇メートル）秋田トップでハイ松の出てくる所まで易しいリッジを登った。八ビッチ目（二〇メートル）畑岡がさにリッジから脆い凹角を登り中央稜の登攀終了点にでた。終了点からは北岳頂上が手をのぼせば届きそうな所に見えた。時間があるのでCガリ一奥壁へ継続すべルートを観察したが、ガラガラの脆そうな露岩しか見えないのでここで登攀終了とし頂上へ向かった。頂上で全員集中するのに一時間近くかかったが、みな怪我もなく広河原に下山することが出来た。下山途中、周期的に強い雨に見舞われ、雷のおまけまでついた。

データ  
八月六日(土) 快晴、午後雨  
広河原5:30～大坪沢二俣7:15/7:25～B計～大滝8:45/9:10  
～第四尾根A.T11:30/12:00～終了点14:15(B.P)  
八月七日(日) 快晴、午後雷雨  
BJ6:00～中央稜取付き点7:10/7:50～終了点10:35/10:55  
～北岳11:00/12:25～広河原17:35

八十八年度会・個人山行

剣尾根紀行

日付 八十八年八月十三日～十六日

山名 剣岳

参加者

中山、山下

筆者 中山

八月十三日(土) 晴れ

例のごとく前夜大宮を発ち早朝魚津経由で上市へ入る。

運よく馬場島行きのバスに乗り込み、八時に馬場島着。馬

場島荘で朝定食を食べた後、重い荷を担いで九時に出発。白萩川沿いの何度も目かの道を頭上から照りつける太陽から逃れるようひたすら歩く。

タカノスワリのゴルジューは右岸の巻道より高巻き、池ノ谷出合へ降りる。十一時着。

雷岩より小窓尾根をはい登り一六〇〇メートル付近より池ノ谷へ下降し、富高岩小屋へ。体力勝負の長い一日が終わった。富高岩小屋着一五時。

八月十四日(日) 晴れ後曇り

六時出発。池ノ谷の深い谷は全く陽が差しておらず、寒々としている。雪渓を一時間ほど歩き二俣へ。二俣より左俣へ入り、急になる雪渓に足を取られながらひたすら歩く。

私も山下さんも剣尾根は初めてなので、取り付きのR10がわからず、とうとう後から来たクライマー達に道を聞く。何の事は無い、R10は言つてみれば大きな岩のガラガラしたルンゼだった。R10出合九時。

ガラガラした大きなルンゼを落石しないように注意して登り(ザイル必要なし)、コルEへボコツと出る。狭いコルで休む場所もない。

ここから剣尾根をほぼ稜線沿いにハイ松群と戦いながらコルDへ進む。コルDでハーネスを着け、軽い足慣らしと思いながら眼前の二〇メートル程の壁へ取り付く。取り付いてみたものの、意外と傾斜が強いのでびっくり、いきなりビビリながらの登攀になる。この岩場を登り、さらに一

○○メートルほど上がりコルCへ。十一時。

ここから核心となる。まずA級のフェースをフリーで五メートル直上し、ハング下を右へアブミトラバースしてカントを回り込む。(ピッチ二〇メートル)ここは荷が軽ければ何のことはないだろうが、三泊四日分の荷を担いでの登攀は厳しいものがあり、苦労する。

さらにカンテ右壁を直上し、もう岩場を慎重にバスして広くなつた稜上へここで初めて剣尾根ドームの「門」と相対する。

異様な光景である。とにかくどうしてこのような地形が出来たのか不思議な思いがする。とにかく頭上からのしかかるような圧倒的な迫力がある。

平坦なリッジから「門」の中に入る。入ってみてわかっただが、技術的にはたいしたことなく、従来A1とされていた部分もA0でバスして門の間を通り抜ける。

左門の裏のルンゼを五〇メートルほど登りドームの頭へ。この頃より「ゴロゴロ」と遠くの方から雷の音が聞こえて来る。十三時。

ドームの頭から見える三ノ窓は今日も大入満員のようににぎわっているが、ここは別天地のよう静かである。ここで軽いランチタイムにする。僕も山下さんも少し表情に疲労の色が見えるようになる。

ドームからは、コルBに下降しさらにルンゼを懸垂下降する。ガイドブックでは易しいとか、「二ピッチの懸垂だとか書いてあるが、全く嘘である。岩がぼろぼろでルンゼの底にたまつた岩など乗つただけ池ノ谷右俣へガラガラ落ちていく。六ピッチほどの懸垂で中央ルンゼとの出合に下降する。水など流れで無く、運んできた四リットルの水で一晩過ごすことになる。出合にツェルトは張らず二〇メートルほど上がったドーム稜取付の草むらの中に張る。

八月十六日(火) 雨後曇り

七時、雨具を着て出発。三時間程で馬場島へ下り、上市にて昼食後、長岡経由新幹線で帰る。

八月十五日(月) 晴れ後曇り時々雨

六時出発。ドーム稜に取り付く。早朝いきなりA級のフ

リークライミングは荷を担いでいなくても厳しいものがあ

るのに、今日は荷を担いでなので、かなり苦労する。途中

ビン等はなく、やつの思いで一ピッチクリア。山下さん

を確保。「一ピッチ目は山下さんトップ。四〇メートルいつ

ぱいザイルが延びる。三ピッチ目は僕がトップで抜けそう

なビンにアブミをかけてのA1の登攀で大きなジエードル

を登り、無事下部の核心をバスする。ここでいつたんザイ

ルを解き、ハイマツリッジを一五〇メートルほど上がる。

後に富山平野から続く日本海を背負つての登攀は素晴らしい気分にさせてくれる。ここまで来ると、早月尾根の登山

者の声も間近に聞こえる。

脆い上部リッジをアンザイレンして通過し上部核心部へ。

ルンゼ状を右上し、正面にクラックの人った凹角が出現す

る。このクラックはマンメリーラックと言う素晴らしい

名が付いている。A級のフリーで三〇メートルほどこのこの

ピッチを無事にクリアして剣尾根の頭へ。剣尾根の頭で

ハーネスを解き、長次郎の頭へリッジを進む。長次郎の頭

着十二時、この頃より急に風が強くなりガスが巻き始める。

剣本峰着十二時四十分。天気が悪くなってきたので一気に

早月尾根を駆け下る。伝説小屋着十五時。この調子で行けば

今日中に馬場島まで下れるなと思ったが、うっかりビールを飲んでしまいふらふらになり、ここへ泊まることにな

る。



八十八年度会・個人山行より

## 南ア小太郎山日影シナクボ沢

日付

八十八年九月三日

山名

南ア小太郎山日影シナクボ沢

参加者

秋田誠一、中山、小林

筆者

秋田誠一

天候

曇り、時々小雨

野呂川林道のゲートから四〇分ほどスバーリン道を北沢

峠に向って登り 日影シナクボ沢の対岸で、ガードレール

を支点として四五メートルの懸垂下降を行い、野呂川本流に降りた。膝位の渡渉で本流を渡り日影シナクボ沢に入る。落差二〇メートルのスラブ滝が僕達を迎えた。水流左のスラブがルートになりそうだが、ホールドに乏しく難しそうなので、右岸の草付きを三〇メートルほどアンザイレンして登り、落ち口にトラバースした。

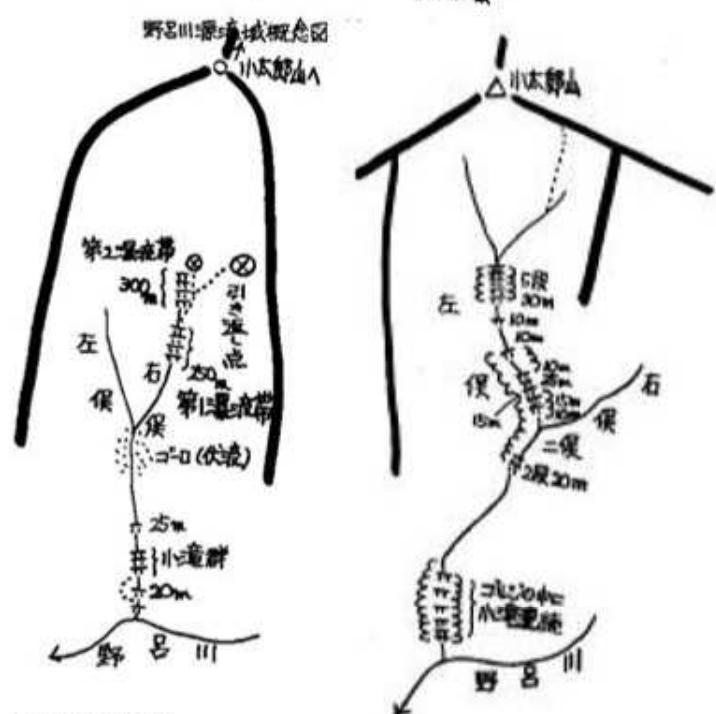
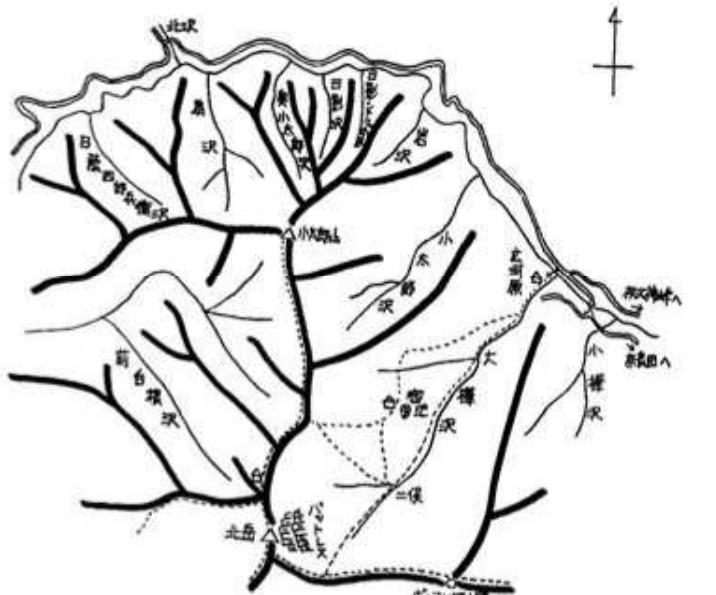
この滝の上で沢はしばらく平凡となり、二俣直下では流れも伏流となってしまった。二俣付近は非常に傾斜の緩いゴーロとなっていた。二俣から右俣に入ると、再び水流が見られすぐトヨ状の第一瀑流帯となつた。傾斜があまりないので、狭い流水溝の両側の壁に手足を突っ張って簡単に登ることができた。二五〇メートルほどの第一瀑流帯を過ぎると、ほどなく第二瀑流帯となる。同じくトヨ状の滝身を流水に沿って登つて行くと、最上部で落ち口がハングした五メートルの滝に行く手を阻まれた。狹まつた滝の両側の壁はツルツルで濡れてホールドがなく、またハーケンを打つリスもない。秋田が雨具を着け流水を浴びながら、滝身に引掛かっている流木にハーケンを打ち落ち口に抜けようとしたが敗退。仕方なく少し下降して、左岸の不安定な草付きスラブをザイルを使い三〇メートル登り高

卷く。出来る限り小さく高巻こうとしたが、露岩を避け易いところを登つて行くと、次第に尾根の上部へと追い上げられてしまった。やがて尾根は風化した壁状となり、再びアンザイレンが必要となつた。この頃、今まで何とか保っていた天気が崩れ始め、雷まで鳴り出した。そこで僕達はこれをしおに下降することにした。クラ임ダウンと四〇メートルの懸垂下降で沢身に戻り、一気に出合まで引返した。

日影シナクボ沢は三ヶ所の大きな瀑流帯を持ち、小太郎山周辺の沢の中では一番登りがいのある沢とされている。今回の山行では第三瀑流帯まで達することが出来なかつたが、一応無雪期の概要を把握することが出来

データ

スバーリン道下降点7:00～日影シナクボ沢8:00～20m滝  
上9:30～二俣11:25/11:35～第二瀑流帶上部12:30/12:50～  
スバーリン道16:00



日影シナクボ沢  
(1988.9.3 作図 秋田)

風呂(1991.9.4 作図 秋田)

た。北面の沢なので冬期にはアイスクリミングが楽しめそうだ。機会があれば、十二～一月の本格的な積雪を迎える前の時期に、この辺りの沢をつないだ山行を組んでみた。

八十八年度冬合宿より

## 北岳バットレス第四尾根

日付 八十八年十二月三十日～一月三日  
山名

参加者 中山法行、中田弘、宮本武

筆者 中山法行

十二月三十日(金) 晴れ

宮本のカリブで夜叉神峠まで入る。今回の合宿は何と三人。ここへ来るまでの準備は人数が少ない分 大変だった。十月末に一斗カン四本分のデボ。そして、度重なる参加メンバーの減少。結局、例年通りの筋書きとなつたとは言え、企画したリーダー会としては辛いものがある。

いずれにせよ、個人的には一つの目標としていた冬のバットレスにやっとアタックできるので、当人にとっては身の引き締まる思いで夜叉神のトンネルを抜ける。自前デボの効果もあって三人の荷は比較的軽く楽勝ペース(?)で歩く。凍った鷲ノ住山の下降から野呂川を渡り、池山吊尾根に取り付く。雪はほとんどなく、今夜水が取れるかどうか不安になるほどである。四時間程の急登の末、御池小屋へ着く。一面二十センチメートル程の雪で水は取れるようである。

十二月三十一日(土) 晴れ

午前七時発。天気も良く、一気に四時間程でボーコン沢の頭を過ぎて、午前中にBC地点の八本歯に着く。目標のバットレスは雪が少なく良い状態のようである。順調にデボ品を回収する。夜半から天気が悪化する。

一日(日) 吹雪

一日中吹雪、一步も動けず。テントから出るのもイヤになる。除雪は約二時間おき。夕方から天気が回復する。

一月二日(月) 晴れ

朝五時、BC発。中山、宮本で出発。会長は単独で頂上を往復する予定。懷中電灯を照らして、雪稜と化した八本歯をコルへ下降する。

途中、宮本の姿が消えたので、暗闇で十分ほど待つてい

ると宮本の懷中電灯が見えた。ピッケルを八本歯で落としたそうである。宮本はバイル一本で大丈夫だと言うが、少々不安になる。

八本歯より夏道までを下降し、途中から沢のトラバースに入る。後から来た二人組バーティと共に深い雪のラッセルをする。Eガリをトラバースし、五尾根末端をDガリ一大滝下までひたすらトラバースする。

午前九時取付。宮本トップでDガリ大滝へ。スラブ滝に氷はひとかけらもなく黒々としている。しかたがないので途中から五尾根支稜へ上がつた。一Pリッジ登りした後、コンテDガリを上がり横断バンドへ着く。夏はひらけた場所だが、冬は一面の雪の斜面だ。上部が落ちてくるので早々に四尾根末端をトラバースする。夏も緊張する場所だけに、雪の積もつたバンドはもっと緊張する。

Cガリ一側に回り込もうとしたが、首までのラッセルとなつたため、少し戻つて四尾根側壁の雪壁(夏は急なブッシュ帶)を直上した。

一月三日(火) 晴れ

午前十時、四Pで四尾根主稜取付へ着く。予想どおり取付のクラックは二メートル程雪で埋まつており、夏より楽に一P目をこなした。続く二P目も、確実にスタンスを追つて夏ルートどおりに登る。

二P登つて分かったことが、ここは高度が高いので、雪が積もつても氷化することがなく強風で吹き飛ばされてしまうため、岩の上に四～五センチメートルだけ雪が乗っているようである。そのため、次のピッチ「白のクラック」はとても神経を使つた。傾斜が中途半端に弱い上にホールドスタンスも比較的細かいので、雪をはらつて残置ピンを探しながらの登攀となつた。

B C着十七時。

途中で会長とコールを交わした。旧マッチ箱のコル壁重でDガリ側へ夏道どおりに降りる。ここから先は雪がベックタリ付いているので、岩稜に出ないようにルンゼを選んで二P登つた。

最後に十メートル程の岩を登つて、夏なら終了点となる

場所へ出た。しかし、一面急な雪面、そして頂稜部には數メートルへ十メートル程の大雪庇。とんでもない。終了どころではない。これからが本番って感じである。雪は不安

定でビレ一点はほとんど決まらない。コンテで大緊張で稜線へ向かう。一時間程のラッセルの後、稜線へ出た。頂上着午後三時。

B Cへ帰る途中、八本歯で落とした宮本のピッケルを回収した。ここまでバイル一本で来た宮本の気持ちを考えると頭が下がる。計画的に後がないという焦りがあつただろうし、参加メンバーが減少したためサボート隊は無編成だ。もし、上部雪稜帶で僕が落ちれば(そんなことは登つている途中は全然考えなかつたり)波の短いバイル一本で僕を止めることは出来なかつただろう。一步間違えれば無法と言われかねない山行によくつき合つてくれたと思う。

B C着十七時。

一月三日(火) 晴れ

午前八時、BC撤収。下山開始。入山の時より荷が重い。

なにせ、六～七人入山するつもりでいたデモだけにガソリン、食料共に大量に余ってしまい、三人で分けて下へ降ることになつたのだ。もつとも荒川発電所付近まで行けば、荒川付近で氷柱登りをしている別日程バーティに無線で連絡がとれているので、気楽ではある。

十二時、荒川発電所。午後三時、夜叉神峠着。

合宿が終わつた。

もう今年度でチーフリーダーは辞めよう。病氣で倒れた須藤さんから引き継いで四回目の冬合宿。浦和渓谷山岳会の伝統に恥じないアルバインクライミング精神に満ちた山

行を企画し、いつも先頭に立つて会員を引っ張るのは疲れた。少し休憩がしたい。

一見清く見える水も、溜まり水だと腐ると言うではないか。四年も同じ人がチーフをやるのは、水がよどむのと同じ。会の役員も同じだ。会員の年齢構成、生活環境（結婚、育児、仕事）を考えれば、これくらいがこの山岳会として限界の山行と考える。これ以上ハードな山行をすれば、会員は誰一人ついて来れなくなる。

現実、三人だけの冬合宿に向かつて、参加する者と、参加しない者がバラバラになってしまった。参加しない人を責めることはできない。自分だって生活環境の変化、他で参加できない時、参加する者に向かつて指示できないし、山行そのものを真剣に考えなくなる可能性がある。

いずれにせよ、人の上に立つて人を引っ張ることは難しいものである。歴代のチーフリーダーもこれに悩まされたのではないだろうか。

次の一チーフリーダーには、自分を越える山行をやって、浦和溪谷山岳会をさらに発展させてもらいたい。

八十九年度会・個人山行より

## 北ア水晶岳

～黒部川上ノ廊下横断～立山

日付 八十九年四月三十日～五月五日

山名 北ア水晶岳

参加者 秋田誠一、中村

筆者 秋田誠一

積雪期に黒部川上ノ廊下を横断して、薬師岳東稜を登攀した後、剣岳の頂上に立つ。これは僕が渓谷に入会する以前から夢に描いていた山行だ。渓谷に入会して二年目の春、今は退会してしまった安倍君をパートナーに得て、まず手始めにと、薬師岳東稜をめざして入山した。この年は比較的の残雪が多く、ブナ立て尾根に喘ぎ、裏銀の長い稜線を強風におおられながら、ようやく三日目に水晶岳の頂上に着

いた。黒部の谷をはさみ真近かに對峙する薬師東稜は、頂稜を厚い雲すれすれに、多量の雪をまとい、極めて拒絶的であった。今年のブナ立て尾根は残雪が少なく夏道がかなり

であった。

取付きまでは遙かな、そして決して樂ではない雪稜が黒部の谷底へと続いていた。僕達の意欲は急速に萎えてしまつた。悪天を告げる南風にせかされ、もと来た雪稜を下つた。二日後、雲の平らを横断して太郎平から薬師岳の頂上に立つた。東稜は足元から急峻な雪稜を黒部川に落としていた。

家庭、仕事、もちろんの理由により『夢の山行』はいつまで経つても夢のまま十年以上の歳月が過ぎ去つた。四十才……正直いって僕にはそれほど特別な感慨はない。僕がいわゆる団塊の世代で、身近かに大勢の同年代の岳友が頑張っているためかもしれない。

しかし、客観的には体力、氣力とも下り坂の年頃だ。体力はとつくに下りきつているから諦めるにしても、氣力の減退は深刻な問題だった。氣力が備わっているうちに夢を実現しよう。夢の実現をめざして山行を重ねれば、日々の山行も一層充実したものとなるに違いない。僕は積雪期の上ノ廊下横断を実行に移すことを決心した。核心部上ノ廊下の横断を安全に行なうには、ぜひとも仲間が欲しかった。

会員やその他の岳友に計画を話してみたが、パートナーを得ることは出来なかつた。やむなく単独で入山することに

して、慎重に計画を練り出発の準備にかかった。ところが直前になって中村(泰)が急に参加出来ることになった。ひとりよりは二人の方が心強い。また何といっても楽しい。

もともと単独行爱好者ではない僕は、彼の申し出を有り難く受け入れた。

五月一日（風雪、夕方暴り）

昨日のラジオは、九州の西に発達中の低気圧が東進して、天気は悪化しなかつた。他

いると報じていたが、天気は悪化しなかつた。

パートナーは沈殿の模様だが、僕らは少しでも行程を稼ぐ

ため小屋をあとにした。小屋の辺りでは小雪で風はなく、

視界もそれ程悪くなかつたが、三ツ岳の登りでは、風雪と

なり視界は五〇メートル位となつた。風雪にせかされるよ

うに単調な裏銀の稜線を點々と歩いた。野口五郎の小屋

は入り口が雪に埋もれており、すぐには使えない状態だつた。小屋の裏には二張りのテントが寒々と張られていた。

小屋から少し登るとやがて湯俣岳の分岐であった。視界が

悪いので磁石を出して慎重にルートを確認し東沢乗越へと

ショウジョウバカマがあちこちに、可憐な姿を見せて僕らの目をなごませてくれる。僕らはこれから冬の世界へ旅立つのだ。

出でたが、それも三〇分ほどでやがて雪に覆われてしまつた。五月の陽射しを背にいっぽい浴びて懸命に登ると、やがて右手に不動岳がその雄姿を見せ始めた。新雪は四〇センチ程度で、先行バーティーのトレイスもあり、いつになく楽な入山だった。鳥帽子小屋付近には他に二バー

ティーが設営していた。先が長いので、今夜は冬期小屋を使わせてもらうことにした。しめしめ、これでテントを濡らさずにすんだぞ……。さっそく小屋の屋根に腰をおろし、ほかほかお陽さまを浴びながら、ウイスキーをちびちび、マーラーに耳をかたむけた。今回はクラシック音楽に造詣の深い中村君と一緒にから、いつになくちよっぴりハイブローな山行だ。ひとりきり飲んでもまだ充分陽が高かつたので、酔い醒ましに前

鳥帽子まで登つた。僕はベタベタ歩いたのだが、ちやつかリスキーを持って来た中村は、さつそと小屋に滑り込んだ。周囲の山々は全て一望のもとだ。何度もいいなあ……。赤牛岳の側面にはベッタリ雪が付いていた。薬

師岳東稜上部も遥かに見えた。

下った。アイゼンを装着し、東沢乗越の瘦せた陰惨な岩稜を時々吹き抜ける突風に注意しながら通過すると、最後のひと登りで水晶小屋にたどり着いた。ここでも小屋は雪に閉ざされており、小屋の上の平らな雪の上にテントを設営した。他に二張りテントがあつたが、休んでいるのか人影は無かつた。十七時頃から風がおさまり、雪も止んだ。

#### 五月二日（快晴）

シュカブラの堅雪にアイゼンのきく音が小気味よい。水晶のビーグにはほぼ稜線どおしに岩稜を登つた。この頂上に来るのは十一年振りだ。前回もやはり五月の薬師岳をめざしての入山だった。水晶岳から先へ進むのはどうやら僕達だけのようだ。頂上からの下りは岩が所々露出し、かつてクラストした急な雪面となつておりスリップに注意した。稜線に沿つてどんどん下ると、頂上はあつという間に遙かな高みとなつてしまつた。赤牛岳までは雪の稜線漫歩だ。

小さなビーグを幾つも通過したが、中村は下りでスキーパーを十二分に活用でき満足げであった。僕も負けずに頑張つたせいもあって、歩きとスキーパーでは時間的な差はなかつたが、体力的にはスキーパーはずいぶん楽なようだつた。第一なんといつてもさつそうと格好が良い。赤牛岳からはいよいよ未知の稜線だが、天氣が良いのでなんの不安もなく北西尾根を下つた。二四六五メートルの独標から一気に二一五〇メートル台地まで駆け下つた。地図では、この台地付近には地塘が散在しており、正面には薬師岳がそびえ、無雪期にはとても素敵なものだ。なんと素晴らしいことなんだう。テントを設営した後、飽きたほど薬師岳東稜の観察をしたり、陽なたはつこをしながら、残りがちよび心配になつたウイスキーをちびちびやつたりして、すごく幸せな気分に浸つた。僕は今憧れの薬師岳東稜に肉薄したのだ。

#### 五月三日（曇り、午後あられ、雷）

今日はいよいよ上ノ廊下を横断する日だ。うまく渡渉点が見つけられるだろうか。非常に不安だつた。なにしろ一年前の経験では、さら上流の薬師沢出合ですら猛烈な水量だつたのだから。金作谷出合のデブリの状況を偵察するために、空身で一九七四メートル独標からほぼ西に尾根の突端を下つた。樹林づたいに急な雪壁状の斜面を下り、谷底から一五〇メートル位の所で金作谷出合付近の様子をうかがつた。谷が廊下状となつているため、全景を見ることは出来なかつたが、出合がデブリに埋まり雪原状になつてゐるらしいことは、容易に想像出来た。金作谷出合のデブリを利用して上ノ廊下を渡り、薬師の東稜に取付くことは出来る。恐らく積雪量が増す三月中旬以降であれば東稜への取付きは問題ないであろう。出合より下流はゴーゴーと水が流れおり、また今日の渡渉のことが心配になつた。真近かに見る東稜は、迫力に満ちていた。上部の雪稜を抜けた、岩のミックスした、ザイル三～四ビッチが核心部と思われた。軽装でも、一ビバークは覚悟せねばなるまい。東南稜より派生する二本の岩稜は、正面から見るせいか、斜度があり岩を露出させて非常に悪相であつた。良いバトナーが得られれば、積雪期にこれら薬師東面の岩稜を登つてみたいものだ。

偵察地点から若干登り気味にトラバースし、中ノタル沢左岸尾根に出た。ここから正面にスゴ沢の頭南尾根を見ながら下つた。この下りも視界が良いので気楽なものだ。尾根は概ね急な雪稜で、部分的には斜面を向いて下らねばならない所もあつたが、二五メートルのゴボ一下行を交え、

中ノタル沢出合の広大な雪原に降りた。黒部川はやや幅広の思いがけずゆつたりして流れとなつて、渡渉出来る。これで展望が開けた。渡渉点を探すのに半日位費やすのではないか、それでも良い方で、場合によっては渡渉出来ないのではないかと心配していたが、そんな心配はどこへふと飛んでしまつた。久し振りに流れる水をたらふく飲んだ。小休止の後、秋田が直ちに素足となり、やや上流

側の浅そうな所を選んで渡つた。さすがに、水はとても冷

たい。水深は膝上位で、流れの幅はおよそ二〇メートルである。中村は衣服が濡れるのを嫌つて、パンツ一枚になつて渡渉した。ヒゲもじやで、スキーダイでパンツ一枚といふ中村の奇妙な姿にゲラゲラ笑いころげてしまつた。めつたに見れないものを見せてもらつた。対岸から下りながら見たスゴ沢は雪で埋まつたが、本流から見上げると、

出合よりすぐの所に結構落差のある滝が出ていた。スゴ沢左岸の尾根を登る。尾根の下部は雪壁となつておらず、しゃにむに一五〇メートル位直登するとやがて尾根の傾斜はやや緩やかになつたが、当然トレールは無く、膝位のラッセルが続いた。しんどい登りを齒をくいしばつて頑張ると、空模様が怪しくなり強風、あられ、おまけに雷まで鳴りだした。吹きさらしの稜線で雷に会つてはたまらないので、

慌てて貧弱なブッシュの陰にテントを張り、逃げ込んだ。時間が早いので、例のごとくウイスキーをやりつつ、十七時頃までウトウトして過ごした。外は風、あられ、雷とたのうの暖やかだったが、十九時頃には風のみとなり、空はうその様に晴れ渡つてしまつた。標高ではこの雷のために死者が出たことをラジオで知つた。それにつけても、黒部川本流の水で作った水割りの味は最高だった。

#### 五月四日（快晴）

昨日まで全日行動出来たのはとてもついていた。今朝も快晴だ。ちょっと疲れたナ。バリバリに凍つたテントを撤収してザックに押し込み出発した。冷え込んでよくクラストした、急な雪稜に足首が痛い。疲労のたまつた腰もだるい。黒部川の流れを通り下にして、高度感満点の登りだ。起き抜けの激しいアルバイトにゼーゼーいいながら、やつとこのことでスゴ沢の頭にたどり着いた。ここで鳥帽子以来初めて人に出会つた。薬師方面からの單独行のスキーヤーだった。これ以後、数バーティーのスキーダイ登山者達とそれ違つた。今や連休のこの稜線は山スキーハンカだ。これ以後はトレールがしつかりついているので楽なものだ。五

色山荘には番人が入っており、冷たいビールにありつけた。

五百円。ゴクラク、ゴクラク……。ビールもう一杯といふ悪魔の囁きをなんとか振り切つて、ザラ峠へ向つた。時は強風のためか、雪が少なく、夏道が出ていた。ここで幕営したいのを我慢して、本日最後の頑張りで、獅子岳と鬼岳のコルまで登つてテントを張った。久し振りに温かな土の上で夜を過ごした。

### 五月五日(快晴)

コルから上はまた銀世界だ。鬼岳は右手斜面よりまき氣味に稜線どおしに登つた。富山大学立山研究所のあるピクで、スキーヤーで立山をトラバースして大日尾根経由で下山するという中村と別れ、一ノ越へとひとり下つた。もはやスキーヤーの世界であつた。一ノ越山荘が彼らの格好のベースハウスとなつていて、雄山の気持ち良くなつて、ウインドグラストした斜面を登り、立山三山を経て内蔵助のコルに至つた。室堂側は一面の雲海で、やや風が強い。一方黒部湖側は良い天気だ。数年前強風にザイルをあおられながら登つた富士ノ折立中央稜には主稜線にも敗けない位のトレールがついていた。午後のくされ雪に消耗しながら、懐かしい内蔵助谷を下つた例によつて鏡岩の登りは腹ペコ、バテバテであった。

とりあえず五月の薬師東稜取付きと上ノ廊下横断地点の様子は明らかとなつた。次は三月だ。最も積雪が豊富なこの時期に実行してこそ、この計画の意義は高まる。夢の山行の実現はいつになるだろうか。当分この件は僕の念頭から離れそうにない。

データ

### 四月三十日(快晴)

七倉6:10～高瀬ダム堰堤上7:15/7:30～ニゴリ沢橋8:10～ブナ立て尾根1800m9:50/10:00～鳥帽子小屋13:30

### 五月一日(風雪、夕方曇り)

鳥帽子小屋6:05～三ツ岳7:55/8:05～野口五郎小屋10:25/10:50～湯俣岳の分歧11:30/11:50～水晶小屋(TS)15:00

### 五月二日(快晴)

TS 6:30～水晶岳8:00/8:05～温泉沢の頭9:10～赤牛岳11:40/11:50～2150メートル台地15:15

### 五月三日(曇り、午後あられ、雷)

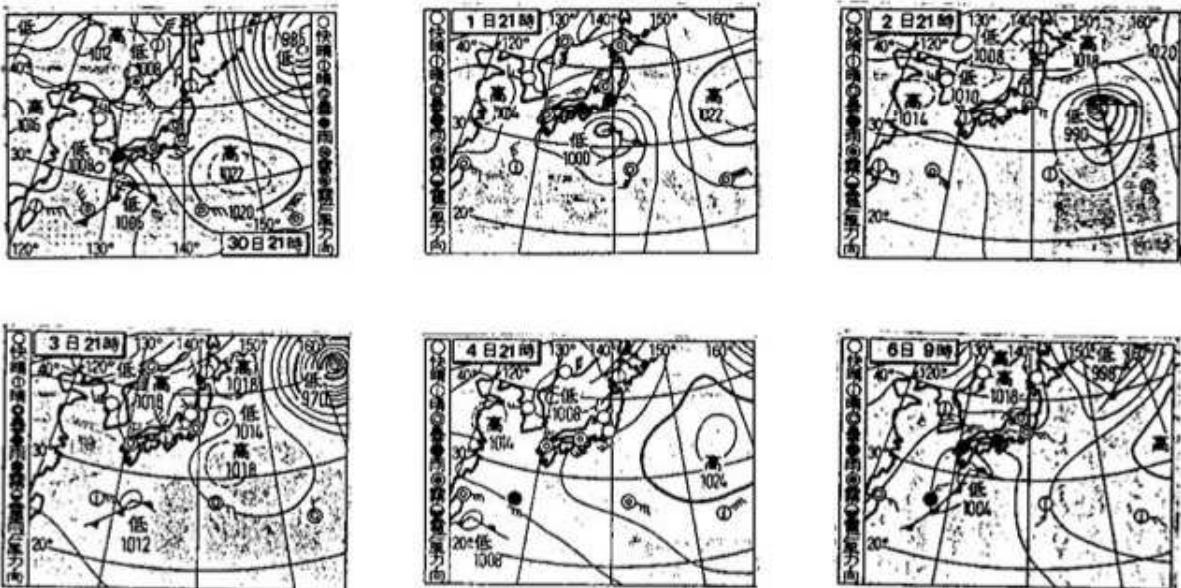
TS 6:30～尾根突端7:00/7:15～1950m付近8:00/8:05～中ノタル沢出合9:05/9:55～スゴ沢の頭南尾根2200m付近(TS)12:40

### 五月四日(快晴)

TS 6:50～越中沢岳9:20/9:30～五色ヶ原山荘11:40/12:00～ザラ峠12:20/12:35～獅子岳と鬼岳のコル(TS)14:45

### 五月五日(快晴)

TS 5:20～一ノ越6:55/7:10～内蔵助のコル9:20/9:35～内蔵助平11:10/11:55～内蔵助谷出合12:50～黒部ダム14:40



## 五月 北アルプスを滑る

日付 八十九年四月三十日～五月五日

山名

参加者 秋田、中村  
筆者 中村泰孝

秋田さんが長い間温めていたという雪のある時期の黒部・薬師東稜登攀・剣岳へ縦走というプランに、スキーを持った乗車し、最後は別れて大日岳を滑るということで同行させてもらうことになった。水晶一赤牛は前から一度行ききたかったところで、地図と写真から赤牛はかなり滑れそうに思われた。この機を逃すといつ行けるか分からぬ。東稜は苦手の岩ではないそうだし、やばいところはA氏が喜んで先に行ってくれるだろうと、かなり気楽に考えていた。

一日目 トレイルのあるブナ立尾根をまあ順調に登つて、鳥帽子小屋に泊まった。入り口を少し掘って戸を開けた。小休憩の後に鳥帽子小屋まで登り、スキーの足慣らし。こちらからの眺めはあまりバッとした。

二日目 雪の中を水晶小屋へ。昔転がり落ちたことのある東沢乗越付近で足元から二〇～三〇センチメートル厚さの表層雪崩を出す。足が下層に着いているので、さほど驚かないが、慎重に歩く。水晶小屋は雪で入れなかつた。

三日目 この山行の私にとってのハイライト。水晶岳までは人が来た跡がある。快晴大パノラマの広がる中、軽く雪を蹴散らして行く北アルプスのド真中。他に人も居ず、気分は上々。薬師の東稜がやらしそうに落ちている。一九〇メートルから二八一八メートルまで滑る物足りない。またかつて赤牛までが、けっこう長い。赤牛岳頂上から見ると、すぐ先に尾根が痩せたところがあるが、話の種にと頂上からそこまで滑った。一旦かつて二七七〇メートル位からまた滑る。午後の陽を浴びて雪の表面が適当に軟らかくなつていて快適である。笑みが湧いてくる。ヤツ

ホーと口から出る。振り返ると、大斜面に自分の描いた大きなシユブルと青い空、そしてトボトボ歩いてくるAさん。思わずムフフ。二一六〇メートル位の天国のような台地テントを張る。こんな素敵なところで眠ることはそうないだろう。

四日目 東稜はあまり樂ではなさそうなので、Aさんもパートナーのことを考慮したのか、割と簡単に諦めて、次回のために金作谷の出合を見ておこうと、一九〇〇メートル位まで下つてみた。金作谷はすごいデブリで埋まっており、黒部川にもデリッジを架けていた。登り返して中ノタル沢の方へ。しつこくスキーを履いて一九〇〇メートル位までは滑る。あとは急だ。黒部の水は多くなく、渠に渡渉。二四三一メートルのピークを目指して急斜面に取り付く。やがて雨がアラレとなり、風も強くなり疲れてきたので、二一五〇メートル付近で泊まつた。

五日目 快晴。一時間と少しで縦走路に出る。良く踏まれている。スキーを持つ人と多くすれ違う。越中沢岳と五色ヶ原を滑る。ギラギラの日差しの中、五色ヒュッテでピール。結構でした。獅子岳と鬼岳のコルで泊まる。

六日目 今日も良い天気。一面ガリガリの龍王岳の肩で記念写真のシャッターを切つてもらい、Aさんとお別れ。五月の立山は人臭い。室堂平や立山にはアリのよう人が列を作っている。これ程とは知らなかつた。ここからの三十分はスキーがガリガリ鳴り放してあまり快適ではなかつたが、振り返るとさすがに早いものだと思う。アリの一匹になつて室堂乗越、奥大日岳に向かう。大日岳もこれ程人気のある山だとは思わなかつた。十人程の実年の人達だけのバーティとも会つた。元氣で縦走している。たいしたものだ。剣は震んで見えていて時々雲がかかる。

大日の稜線では最低鞍部へ百メートル程を滑る。奥大日から先は人も減り静かになる。登り返してダラダラの頂稜を越え一服。これから華麗な(?)フィナーレだ。頂上二五〇〇メートルから広い尾根、雪に埋まつた小屋をチラッと見て、(本人が思うに)豪快に急な谷へ滑り込む。谷幅は

広く、シユブルも大きい。正面から一人、スキーをかついで登つてくる人がいる。瞬目が合い、お互にニヤッとする。かなり下まで来て傾斜がゆるくなると、突然雪が腐り、あとはあまり快適ではなくなる。牛首で板をはずし、称名滝を見物してバスに乗つた。

思えば、借り物やら兄のお下がりのスキーやらで、七転八倒して雪にまみれていた昔が夢のようだ。骨も折らずになんとか上達し、赤牛も大日も思ったように滑れ、天気に恵まれた。上田哲農ではないが、どこぞに神がいるのなら感謝したい気持ちであった。

名滝 行程 ブナ立尾根～鳥帽子小屋～水晶小屋～水晶岳～赤牛岳～金作谷の出合～中ノタル沢～越中沢岳と五色ヶ原～獅子岳と鬼岳のコル～龍王岳の肩～室堂乗越～奥大日岳～称名滝



九十年度会・個人山行より

## 野反湖～堂岩山～白砂山（退却）

日付

九十年一月二十七日～二十八日

山名 白砂山

参加者 宮本武し、正野嘉宏、橋田益功

筆者 橋田益功

林道

一月二十七日

朝九時、白砂山に向かって花敷温泉を出る。野反湖のキャンプ場付近から尾根に入り、今日は堂岩山の辺りでテントを張ろうと考えていた。

野反湖への道はこの時期でもダンブが途中まで入つていて道は閉まっている。ある程度まで車で行ってからス

キを履く。練習のつもりで林道を歩いていたが、意外となっていた。

日本海側から吹き付ける風はとても強く雪を巻き上げるので、目出帽を頭にすっぽりかぶつて寒さを防ぐことにした。林道は北に向かって続いている。今までは登りだったがこれからはそうでもない。早く終わらせて堂岩山に取り掛からなければ白砂山まで行けない。この林道をスピードに通過しなくては……。

新雪の道に二本のシユブルールをつけたが遠くに見えるキャンプ場のロッジはまだ先にある。二時になつても林道は終わることがない。「この調子では堂岩まで無理かなーそれじゃどうしよう。そんなことを思つていると宮本さんが三時半まで行動して行けることろまで」とした。

三時頃になるとさつきから見えていたロッジが随分と横の方に映っている。林道と堂岩へ行く分岐に着く。それほど疲れてはいないが、「どうしてここに来るのにこれはど時間が……」と思う。今日はここまでとし、溝地を利

用してプロックで壁を作り、テントを張った。

テントの入り口でマイナス十五度あるという。それほど寒さは感じなかつたが、マイナス十五度と聞くと「あ自分の中のシユラフ、マイナス十九度までと書いてあつたけど、大丈夫かなー」と、そんなことを思つたりする。

## 挑戦

一月二十八日

四時半に起きて、六時半に出発する。ここが一五三〇メートル、八〇〇メートルのビーグまでは上がり、そこからは尾根伝いに、堂岩山が二〇五一メートル、白砂山が二二三九メートルで、白砂山まで直線距離で五キロメートル足らずである。そう考えればそれほど重荷ではない。しかしそれではなぜ昨日あれほど時間がかかってしまったのだろう。

しかも今日は山道である。

荷を軽くするため、「テント、シユラフ、ガソリンコンロをデボして行くか」と話しあつたが、それでは今日中に必ずこの場に帰つて来なくてはいけない。天候が変わつて動きなくなつたら、事故が起きたらいろいろ考えて、竹、ガソリン、米だけをデボして行くことにした。

堂岩に行くために夏路は急登なのであるべくなだらかな斜面をコンバスを片手に、しかも下山のことを考えて赤布を付けながら登つて行つた。九時に一八〇〇メートルのピークにたどり着く。このころから、「白砂は無理としている。その手前にある堂岩までは登り詰めたい」と心配に思うようになつて、朝は曇つていて空に晴れ間が見えて、山スキーにはとても良い天気だと喜んでいた。尾根の南斜面はそれほど木がなく、巻くようにして次のコル、次のコルとスキーを滑らせる。

十時、日が差して気持ちが良い。この白砂山に山スキーをやりに来て、三人以外は誰もいない。雪に閉ざされている自然が取り回んでいる。昨日は雲と雪、今日は風弱く晴れている。この時間こそが人間界でいう快適だと思つてし

まう。頭の中で、営業マンの自分がまたぎか山スキーのガイドになつてしまつているのだ。

休憩を終えてまた三人で話す。「あと二時間、十二時まで行動して行けるところまで行く。そこから下山して今日の出発地点の分岐まで下りテントを張るか、時間と体力があれば花敷まで一気に下りてしまおうか」行って帰つてこまで往復四時間ならば、と思い切つて「自分は空身で行く」と申し出でみた。自分の心づもりは「自分が空身になら、終始トップでラップセルして距離を稼ぎたかった」からである。了承してもらひ、自分は空身で再び堂岩に向けて進む。

歩き始めて、樹林帯に入つた。ルートがつかめず、トランバースぎみに徐々に上がつて行きたいが、時間ばかりかかり思うようになつて、約一時間歩き回り十一時ごろに尾根に出たが、さつきから百メートルと上がつていいだらう。ベースはガタ落ちである。

これから先、さらに登り続けなければ堂岩へは着かない。この程度の登りにこれほど時間を費やしては、と心配になる。それにザックを背負つている宮本さんと、空身の自分と、仕事ぶりはそう変わらない。空身の分、二倍以上の働きをしなければいけないので、それが出来ない。さつきまで晴れていたのにここは曇り空になつて、十二時まではあと一時間ある。が、ここで自分が弱音を吐いた。「これだけ上がるのに一時間使つてしまつた十二時まで登りそこから下りて出発地点の分岐までは行けるでしょう。だけどここまでで終わりにして今から下りれば、日暮れまでは野反峰まで行ける。そうすれば、後は下りだからシールをはずして花敷まで行けます。明日は月曜で休日になつて、いたとしても「仕事もしなくては」と後ろ髪を引かれている面もある。

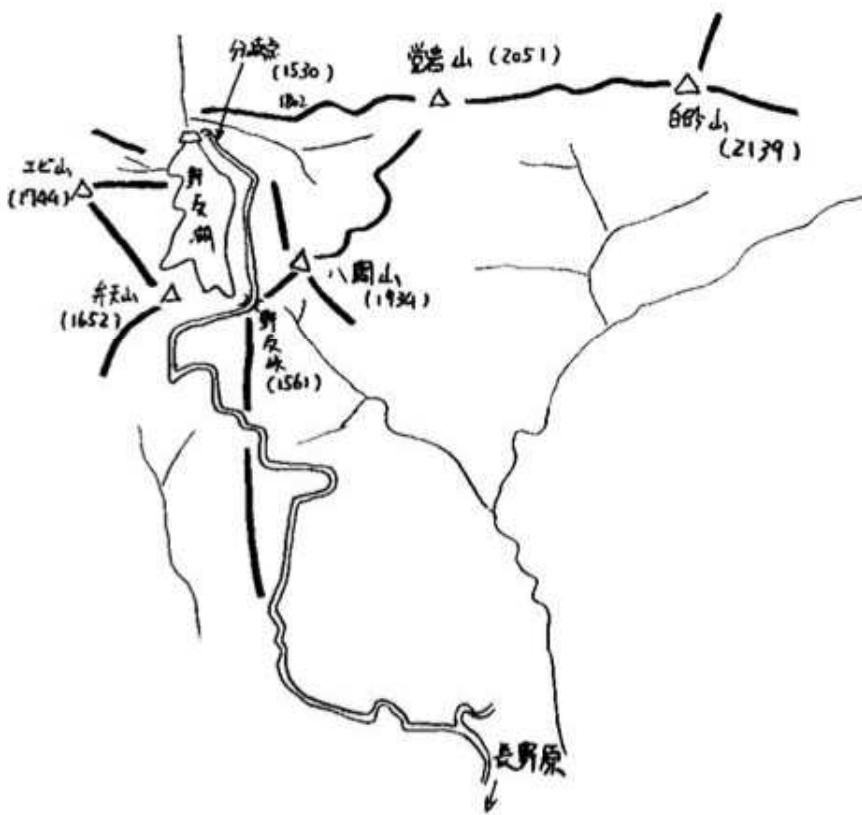
話がついたので、来た道を戻つてデボ点へ向かつた。夏ならハイキングコース程度のこの白砂山に完全に負けてしまつた。山スキーだから楽しく歩けると甘く思つてはいる。この時間こそが人間界でいう快適だと思つてし

しくて仕方がない。その思いがバネになり「よし、来年はやつてやる。必ず歩いてやる」と叫ぶだけだった。

#### 退却

十二時半頃、再び一八〇〇メートルのピークに着き、シールをはずすことにした。もし赤布を付けて来なかつたら、このピークからどこへ下りようか迷うところだったろう。下山路を確保しておいたので迷わずに済んだ。シールをはずしたスキーヒーは良く滑り、新雪の中、スキーのトップがモグラのように進み操作が難しい。ザックを背負っているせいか、気がつくと後傾になっている。スピードが出て足は棒立ちになる。これではコントロールが効かず、バタバタ転びながら下ることになる。立ち上がる時、こんなに疲れるのなら転ばぬよう下りよう決意するが、そんな思いをよそにまた倒れてしまう。

どんなにゆっくり下りても、輪かんより早いのだ。十五時、下山を始めて四時間、やっと今日の出発地点まで戻ってきた。日暮れまで、あと一時間半位だろう。デボ品を回収し、ここから野反湖の湖上を通り一直線に野反峠へと向かう。氷の上に雪が積もり、湖は大広原となっている。時は二本のシュプールの先にある。所々ストックを突き、氷の硬さを確かめる。三人が二〇メートル間隔で歩き、もしもに備える。真っ直ぐの何もないところを歩いていると、始めはすばらしく感じるのだが半分もしないで厭きてくる。しかし林道をくねくね行くよりは早いのだ。



#### 九十年度会・個人山行より 足尾松木川黒沢

日付

九十年二月四日

山名

足尾松木川黒沢

参加者

秋田誠L、根布

筆者

秋田誠

天候

曇り、時々小雪

雨のため出発ついていたが、五時近くになつて秋田宅を根布の車で出発。関越道経由で入山した。松木川への道が分からず一時間近く足尾の町外れでウロウロしてしまった。黒沢のF1は雪に埋まつており、登攀はF2から始まる。F2(四〇メートル)、秋田トップにて取付く。傾斜が緩く容易だ。落口右手の立木でビレー。天気が悪いにもかかわらず六バー(一入山しており順番待ちがあつた)F2上で沢は右に屈曲し、約一〇〇メートルでF3(四〇メートル)となる。幅広のF3は三本のラインが引ける。一番右のラインを根布が取付くが、五メートル登つたところで先行バー(一入山)の落水を顔面に受け、秋田と交代した。F3は傾斜があり、スナーグ二本使用して登つた。F3上からは急に雪が多くなり、スタンディングアックスビルで根布を迎えた。吹き溜りでは腿まで潜つた。五〇メートルほどですぐF4(四〇メートル)だ。F4は最

五時、日は落ちてもまだ西の空が明るい。やつと野反峠にたどり着いた。さあ後は下りだ。足腰が疲れてきている。林道は暗い夜の道に変わり、懐中電灯が頼りになる。何もしないでスピードが出る。ブレーキをかけても効かない。何故だろう。雪がしまつてあるからか、疲れているからか、急坂ではないのに。分からぬ。ここまで来て怪我をしてはつまらない。スピードに注意して安全に下りる。六時すぎ、車を止めたところに着き、闇の恐怖林道はここで終了した。一時間余りのダウンヒルだった。

感想

目的の山へは行けなかつた。悔しい気持ちはあるが、反面、自分は雪山で力いっぱい戦い、負けはしたが怪我なく安全に下りて来られたことに充実感を持っている。寒くて雪がしまつてあるからか、樹林帯が厳しくても、テント生活やスキー滑降など山スキーの楽しさはいっぱいある。

再び、冬の白砂をスキーで行こう。次の目標は出来た。山スキーをやりに来ようと心から思う。より確実に歩くために。



おり、恐るおそる利用させてもらった。困難なビッチにもかかわらず天気が良いので気持ちには余裕がある。テラスから左の凹角に入り「一〇メートルで懸垂岩の上部に出た。このビッチはホールドが不安定な上に、斜度が強く結構でこすつた。凹角には不安定に雪が付着しており、そのため難しい登りとなつたようだ。懸垂岩上のテラスからへ登つて来た四角の上部の雪壁を横断して、岳樺が生えたテントが張れそうな広いテラスへ。このテラスはアルンゼ左岸の尾根上にあり、簡単にアルンゼにも下れる。テラスからのルンゼ左岸の幅広い雪稜をザイル一杯二ビッチたどると、尾根は痩せた岩稜となつた。ザイルの流れを考え、「一〇メートルでビッチを区切り五ビッチ登ると、やがて岩稜は小さなコルとなり尾根の形状を失い岩壁となつて遙か上部で鳥帽子尾根と合流していた。アルンゼのコルであつたコルから五メートル下り雪壁を「一〇メートル」トラバースすると、幽ノ沢第三ルンゼのツメを形成するルンゼ（ダイレクトルンゼ）に入る。ダイレクトルンゼは雪が締まっており、傾斜も緩く快適にぐんぐん登り、四ビッチでダイレクトルンゼのコルに抜けた続いて細かい岩を一〇メートル登ると待望の五ルンゼの頭であった。今日中に国境稜線へ抜けるべくさらにザイルをのばしたがやがて僕達は夜のとぼりに包まれてしまつた。天気はまだ保ちそうだし、もう先は読めた無理をすることはない。ツェルトを張るのに充分な広さのテラスがあつたので行動を打ち切りもう一晩一ノ倉尾根の夜を味わうことにして、星過ぎまで晴れていた空はすっかり雲で閉ざされ、風が少し出ってきた。

### 三月二十四日（雨）

一ノ倉尾根はもはや容易な岩稜となつていたが、慎重を期してへ少しアンザイレンして登ることにし、た四ビッチで無雪期に見覚えのあるチムニーを抜けると、一ノ倉尾根は広い雪稜となつた。さらに

四〇メートルザイルをのばし、ようやく三日ぶりにザイルを解くことができた。合計三十九ビッチの登攀であつた。天気は下り坂の様子で、雨模様の西黒尾根を満たされた思いで一気に駆け下り帰路についた。

### データ

#### 三月二十二日（快晴）

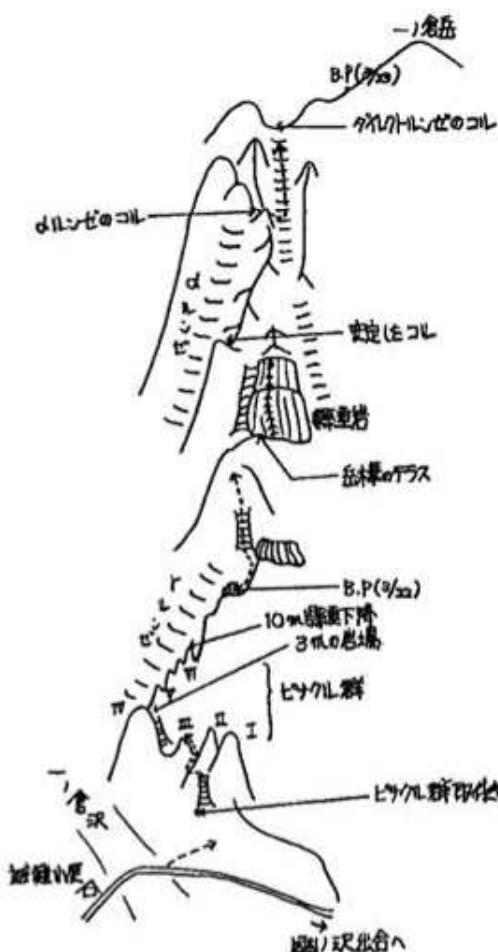
指導センター 5:00 ~ 一ノ倉沢 5:50 / 6:20 ~ 一ノ倉尾根 1050m 付近 7:00 / 7:20 ~ ピナクル群取り付き点 8:20 / 8:40 ~ 露岩のテラス (B.P.) 15:00

#### 三月二十三日（曇り後晴れ）

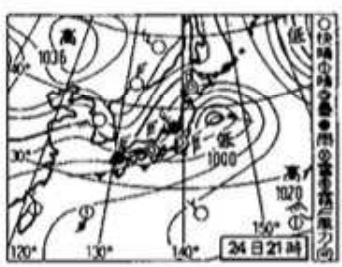
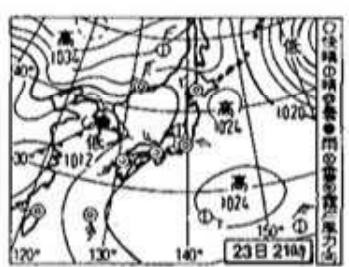
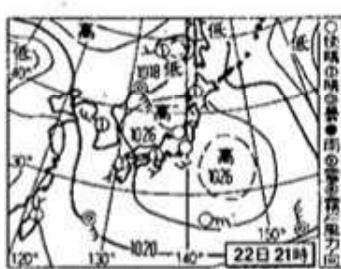
B.P. 6:10 ~ 懸垂岩 10:10 / 12:20 ~ アルンゼのコル 15:50 ~ 5 ルンゼの頭 17:05 ~ 一ノ倉尾根 1850m 付近 (B.P.) ~ 18:00

#### 三月二十四日（雨）

B.P. 6:30 ~ 一ノ倉岳 8:25 ~ 谷川岳 9:35 / 9:40 ~ 指導セン



一ノ倉尾根 (1990.3.22~24 作図:秋田)



九十年度会・個人山行より

## 谷川岳幽ノ沢右俣リンネ

日付 九十年九月十七日

山名 谷川岳 幽ノ沢右俣リンネ

参加者 宮本、正野

筆者 正野

九月に入つて幽ノ沢右俣中央壁左フェースをねらつてい  
たが、日曜日で雨のため実現しなかつた。今日も朝から霧  
雨で断念せざるを得なくなり、V字右に変更して、一ノ倉  
沢出合を五時半に出発した。濡れたスラブをガスでてこす  
り、V字状岩壁下まで二ビッチザイルを使う。視界は、確  
保していく一ビッチ先の宮本さんが見えないくらいなので、  
取り付きまで不安になる。右俣リンネ入口でルートを再検  
討し、「やはり行ったことがないルートに行こう」という宮  
本さんの意見で、ルートを右俣リンネに変更し、ルート図  
の本を開いて学習する。八時登攀開始。

最初の十五メートルの滝は滝の左下から落口へ上がるが、  
残置ハーケンが遠く手こずつたが、セカンドのこともあり  
無理矢理AOで抜けた。ここからは二〇〇メートルの沢歩  
きの様な傾斜の緩いルンゼが続くのでザイルは付けずどん  
どん進む。リンネは両壁がせまっている。特に右側は、垂  
直の壁が頭上かぶつているようで、亀裂で出来た地下を歩  
いている様だ。途中小滝が有つたが、登山靴なのでフリク  
ションがきかず、肩や膝を押しつけて登る。この時、着て  
いるカッパの袖口から滝の水が入り、背中まで回つてくる  
ので気持ち悪かった。中間当たりで一回ザイルを使って右  
壁をトラバースし、三〇メートル滝下へ到達した。この頃  
からあたりが少し明るくなり、視界がきき雨もバラバラ程  
度になつて來た。ここから再びザイル確保で滝左側のハン  
グ下へ行き、一番の核心部の登攀となる。自分がトップで  
ハング左側のそんなに傾斜のない壁に取り付いたが、濡れ  
ていることと、黒い苔がホールド内にあるため、取り付  
てすぐ滑つて落ちてしまった。「交替するか?」という宮本  
氏の脅しは受け入れず、再び取り付きやはり滑るので、

持ってきたナットを突起に引っかけAOで小さなスタンス  
に立つた。ここから左壁と正面壁の間あたりにある残置  
ハーケンを目指して登るが、普通にたてた足場でも濡れて  
いるためすべり、安心して体重はかけられない。足や手の  
置き方を考えながら動いているので非常に時間がかかつた。  
足場が小さくなつてもう体重をあずけられなくなつた下か  
ら一五メートル位でアブミに切り換えた。残置ハーケンは  
古いものばかりで動くものもある。でもアブミの方が滑ら  
ないのでよほど安心できる。八メートルくらいアブミで進  
むと手がかりの大きい岩が出てきたので、ここから再びフ  
リーで上部に抜けた。上にはしっかりとボルトが打つて有る  
ので、安心して宮本氏を確保する。滝の上はならかで沢  
登りの最後の情景なので、ノーザイルで沢にそつてとこと  
こ進む。二ヶ所三メートルくらいの滝か壁の様なものが出て  
きたが、ホールドが大きいのでそのまま勝手に進み、正面  
に草付きの壁が出てきた所から左に上がる沢と分かれ  
堅炭尾根へ抜ける草付きに入る。藪こぎみたいな草付き急  
いで真っ直ぐ登ればいいのだが、足場の土がずるずる滑り、  
ホールドも草しか無いので、気持ちよくない。確かに草付  
きで滑つたら沢へ一直線だろう。用心してどうにか堅炭尾  
根へ着いた。十四時。後は芝倉沢へ下降し、林道を回つて  
再び一ノ倉出合に十六時半着。沢登りかと思ったが、とん  
でもない、人工登攀になつてなかなかやりがいのある登攀  
だった。しかし雨の日の岩は滑つてつらい。三〇メートル  
滝のところのフリーは「十」と書いてあるが、あれは「以上  
だつたと思う。

九十二年度会・個人山行より

## 前穂北尾根

日付 九十二年五月二日～四日

山名 前穂高岳

参加者

筆者 横田益功

平成四年五月二日から四日まで、春合宿として北アルプ  
ス前穂高岳北尾根へ入つた。

上高地から徳沢・奥又白谷・慶応尾根を経由し北尾根に取  
り付く。初日は八峰のビーグルにテントを張った。

五月三日 朝の撤収を終えたばかりの僕たちの前を二人の  
パーティが先行していった。続いて僕たちが登り出す。

アップダウンを繰り返しながらも軽快に進む。先行バー  
ティーが六峰に取り付いている。ここから見るとだいぶ

立つて見える。彼らはザイルを付けずに登りだしたが、僕  
たちはザイルを出し、シングルでアンザイレンをする。正

野がトップで登攀を開始する。出だしのブッシュがらみの  
ところが急だが、その上は雪面が続いている。足場がバケ  
ツになっていたのでそれほど不安はない。アイゼンの出っ

歯を利かせて急斜面を登る。ワニビッチ目で緊張している  
のせいか、アキレス腱が痛い。

五六のコルに来ると涸沢からも何パーティか登つてきて  
いる。さすがに風が強が陽も当たつてきた。天気がよいの  
で、何パーティも登つてくるのが見える。さすがにゴー  
ルデンウイークだけのことはある。涸沢のテント村もいろ  
とりどりのテントで美しい。

五峰の登りではザイルをだすパーティと出さずにフリー  
で登るパーティと半々くらいだ。何人も登つているので、  
しっかりしたバケツができるようだし、ホールドもた  
くさんありそうだ。僕たちはフリーで行くことにした。雪  
稜をアイゼンで軽快に上り切ると、ルートはトラバースになつた。ちょっと緊張する。二、三メートルで抜ける。次



は急な雪稜だ。前の六峰の登りと同じようなのでそれほど恐くはない。ダブルアックスで十メートルほど上がり、四峰へ。三・四のコルへの下降は左からダブルアックスでクライムダウンする。

北尾根は稜線を忠実にトレイスするため、巻かずにはまつすぐな上り下りを繰り返す。だから途中で抜くことはできない。ついに三・四のコルでは順番待ちとなつた。五・六のコル同様風が強い。四人でツェルトを被つて風を避ける。

二時間ほど待つて、午後一時に四峰に取り付いた。オーダーは畠田・中山、続いて正野・中村。まず畠田がトップでゆく。「いくぞ」と声をかけ、右手にバイル、左手にビックルをもつて取り付いたが、岩登りなのでまったく使い物にならず、あわてて仕舞い込み、手袋で登っていく。はじめ右の凹角にはいりそうになるが、上はAゼロとなり登れず一度降りて左から取り付く。スタンスが一センチ位しかなく、しかも立っている。一メートルほどなのになかなか越せない。足を何回も置き換えるながらやっと這い上がる。

上部の雪面はダブルアックスで難なく抜け、三十メートルほどいったところでハーケンが二本打ち込んでいた。ここでビックルを切ることにする。エイト環をセットし、コールをかける。やがて中山が快調にあがってきた。そのままツルべで、二ビックル目チムニ一下までザイルを伸ばす。

三ビックル目、畠田がチムニに入るが上から雪が雪崩のようどんどん落ちてくるのでやめて右へ巻き上がる。上から懸垂下降で降りてくるバーティーがあり、彼らが雪を落としたのだった。三十メートルほどでテラスに着いたが、ちょっとザイルを伸ばして、上のせん塔状の岩にザイルを巻いて確保に入る。

四ビックル目は中山、二十メートルで懸垂岩のピンへ。五ビックル目も中山、トラバースの手前までビックルトアイゼンを使って斜面を上がる。六ビックル目も中山、右下へトラバースしてからその上へ。七ビックル目、傾斜が少しゆるくなつたので、コンティニュアスの要領を中山に教えてもらい、中山トップで登りだす。高度感はあるが、なだらかで雪もなく、中山トップで登りだす。高度感はあるが、なだらかで雪もなく、

安定している。二峰の頭についた。最終ビックルも中山トップで前穂直上へ。終了は五時半であった。

## 正月の朝、奥穂高岳に登る

日付

九十二年十二月三十日～一月三日

山名

奥穂高岳～西穂高岳

参加者

掛川、風間、正野、畠田

筆者

畠田益功

十二月三十日

涸沢岳西尾根の登り口から樹林帯で急坂となる。蒲田富士に行く間にも何ヶ所か天場になる所があった。

十二月三十一日

樹林帯を過ぎしばらく行くと蒲田富士（ブラー）に着く。

ここまで急坂で高度を稼いだが、ここから見る涸沢岳も一気に高度を上げている。さすが三〇〇〇メートル級の山である。ブラーは平らで天場に適している。ビックル、アイゼンをきかせて登っていくと、稜線づたいとなる。それからトラバースぎみに登りしばらく行くと涸沢岳となる。涸沢側は雪庇が出ているので要注意。涸沢岳のすぐ下が白出のコル（穂高山荘）である。冬期小屋が使えたので快適。二十人ほど入る。満員だったので暖かかった。

一月一日

奥穂の登りははしごから始まる。風に飛ばされないよう

に耐風姿勢をとりながら一步一歩確実に上がる。一時間ほどで山頂、穂高の真ん中にいる。この景色、とてもすばらしい。さて、これからが核心だ。午の背は懸垂下降する。

間の岳に着き、後は西穂だけだ。西穂への道はいくつもの両側がスッパリ落ちている岩稜なのでザイルを使つたほうが安全だ。ロバの耳が「ここにいるぞ」と言わんばかりに存在感を出している。雪壁を登り、くさり場のトラバース。高度感はバツチあり比べるものがない。アイゼンの部に着いた。岳沢側をザイルを出してトラバースするらしいが、今回、岳沢側に懸垂して向こうのコルへ上がろうとしたが、吹き溜まりでラッセルが大変であった。シェルンドが吹き溜まりの中から現れたり、気温も高いので雪崩のではと思ったがなんとか向こうのコルへ着いた。天狗のコルまでもう一頑張りと思っていた。岩稜になると懸垂をしてどんどん下りるがまだ着かない。天狗のコルに向かって下りるのは難しい。支尾根が次々とつめてくるので晴れても迷う。夏道づたいに印を探して下りるがどうとう今日は天狗のコルまで行けなかった。

出発をきかせて通過する。力いっぱい蹴り込んでいたのでアキレス腱がとても疲れた。登り方を教えてもらひ次に備える。岩が出てきて不安なところはザイルを出して懸垂下降をする。トラバースして雪壁を登るとジヤンダルムの基部に着いた。岳沢側をザイルを出してトラバースするらしいが、今回、岳沢側に懸垂して向こうのコルへ上がろうとしたが、吹き溜まりでラッセルが大変であった。シェルンドが吹き溜まりの中から現れたり、気温も高いので雪崩のではと思ったがなんとか向こうのコルへ着いた。天狗のコルまでもう一頑張りと思っていた。岩稜になると懸垂をしてどんどん下りるがまだ着かない。天狗のコルに向かって下りるのは難しい。支尾根が次々とつめてくるので晴れても迷う。夏道づたいに印を探して下りるがどうとう今日は天狗のコルまで行けなかった。

一月二日

昨日下りた沢をもう一度登り返し夏道を見つけてルンゼを下り、トラバースして支尾根を越し懸垂をするとすぐ下

が天狗のコルだった。昨日は二本手前の沢を降りていってしまったようだった。一日ぶりに無線交信が取れて現在地を知らせる。

天狗のコルまでは岩稜を下り飛脚側を卷いてようやくついた。天狗の頭へはくさり登りから始まる。飛脚側をトラバースして雪壁を進み天狗の頭へ出た。稜線づたいにもトレースがありこちらのほうが安全に来られそうだ。雪面を下りクリムダウンをして間の沢のコルへ着く。間の岳の登りは岩稜登りとなる。やせた尾根なのでトレースを外さないよう登る。やせているが今までに雪壁の登下降をいつもしているのでスイスイだ。ガスが少しかかってい

たため風も弱かった。

間の岳に着き、後は西穂だけだ。西穂への道はいくつものビーグルがあり着きそうで着かない。岩稜の登下降となるが三日もアイゼンを履いているとツメの先まで神経がいき自由の足となり歩ける。

「ここが西穂だと思つた所より二つ先のピークが本当の西穂であった。ここから先はよく踏み固められた雪のハイウェイが敷かれていた。稜線づたいを上高地を下に見つ

でこぼこしながらハイウェイを下りる。

独標で関根、菅本が迎いにきてくれた。予定の一日前で歩き始める。もう岩棧はなく斜面が西穂小屋まで続いている。

途中で牧野、瀬藤がニコニコしながら迎い出してくれた。皆でスタート下降する。こんな所こそアイゼンを引っ掛けな

いように注意。西穂山荘に着いて皆の顔を見たとき、「着いたぞ」「待つてくれてありがとう」感無量である。紅茶をもらい、天場はすでに用意してあり整地してあつた。テントを皆で張る。人手があるので張れた。何と雪袋も準備してあつたことはありがたい。

この合宿の感動をまだ十分実感できていないかもしれないが、参加できてとても感激している。



九十三年度会・個人山行より

## のばれなかつたルート

### 谷川岳一ノ倉沢衝立岩正面壁

#### ダイレクトカンテルート

日付 九十三年六月六日

山名 谷川岳一ノ倉沢

筆者 桐田益功

天候 曇り

昨夜八時に北浦和を出発して、0時過ぎに一ノ倉沢出合についた。途中関越道で、バケツをひっくり返したような豪雨にあつたが、ここ路面は乾いている。四時半出発のつもりが、四時四十五分に起きた。出発は五時四十五分。出合まで雪渓が残っていて道から一步ふみだせば雪の上。のぼりつめてテールリッジにつく。天気はキリションでガスが下りてきている。岩はよく見えるが頭上は雲、水上の方は少し明るいようだ。滝沢にはよく水が流れている。その横にもう一本。足も濡れているが、今雨が降っているわけではなくカツバは着ていない。なんともこれから晴れるのか、もつと降るのかわからない。フリクションを利かせて、正野、相田がどんどん登っていく。中央稜取り付

きに、七時十分着。壁はぬれていてよくないが、とりあえず準備を始める。少し寒いのでカツバの上だけ着る。正野、瀬藤、内海は南稜に回った。七時三十分、中山、掛川ペア、風間、相田ペアで衝立岩に向かった。アンザイレンテンテラスにつくが先行バーティーが降りているので順番待ちとなる。八時三十分やつと降り始める。十五メートル懸垂して少し上がった草付きで後を待つ。一ピッチ目の始まり。草付きを右上しガリ一をつめてバンドに出て左へ、ハングの下につく。先行バーティーのトップが登っている。続いて風間、中山、掛川、がバンドについた。九時三十分。先行バーティーのセカンドが登り始める。天気は少し良くなつた気がするがたまに雨が降る。ここはハング下なのでねれないのだが、十時、風間さんトップで登り始める。ハング下まで五メー

トルはフリーでいかなくてはいけない。いいバランスで無言のままハング下へ。シューリングにアブミをかけて上がっていく。エイト環で確保していると、一メートル、一メートル確実にザイルがのびていく。ハングをすぎ、回かくの垂壁をアブミのかけ替えて進んでいく。あと二十。コミニケーションをとるべく風間さんに叫ぶが返事がない。聞こえているだろう。このバンドから、上はえぐったようなハングが頭を押さえ、下は衝立スラブがよく見える。十時四十分、ビレイポイントのレッジに着いたようだ。ビレイ解除。セカンドで相田が、ダイレクトカンテに取り付く。アブミをさげ、フリーで登り始める。ホールド、スタインスともにあるが、垂壁なので慎重になる。残置のシューリングにアブミをかけ、やつとランニングビレイに手が届いた。一段上がつて次に掛け替える。シューリングにアブミをかけているのでつっぱりがやりにくい。二段目に立つたまま次へと掛け替えていく。ハングの下を左へ上がり一步フリーも腕はあまり使わないようにならが、ピンが少し遠かつたり、古かつたりして緊張した。ランニングビレイをはずし、ぐると、ひっぱられてたいへんだ。カンテを右から左に乗り越し、つかみ所のないきれいな壁を、アブミをかけ替えながら風間さんの待つ。レッジに頭を並べた。十二時半一ルドをつかみヨシヨシ体を外に向けて、風間さんに並ぶ。先行バーティーはもう見えない。天気は朝から変わらずガスっているが明るい。中山、掛川ペアは、スタートが遅いので帰るという。僕達は天気が回復しないだろうし、時間もかかりそうだ、と判断して懸垂で元のハング下に降りることにした。このレッジから先、三ピッチ目は、ピン、ボルト、ステンレスのボルトとたくさん打つてあり、十五メートル位上がり、ハングをかわしていくように見えた。

また来よう、天気のいい日に。と心でいつて下降の準備を始めた。シューリングで自己ビレイをとり、ザイルをはずした。懸垂用のシューリングにザイルを通して、ダブルフィ

シャーマンで結んだ。端末のザイルをはずしハチノジ結びにしてザイルを下に垂らした。エイト環をセットして相田が降りる。ザイルがビンと張られ、しかもぬれているので滑りが悪い。じわじわ降り、残り十五メートルは空中懸垂となる。ハング下のテラスに着いた。中山さんが一ピッチ目を降り始めた。十二時五十分。風間さんも滑らないザイルで、テラスに着いた四人が草付きの四角まで降りたが、岩がぬれているので、アンザイレンテラスに上がるのに時間がかかった。左上するクラックを使い、ザイルをフィックスする十三時四十分アンザイレンテラスに四人並んだ。ここから懸垂で降り、草付きのはがれそなところでザイルを回収し、十四時、中央稜の取り付きに戻った。腰から重いハーネスをはずし、ザイルを束ねてザックにしまった。テールリッジをズックで下降し、草付きすぎ、四十メートル懸垂してクライムダウンでテールリッジを終了、雪渓を滑りながら降りた。その横をダイレクトカンテの先行パーティが駆け下りていく。あつという間に合戦まで行つてしまつた。僕達が合戦に着いたのは、十五時四十分だった。テントは風におおられて駐車場の下の河原に落ちていた。ダイレクトカンテに登るためには朝もう少し早く出よう。心も体も鍛えておくぞ、風間さん、勉強させていただき有り難う御座いました。

同年八月二十二日、相田、瀬藤で登つてきました。



九十三年度夏合宿より  
初めての合宿とロッククライミング

日付

九十三年八月十三日～十六日

山名

北穂高岳

滝谷

筆者

加藤

九十三年八月十五日、北穂高岳滝谷クラック尾根。私の初めての本番ロッククライミングだ。滝谷だよ、すごいでしょ、五人でつながってトップが相田さんで二番目が私。私は左と右どちらを通るかジャンケンして決めましょう……。オレが勝ったから今度はオレがトップやります！」

こんな会話ができるぐらいの余裕が欲しかったな。しかし現実は、さにあらず、寒さと緊張で身体がガチガチに硬くなってしまった。実は、どこがジャンケンクラックだったのか全く知らない。とにかく最後まで登ればいいや、と思った。垂直に近い（ような気がした）壁でホールドが見つからず、立ち往生ならぬ取り付き往生していると、三番目の門田さんが下から追つて来て、彼の手を踏みそうになつた。

私は、「門田さん。ここは難しいんだ。ちょっと待つてくれ」。門田、「わかっています」。私は、「その手を踏んでしまうよ。手をとげてくれ」。門田、「はい、わかっています」。門田さんの声は悲しげに聞こえた。結局、手はどれられないかったと記憶している。彼も必死だったようで、手をどう落ちるという状況だったのではないか。もしかしたら、あそこがジャンケンクラックたつたかも知れないな。

ザイルワークらしいことを何かしただろうか。一ピッチか三ピッチ目で、セカンドとしてザイルを上へ送り出そうとしたら、危なっかしいので掛川さんに交替させられた。ドベルザイルでやつたので門田さんにつながっているザイルが私のザックに引っ掛かり、それをはずす動作を何度も

もした。また、ビレー地点に着くたびに、絡まった二本のザイルをほどく作業を相田さんに命ぜられて門田さんと一緒にやりました。こんなのはザイルワークじゃないな。トホホ。

ガイドを雇つて登つたようなリッヂな気分のする、初めてのロッククライミングでした。

今回は初めての会山行でもあり、新人としての悲哀も味わつた。最後の夜、寝たときは足の先がテントの入り口付近にあり、そこには水が溜まつて冷たい。夜中に目がさめると、自分の足に誰かの足がどつかりと乗つかっていて身動きができない。漬物石のような重さで、左隣りの風間さんのだろうと思った。おかげで身体を入れているのは、その夜北穂の小屋に泊まつて中島さんのシュラフカバーで寒くしようがない。中島さんのザックにはシュラフも入つているはずだが、そのザックの上には右隣りで相田さんが寝ている。一人ともよく眠つていて、漬物石のこともシュラフのことも言ひ出せないな。新人だから、相田さんが寝ていても、朝までほとんど眼を閉じて寝た。後で聞いたら、清物石は、テントの端っこにいるために斜めに寝ていた相田さんのものだつたらしい。

話は戻つて、初日、沼沢に入る前、沼沢の駐車場で中山さんに、ザイル一本、ガソリン缶二個、酒の紙パック一個を渡され、それだけでしめて十キロか。私のザックは五十五リットルくらいのものが担いだら鬼のような重さで、心に暗雲が立ち込めた。肩が痛いので、時々ザックの底に両手を添えて持ち上げながら歩いているのは、私だけだった。内海さんのザックは私のものの二倍ぐらいの大きさに膨らんでいた。すげえな。なんとか遅れずに歩き通すことができ、ほつとしました。しかし、暗雲が消え去つたわけではない。この重さは冬の三分の二ぐらいで、七十リットルぐらいのザックを用意しなければならないという。丈夫かな。とにかく七十リットルのザックは買います。だから、これからもよろしく。

## 滝谷第四尾根の登攀

山名 北穂高  
参加者 内海、他  
筆者 内海

前日の雨も上がり、朝五時に起床しテントの外を眺める。ガスは掛かっているものの北尾根の稜線はうつすらと見えた。昨日停滞したぶんやる気に満ちていた。朝食を済ませ、五時半に出発する。北穂の南稜を二時間かけて登る。登るにつれてガスが時折切れる。東棲と北尾根に朝日が当たる光景が気分を和ませてくれる。初めての滝谷、不安と闘志が入り乱れている。五月の合宿で見た時にはとても自分が登れるとは思わなかった。それから三ヶ月、こんなにも早く登るとは思わなかった。しかも滝谷で一番長いといわれる第四尾根である。三〇〇メートルの岩登り、不安である。七時四十分に松波岩に着く。身支度を整え八時にクラック尾根に取り付く。バーティーと別れてC沢に向かう。松波岩の脇を通り尾根を左に入していく。すぐにC沢の下降点につく。幅が六~七メートルと狭く、一面に落石が堆積していくしかも不安足ときたもんだ。初めは怖いもの知らずで進むことができた。しかし落石を頻繁に落とすと沢じゅうに音が響き独特の雰囲気をかもしだしてくれる。涸沢とちがい草一本虫一匹見ることすらできない。段々怖くなってくる。それにつれて歩く速さも遅くなる。「こういふところはだましまだましくんだ」といわれたけど、どうやってだますんだかわからないよな。と中山さんがいった。確かにそうである。岩をだますといわれたってどうやってだますんだろう。詐欺師みたいに岩を言いくるめるわけでもないしどうせ同じだますんだつたら……。途中何回か懸垂下降をする。ソノコルについたのは十時半であった。予定より一時間遅い。そこで地金で武装して同時に登攀開始。一ピッチ目はノーザイルで進む。とくに問題はなかったがソーザイルというものはなんとなく不安を感じさせる。一ピッチ目からザイルをつける。中山さ

んがトップでその後に中島さんと僕がくつづいていく。Aカンテ下の凹状を登る。Aカンテの左に出る。ここでルートを迷ってしまったがすぐにわかった。Aカンテに向かって右にトラバースして、Aカンテに取り付く。思っていたより易しく快調に登ることができた。天気も良く晴れ間が出来ている。気分もいいし、さつきまでの不安も感じなくなっていた。Bカンテは左にいかないようにした。ホールドがあまり無さそうに見えたが、カンテの縁を登る。体が空間に飛び出しているような気がして怖さを感じるが、上で中山さんが確保しているのである。怖いながらもスリルを楽しむ余裕さえ感じることがそのときはできた。Bカンテを登り、水平リッジを進み、広いテラスで休息を取る。左にグレボン、右にツルムを眺めることができる。中山さんは名所・旧跡がいっぱいあるねなどと言っている。第三尾根にはC沢と一緒に下りて来た一人組のバーティーが登っているのを中島さんとすごいねーとかいいながら眺めた。中山さんはクラック尾根のバーティーと定時交信をしている。向こうは滝谷特有の下から吹き上げる風で寒いと思のこと。こちらは逆に風もなく時折晴れ間もみえるいい天気ときたもんだ。C沢の下降でこすつた分登攀終了も遅くなるが気分がいい。普段の行いがいいのかなーなんて思つたりもする。交信が終わる頃になると風が出てきた。そんなにひどくはないだろうと初めのうちは思った。十三時半ごろにCカンテに取り付く。乗れそうなスタンスも無くどうしようかなと考えていると目の前にランニングブレイがちらつく。手を延ばせば届く範囲である。これにつかまれば楽に登ることができる。そう思うとランニングブレイがオタスケに見えてくる。しかし……突然、それがやはり雨はやなものである。凹角に取り付いて浮き石が多いのが気になりはじめた。凹角を抜け、エンビツビナ

クルに出る。霧雨程度だった雨も激しく降り始めた。風も強くなりトップをブレイしているときは寒くてしようがない。エンビツビナクルから右下に回り込むようにトラバースして、下降点に着く。そこから二〇メートルほど懸垂下降する。いよいよ核心最後の二ピッチである。もういい加減嫌になつてきていた。早くテントに帰りたいと思う。左の細いクラックに取り付く。クラックに沿つて登る。クラックの上のフェースをアブミで越えチムニーになる。雨で岩は濡れ、荷物を背負っては難しいというので中山さんはフェースの下まで降りて再び登る。チムニーにオタスケを置いていっしてくれたので楽に登ることができた。そこから少し登るとDカンテの下に出る。そこで一回ピッチを切る。この状況ではDカンテは無理とのことで右に周り込んで凹角のとなりのフェースから行こうとするが難しいので凹角から行くことにする。出だしから悪くてすぐオタスケのお世話になる。凹角の右側の壁にアブミが二台掛けである。そのアブミにつかまるためにさらにオタスケを使う。ここまでオタスケのお世話になると目に入る装備が全部オタスケに見えてくる。ザイルでもつかんでしまおうかと思つたがさすがにそこまではしなかつた。凹角を抜けると浮き石だらけの岩場でつかむ岩はすべて浮き石という状態である。僕はずっとザイル張つてくれと叫んでいた。その声は尋常ではなかつたと中山さんは後で言つていた。そりやそろうであろう。こちら必死で岩にしがみついていたし、おちるのが嫌なのだから。最後の二~三メートルの垂直をこえると中山さんが立つていていた。やつと終了点である。十八時三十七分であつた。風が強くバランスを崩しそうになる。中島さんをブレイし、ザイルをはずす。どうにか明るいうちに終了点につけたという安心感も束の間、辺りはどんどん暗くなつてくる。暗夜行路と言う文字が頭に浮かんだ。はっきりしない踏み跡を辿りながら稜線を目指す。十八時五十一分、縦走路にてた三人で握手をし、おもむろにヘッデンを出す。辺りは暗闇とガスでほとんど何も見えない状態であった。ヘッデンの明りを頼りに標識を捜すが、結構

てこする。縦走路と言えども結構緊張させられるようなどころがあり慎重に進む。南稜の分岐に着いたのが二十時九分。南稜を下り始めたが道がよくわからない。中山さんの指示で小屋に向かうことにする。小屋まであと五~六分だからの一言で気が抜けてしまったのか足取りが重くなる。二十時二十八分小屋に到着。やっと終わった。雨具を脱ぎ小屋に入ると別天地である。小屋の布団に入ると安心感と疲れからぐっすりと寝ることができた。

## 北岳バットレス第四尾根

日付 九十三年九月二十五日~二十六日

山名 北岳

参加者 桐田、白子、門田  
筆者 門田

岩登りの初心者は、何々バットレスとか、ガリーとか、  
~フェースなどのカタカナ専門用語を聞かされると理由もなく恐怖の念を感じてしまう。初めての岩登りであった滝谷(クラック尾根八月)では、B沢の下降と取り付きまでのトラバースだけで非常にびびってしまい、先輩方に迷惑をかけてしまった。それにしても連れていて下さった方には申し分けないが、滝谷という所は岩陰から天狗か何か飛びだして来るような雰囲気のするやなところであった。

二度めの北岳バットレスもガレ沢の下りはないが、クラック尾根よりも高度感があるというし、江ノ島のマリンタワーに登つただけで足がすくんでしまう僕としては、やはり不安は抑えきれない。今回は心配な点が三つほどあった。一つは天気のこと(雨中の岩登りは御免だ)。二つめは下部岩壁のアプローチにdガリ一大滝か第五尾根支稜を使う。そうだが、そこから第四尾根の取り付きまでどこをトラバースしていくのかさっぱりわからないこと。三つめは第二コルの上のV級の垂直壁の事である。もらった資料には「コル

2からハングを越して・・・」と書いてあるが、この「ハング」という文字が妙に引っ掛かる。自分で手に入れた資料にはとくに「ハング」とは書いていなかつたが・・・。荷物を軽くしたいばかりにシユラフカバーしか持っていないなかつたので、夜はくそ寒くてよく眠れなかつたが、一日めの朝は満天の星空が大変きれいだったので、非常に気分が軽くなつた。前日に下部岩壁(第五尾根支稜)で遊んでおいたのも大変良かつた。当日はdガリ一大滝を登るはずだったが、先行バーティーがいたので昨日と同じ第五尾根支稜を登り、さらに一ピッチ登ると、そこから緩傾斜帶の方向へ人ひとりやつと通れそうな道がついているではないか。なるほど、横断バンド。とはこの事か、資料にはおそまつな線が二本ばかり引いてあるだけ何の事だかさっぱりわからなかつた。浮き石があつたり岩が出つぱつていたりした大変いやな道ではあつたが、トラバースの心配も取り越し苦労で、cガリ一大滝の上に抜けられた。cガリ一大滝の上は、滝谷のガレ沢を思わせるいやなガレ場であった。石が土煙をあげてガラガラと落ちて行き、後続バーティーのおっさんのがなり声が聞こえて来る。

第四尾根のルートに出てから、しばらく登つていると、問題の第二コル上の垂直らしきものが現れた。垂直といつても二三歩で越えられるちゃちなもので、心配していたようなハングでもない。しかし困った事に完全なのつべきょうの岩で、手をかける場所も足をかける場所もまるで見あたらない。ハーケンが二三本打ちこんである。僕は最初からあきらめて一本めのシユリングにしがみついた。一本めもつかんでこれで垂直は越えられるが、面倒臭くなつてそのままの三本めもつかんでしまう。一度ズルしだすとキリがない。そこからマツチ箱まで続くリッジに出たところで鳥肌が立つた。ひどい高度感だ。景色が良くても後ろと下はけつして見ず前に前と上だけ見て登る。マツチ箱に達すると、すぐ先に牧野さん、中島さん、内海君のバーティーと正野さん、加藤さんのバーティーがいた。中央稜に掛川

富士山が良く見え、大樟沢から鳳凰三山にかけて凄まじい絶景が広がっていた。マツチ箱から十メートルばかり懸垂下降するのだが、テラスが真下には無く、少し左側にずれながら斜めに降りなければならなかった。こんな変な懸垂下降はゲレンデでもやつた事が無い。右にふられそうで少々肝を冷やしたが、無事テラスに降りられた。マツチ箱のコルから二ピッチばかり登つたところで無事終了点に達した。

今回の山行は珍しく? 良い思い出になりそうである理由はいくつもある。一つは天気が良かったこと、また北岳バットレスは壁全体が東側に向いているので、朝日があたって雰囲気が明るかったこと。滝谷(クラック尾根)に比べて浮き石が少なく、岩がしつかりして(いた様な気がする)いたこと。岩が乾いていて、EBシユーズのフリクションが信用できる様な気がしてきたことなどである。もうすぐ雪山シーズンなので、気持ちを新たにして頑張ろうと思う。



## 北岳バットレス

### 【第四尾根～中央稜】

日付 九十三年九月二十五日～二十六日

山名 北岳

参加者 掛川統之、中山法行

筆者 掛川統之

九月二十五日(土)

大カンバ沢の二股で他のバーティと別れ、我々二人は取り付き点のDガリー大滝に向かう。年(?)とトレーニング不足で大滝下部に到着するまでに、足がつり四苦八苦する。中山(鬼チーフ?)はそんなことは無視し先に取り付いた。

俺が、足のつりを直し登攀準備を行っている最中に下から十字クラックを上る正野と加藤のバーティーが上がってきた、登攀準備が完了し中山がトップで上り始める、登攀開始二時頃、五尾根を回り込み二ビッチで四尾根のトラバースバンドに到着、Cガリー側にトラバースし、ブッシュと灌木混じりの壁をフリーで二〇メートルほど上り四尾根の取り付け点に到着、二時半頃。先行バーティーがありしばらく待つ。

中山がトップで登攀開始(三時頃)。

一ビッチ、クラック(旧<sup>フ</sup>級)を登りフェースのバンドにてビレーする。

二ビッチ、フェースを登りバンドをトラバースし、白いフェースの下部テラスでビレー、先行バーティーが遅いため先に行かしてもらう、(三バーティほど抜く)。

三ビッチ、ホールド、スタンスが豊富な白いフェースを快適に登る、四〇メートルいっぱいテラスに着く、ここまでも中山のベースが早く年寄りはついていくのに必死(?)

である。

四ビッチ、ピラミッド状のフェース(三メートル)と高度感十分なリッジを登り、マッチの頭に到着。ここより一〇メートルほどDガリー側のテラスに懸垂をする。先行バーティーがもたついているので、頭の少し下より先に懸垂を行う。

五ビッチ、テラスより細かいフェースとクラックを登り、Dガリー側の凹角に回り込み灌木にてビレー。

六ビッチ、灌木混じりの凹角を三〇メートル登り、一人程度は入れるテラスにてビレーをする、正面には中央稜の瓦状ハンギングが目の前に見える。中央稜の取り付けにはここから懸垂を一ビッチ半Cガリー側に行いとりつく、明日の中央稜登攀を楽しみに最後のビッチへと足を進める。

七ビッチ、テラスより傾斜の落ちた草付き混じりのフェースを三〇メートルほど登り終了点着。(四時半頃)

終了点で正野、加藤のバーティーをしばらく待つが登つてこないため、明日のことを考え早々にツエルトを張りビバーク態勢にはいる。

今日は鬼(?)チーフのベースが早く体がバラバラになってしまった!

九月二十六日(日)

昨夜は、霜柱の成長する音と疲れでやや寝不足ぎみだ! 六時起床、正面には富士山がくつきと見え今日も良い天気だ!

簡単な朝食を済ませ一ビッチ懸垂し下降点のテラス着。テラスより一段降りて一人が立てるかぶり気味のテラスにて懸垂の準備をする。二〇メートル懸垂をしガレ場に付くが、懸垂は殆ど空懸となる。さらに一〇メートル懸垂しCガリーに降り立つ、Cガリーを二〇メートル程つめて中央稜の取り付けに付く。(八時頃)

一ビッチ、昨日の疲れと荷の重さで動きが鈍い。「いくよー!」の声と共に中山が取り付く、三メートルほどフェースを登り、かぶり気味のバンドに立つが、やや荷の

重さがありバランスクライムとなる。中央稜のルートでは事実上の核心部となる(旧<sup>フ</sup>級)鬼の(?)チーフも荷の重さからかバンドに立つのに苦労をしている。バンドを三

メートル程トラバースし二人用テラスでビレー。

二ビッチ、テラスよりホールドの豊富な安定したリンネを行なう。

三ビッチ、瓦状ハンギングを目指して上昇バンドを一〇メートル程登ると安定したテラスに着きビレーする。高度感は十

分あり、正面には四尾根のマッチの頭が目の前に見える。

四ビッチ、頭上の瓦状ハンギングを目指して五メートルフェースを登りハンギングに取り付く。瓦状のハンギングはどの切れ目で

も上れるが一番大きい切れ目を抜けると楽である。昔はア

ブミを一段使い人工登攀であったが今では全てフリーとなっている。しかし我々は荷が重たいのでシユーリングに足

を入れてのっこして言ひ誤かな?)フェースを二メートルほど登りテラスに着きビレーする。

五ビッチ、ここから先は中央稜のルート中一番高度感の味わえるクライミングとなる。

中山が「いくよー!」と言う声を残してCガリー側に回り込みかぶり気味のカンテに取り付く、ホールド、スタンス

が豊富で快適なクライミングとなり、ザイルはどんどん延び、四〇メートルいっぱいとなつた頃中央バンドのテラスに着きビレーを取る。私は久しぶりの中央稜を楽しみながら快適(実は荷が重くゼーゼーした!)に登り中山の待つ

中央バンドに付く。ここで中央稜のクライミングを堪能するため、のんびりと休憩をする。今日は中央稜には我々以外ない。岩場をまるまる独占している。下を見ると四尾

外いない。岩場をまるまる独占している。下を見ると四尾

根とDガリー奥壁を登攀してきた相田、牧野バーティーが終了点で休憩をしておりこちらにコールを送つてくれた。

(有り難いことだ! 跳めが何しろいい!)

六ビッチ、後一ビッチほどで楽しく快適な登攀も終わりを告げようとしている。中山トップで最終ビッチのクライミングにザイルが四〇メートルいっぱいになつた頃、中山か

らビレ一解除のコールがあつた。いよいよ私も最終ビッチの登攀にかかる。傾斜もだいぶ落ち、ブッシュ混じりのフェースを快適に登り中山のビレー一点に付く。そのままザイルを一〇メートルほどのぼし終了点着。(十一時)

終了点からすぐ上に北岳のピークが見える。内海が上から顔を出しコールをくれる。最後の登りを十分程行くと北岳のピークに立ち登攀終了。中山と「お疲れサン！」と言葉を交わし握手をお互いの労をねぎらう。

今回の中央棟は私にとっては久しぶりであつたが、中山と一緒に登ろうと約束してからは数年掛かっている。バットレスの中央棟に行こうと、中山と計画をするが何回か挫折したのと、他のメンバーが加わりその都度ルートを変更をしたためなかなか実現しなかつたが、今回やっと計画が実現した。

久しぶりの連続登攀と荷を背負ってのクライミングは充実感があった反面体力的にはかなり「キツイ！」感があつた。

(も～年ダヨ！～)



## 北鎌尾根縦走

牧野、掛川、風間  
奥穂高岳往復バー(ティ)(C隊)  
中田、中村、関根、村田

日付 九十三年十二月二十八日～一月二日

山名 槍ヶ岳、北鎌尾根

参加者 中山、瀬藤、相田

筆者 瀬藤

(平成五年冬合宿 A隊)

今年の合宿は前年の奥穂高岳～前穂高岳縦走に引き続い

て北鎌尾根～槍ヶ岳～北穂高岳～奥穂高岳を縦走し北アルプスに一応の一区切りを付けようと計画されました。まあ、結果から言いますと残念ながら天候、その他の理由で北鎌尾根～槍ヶ岳～北穂高岳～奥穂高岳は割合しました。詳しく述べたい人は、本章をじっくり細かく詳細丹念しつかりお読み下さい。

北鎌尾根はその名通り槍ヶ岳山頂から北へ延び独標を従える岩尾根で、松波明・加藤文太郎らの遭難で広く知られている尾根です。また、北鎌尾根を辿ると他の尾根と合流せずに直接槍ヶ岳山頂に達する登り甲斐のある尾根で北岳バットレスに匹敵する景観のすばらしさと、登攀の快適さを兼ね備えた尾根です。

当会での過去の実績(会山行)は、昭和五十三年度の春合宿の北尾根縦走(メンバーチ田、関根、山下、瀬藤)と冬合宿の北尾根縦走(メンバーチ田、山下、瀬藤)および昭和六十年度の冬合宿の北尾根縦走(メンバーチ田、山下、瀬藤)とその他個人山行(牧野、藤田、中山他)が記録されている。

十二月二十九日

浦和で相田と落ち合い、集合場所の新宿駅へ向かう。今は少し振りに電車での出発である。新宿駅へ行くまでに大汗をかいてしまう。気温が例年に比べ少し高いのかな? もならず体力不足を痛感した次第です。新宿駅で中山と落ち合い夜行電車で大町へ向かう。

十二月二十九日

大町駅で腹ごしらえをし、七倉へタクシーで向かう。七倉の登山補導所で入山手続きをし、今年の入山状況を聞き、ちょっとお茶などご馳走になる。二十八日、二十九日に入山者が多く、今日は少ないらしい。

トレスが残つていれば・・・。入山記念に針の木岳のしおりをいただき。

七倉よりすぐにトンネルに入り、半天出合までの長い長い道程に出発する。高瀬川沿いの道は何度もきているがやはり長い。特に高瀬ダムの登りが・・・ああしんど。湯又温泉までは何も難く川沿いの林道をえつちらおつちら歩くだけ・・・ああしんど。

湯又温泉以降は近年の入山者が少ないので道が荒れている。ガケつぶちは道が崩れ、木道はバラバラに壊れており、途中の吊橋はワイヤーしか残つておらず、私の体はガタガタでやつとテント場に着く。

少し遅れて後続の他バー(ティ)が着いた。今回は、中山の好意で私物のゴアライトテントを供出して頂き快適な夜を過ごす予定が、寝る時になつて浦和に置いて来た車の中にセーターを忘れたことに気付く。皆の呆れた冷たい視線を感じつつ眠りにつく。日頃の行いが良いのか気温が高く汗をかいてしまう。

平成五年度冬合宿  
北鎌尾根縦走バー(ティ)(A隊)  
中山、相田、瀬藤  
槍ヶ岳往復バー(ティ)(B隊)

今日一日の天候は晴れたり曇ったりでした。

十二月三十日

今日から本格的な登山の開始だ。気持ちも軽やかに望みは高く、と出発するが道が悪い為か体はダルイ・・・体力不足だよ。千天出会いの吊橋もワイヤーしか残っておらず、

沢の流れを渡る場合を考えてしまう・・・今回は関係ないけど。

北鎌尾根取り付きで沢を上手く渡り、足を濡らさないですんだ。だれさんは靴を脱いで歩渡したらしいが・・・だれかな、行いの悪い人は。

沢を渡り、北鎌尾根P2に取り付く。P2までは急な登りで木の枝、根っこを掴みながら森林帯の視界の悪い尾根を登るとP2に一六二〇歩で着きますよ。もちろん、人によつては違いますよ多少は、確めたかつたら北鎌尾根へおいでませ。

P2からは森林帯も過ぎ、稜線歩きとなる。P3～P4～P5～P6と右や左や直登やらと進んでいくと遙か彼方に槍ヶ岳、目前に独標が見えてきて今日の泊り場が近いことが目で感じられます。北鎌沢のコルが最高のテント場で、ショウ・・・整地、ブロックは用意されているんですから。もちろん再度しつかり手入れはしましよう。北鎌のコルまで五六〇〇歩。

今日一日の天候は晴れでした。ラッキーなんてね。明日以降体力が続くかな~?

十二月三十一日

今日は朝から吹雪ですよ。動きたくないよ。寝てたいよ。でも、隣のバー・ティは出発したみたい。懐電つけで。しゃーない出発するかしようがない。

で~へ~へ~!ないよ。ないよ。ないですよ。皆で仲先行バー・ティのトレイスがなんにもないですよ。皆で仲良くラッセルだ(各自体力にあわせてね)。

きついおけ尾根をたどると独標基部につきます。真っ直

ぐ登ると岩登り、右へ行くと巻き道。状況判断を誤ると、んでもないことになりますよ。私は、雪崩を誘発し、ついでに流されてしまいました。

なんとか止まりましたけどケガもせずに。

教訓その一 状況判断はしっかりと。

(雪崩ができるかも?と思いつながらも、

巻き道を進みました)

(私はこれで運良く助かりました)

そんなん吹雪の中をルートを捜し登っていると当然時間がかかり、今日の予定の泊り場の北鎌平に着けず、急に雪面を整地し泊りとなりました。でも、これから楽しい夕食作りのはずが・・・コンロの調子が悪い、差込み口からガソリンが漏れる、低い燃焼なら何とかなりそう(一瞬、松波明が脳裏を横切る)。だけど、疲れているとコンロが着いていても寝てしまうものですね。三人供一時間程寝てしましました。

今日一日の天候は吹雪でした。今日はとつても疲れた。最後まで体力が続くかな?。雪崩で流されている時は怖くなかった。止まった時も怖くなかった。怖かったのは、自分のかつていた所にまだ流れていない雪を見た時、それを指摘された時、一番怖かったのは安全地帯に着いた時でした。

一名体力不足(きっとほかのメンバーも体力をか

なり消耗しているはず・・・?)。

コンロの調子が悪い。

中山のメガネが無く良く見えない(かなり見えない)。

などではば決まりかけていたところ、ここでようやく牧野

バー・ティーとトランシーバー交信が取れて今、槍平小屋に

居る事が判り、下山(それも最短ルートで槍平小屋へ)と決まる。でも、なぜ、どうして、牧野バー・ティーは槍平小

屋に居るの??詳しく述べ牧野バー・ティーの報告書を読んでくださいな。(追伸、大噴尾根でツェルトのボール袋を回収してほしいとの事???)

槍ヶ岳肩の小屋から大噴岳をへて槍平小屋へ向かう。あいかわらず風が強いで余り休まずに下った。

気分的にも楽になり景色なんぞを眺めながら悠々と下った。直ぐに前日のような雪崩の出そうな斜面にでくわしました。足が出ない、進まない、怖いよ。中山に頼んでザイルを着けさせて頂きました。そうそう、前日中山はメガネを流され視界が悪いそうです。すいませんね、私が雪崩をご馳走になり、お互いの山行状況、様子など夜の更けるのも忘れ団欒を楽しみ、眠りに付く。

今日一日の天候は晴れ(風強し)でした。やつと家に帰れそう。

一月一日

今日は、雪は降っていない。風は強いけれど、歩きだして直ぐに前日のような雪崩の出そうな斜面にでくわしました。足が出ない、進まない、怖いよ。中山に頼んでザイルを着けさせて頂きました。そうそう、前日中山はメガネを流され視界が悪いそうです。すいませんね、私が雪崩をご馳走になり、お互いの山行状況、様子など夜の更けるのも忘れ団欒を楽しみ、眠りに付く。

この夜は、牧野バー・ティーが場所の確保をしていた槍平

小屋へ入込み、牧野バー・ティーの素晴らしい夕飯を

ご馳走になり、お互いの山行状況、様子など夜の更けるのも忘れ団欒を楽しみ、眠りに付く。

今日一日の天候は晴れ(風強し)でした。やつと家に帰れ

しているのかザイルを使っている。行ってみるとそれ程度でもないけどザイルを使い二ピッチで山顶に達する。山顶での景観はとても素晴らしい草々に山顶を後にし槍ヶ岳肩の小屋へ向かう。

下りはこれまでと違い登山者が多く混雑している。他の登山者がザイルを使い下降している為非常に時間が掛かる。

まして、中山はメガネがないので困っており、「見えない、怖い、見えない、怖い」といいながら下降していた。槍ヶ

岳肩の小屋は風も無く居心地がいいので一休みとし写真を撮り(後日になるがこの写真は写っていない事が判明)

今後の予定を相談する。

一名体力不足(きっとほかのメンバーも体力をか

なり消耗しているはず・・・?)。

コンロの調子が悪い。

中山のメガネが無く良く見えない(かなり見えない)。

などではば決まりかけていたところ、ここでようやく牧野

バー・ティーとトランシーバー交信が取れて今、槍平小屋に

居る事が判り、下山(それも最短ルートで槍平小屋へ)と決まる。でも、なぜ、どうして、牧野バー・ティーは槍平小

屋に居るの??詳しく述べ牧野バー・ティーの報告書を読んでくださいな。(追伸、大噴尾根でツェルトのボール袋を回収してほしいとの事???)

槍ヶ岳肩の小屋から大噴岳をへて槍平小屋へ向かう。あいかわらず風が強いで余り休まずに下った。

気分的にも楽になり景色なんぞを眺めながら悠々と下った。

為か槍平小屋へ夕方着く。小屋手前で出迎えの牧野と会い温かい紅茶の差し入れをご馳走になる。

この夜は、牧野バー・ティーが場所の確保をしていた槍平

小屋へ入込み、牧野バー・ティーの素晴らしい夕飯を

ご馳走になり、お互いの山行状況、様子など夜の更けるのも忘れ団欒を楽しみ、眠りに付く。

一月二日

新穂高温泉に向かい下山する。少し雪が降っているが気にならない。穂高牧場にてピールと牛乳で下山祝いをする。

新穂高温泉には掛川の愛車であり、浦和渓谷山岳会のため入り（無料の温泉は時間が遅く入れず）帰宅の途につく。

皆さんお疲れ様でした。

今回の山行は計画通り行かず、途中で断念しましたが私個人（瀬藤は）としては大変充実し楽しい山行でした。ただ、以前行つたことが在る為、偵察をしておらず十数年前の記憶の為ルートが判らず苦労しました（体力面ではもつと苦労しましたが）。

これを読んでいる貴方、準備には力を惜しまず取り組み方全の体制で山行に挑んで下さい。

九十三年度冬合宿より  
新穂高より涸沢岳西尾根至由

## 奥穂高頂上

（平成五年冬合宿 C隊）

日付 九十三年十二月三十日～一月二日

山名 奥穂高岳

参加者 関根、中村、中田、村田

筆者 関根和雄

十二月三十日

夜九時 北浦和集合 中田さんの車で九時二十分出発 信州回りの方が「混雑がないだろう」とのことと、一路中央高速道を松本へ。昨年のようなことの起きないよう気をつけながら、大町・糸汁川・富山・新穂高へと車を走らせた。新穂高到着は朝の八時、村の駐車場も昨年並でガラガラに空いていた。そう言えば昨年の冬合宿もやはりこの地で、私は西穂高受入隊であり一年ぶりであった。昨年は雪

が多くスキーヤーが随分いたように思えたが、今年はさほどでもないようだ。

十二月三十一日

到着早々に身支度を調べ腹ごしらえを済ませ、すぐに出发するはずであったが、結局ぐずぐずして十時の出発になってしまった。新穂高からは右俣林道を穂高平避難小屋へと向かった。

小屋は正月中旬の入山を期待してか営業していた。いささかここまで来ると辺り一面白一色で冬合宿らしくなってきた。ただ、出発早々から自分の中にドライダラ病があからさまに出ていた。

十一時出発、白出小屋には十二時到着、ここからの尾根道は槍ヶ岳への冬最短ルートでもあり、たくさんの登山者が入山し、至る所に集団で一服する光景が見られ、踏跡もしっかりと付けられている。また、白出沢の沢通しのルートに何人かのパーティが入っていたが、「やはりここにも命知らずがいるのだな」と感じた。

我々は白出沢を横切った先で右俣林道と別れ、涸沢西尾根の登り口より樹林帯に入る。「十分も登ったころより急登の連続、荷物の重い我々にはベースが半分に落ち予定の半分も進まなかつた。当初、幕営地はプラト一直下の樹林限界地まで稼ぐ予定であったが、高度二〇〇〇メートル地点あたりのところにテント場を見つけ、明日に期待して幕営した。今日は一日まあまあの天候で夜から風も出て、明日も続く様子だ。明日のためには重い食料から片付けることにし、野菜やラカレーやらと豪華版で早めに済ませ、いつもの山行より早く夜九時消灯した。

一月一日

朝五時起床、夜の内に風で運ばれたのか、十センチメートル程度の雪がテントの周りを取り囲んでいた。しかし、天気快晴絶好の登山日和、ラーメン等で簡単に朝食を取りテントも撤収し六時出発。

昨日よりも急坂となる。なお森林限界直下に五、六張り幕営できる場所があり、東京の大学パーティが大人數で張っていた。

この登りが最もきつく稜線が上方に見えているのだが、思うように進まず苦労する。

朝八時、河本も標識旗の立つ稜線に出る。ここから左へ稜線つたに二十分も行くと蒲田富士（プラトー）に到着。こも先人パーティが幕営を利用したのかブロックを作られたテント場となっていた。また、滝谷の各沢登はんルートが手に取るように見え最高の気分である。苦労して登った甲斐があったというもんだ。

九時二十分、プラトー出発、ビックケル、アイゼンをきかせ順調に高度を稼ぐ。途中、クサリ場が二ヵ所、ファイツクスザイルの張つてある所が一ヵ所あり。これらの難所は稜線全体が滝谷側に深く切れ落ち、雪底も滝谷側に発生している。

間もなく西尾根最大の難所で最後の涸沢岳への登りと統一。コル到着は昼一時。冬期小屋も使えたが、登はん者が怪我をして収容されておりヘリコプターを呼んでいるとのことで、私は外にテントを張ることに決めた。

張り終えた後、奥穂高岳山頂を目指すことにした。奥穂高岳の登りは小屋先のはしご階段から始まる。雪稜づたいを風に飛ばされないように細心の注意を払い一步一歩確実に登る。一時間程度で山頂に着く。山頂では苦労して登った仲間との感激を喜びあつた。すぐ隣のジャンダルムでは、今日二台目のヘリが登はん者の遭難救助に命がけの作業をしていたのが深く印象に残った。下界に下る最後の最後まで気を緩めることなく、安全登山をみんなで誓い小屋に戻った。

一月二日

翌日 下山途中、一昨日泊まったテント場へ中村さんがワカンを一時保管したらしく、どの辺か忘れてしまい登り帰すトラブルがあつたりはしたが 午後三時無事新穂高に到着。温泉に入り祝宴を上げ帰路についた。

九十四年度夏合宿より

## 源治郎尾根と八ツ峰の縦走

日付 九十四年八月十三日～十六日

山名 鉈岳

参加者 中山、正野、畠田、加藤、高橋

筆者 加藤

今年の夏合宿は八月十三～十六日に鉈岳の源治郎尾根と八ツ峰の縦走をやることになった。参加者は(敬称略)中山(三十五)、正野(三十五)、畠田(二十七)、加藤(三十五)、高橋(二十三)の五人。高橋君は前々日の十一日に入会したばかりで、めぼしい低山歩きすらやつたことがないのにいきなり鉈岳へ行く、あきれた若者です。

八月十三日

十二日夜十二時前 新宿で急行列車に乗り、朝五時過ぎに信濃大町駅に着いた。タクシーで扇沢まで行つたが、お盆なので扇沢のトロリーバス発着所は大混雑していてなかなかバスに乗れず、黒部ダムに着いたのは八時頃だった。真砂沢小屋のテント場をめざして黒部ダム～内蔵助平～ハシゴ谷乗越～真砂沢小屋のコースを歩く。風間さんが「脱落者が続出する地獄のロード」と言っていたこのコースは(山岳会に入る前)一昨年の十月にも歩いたが、このときは雨天で、ハシゴ谷乗越に着いたときに突然見えた八ツ峰の末端部のピーク(一峰か?)がガスの中にボーッと浮かびあがっている姿は不気味だった。

今年の夏は記録的な猛暑で雨が少なく、今回の山行は天気に恵まれそうだ。それは良いことだが、快晴ですごい暑

さだ。黒部ダムから内蔵助谷の沢の出合までは、黒部川本流に沿つて、その切り立つた川岸の岩壁や丸山東壁などを眺めながらの比較的快適な歩きだった。沢の出合付近から内蔵助平に向けて樹林帯に入った。細い木の枝が垂れ下がって密集していく、やつかいなヤブ漕ぎとなつた。傾斜も急で、しかも猛暑と重いザックだ。それ違う下山者はうんざりといった顔をしている。なんとか内蔵助平に着き、沢に橋がかかっている所で大休止。清流を飲み顔を洗うと極楽だ。内蔵助平の後半は沢が渓れたゴーロ帶だ。これはわかっていた。何年経つてもゴーロはゴーロなのだ。歩きにくくてうんざりする。有り難いことに、三十分歩くと十分休憩をとってくれる。石の上に座つて顔を横に向けて唾を吐いたが、右肩に着地した。(おおつ)睡を吐き飛ばす気力もない。休んでいる間に我々を追い越して行つて林の陰に見えなくなつたパーティは、我々が歩き始めて四〇メートル程も行くと、たいていそこで死にそうな顔をして休んでいる。

ハシゴ谷乗越の手前で「あゆむ山の会」の四人を追い越した。実は、来るときに池袋駅のホームで「あゆむ」の水谷さんらと出くわして驚き、我々と全く同じスケジュールであると聞いて二度驚いたのだ。

ハシゴ谷乗越をロープにしがみついて急下降し、鉈沢の雪渓を横切つて真砂沢小屋に到着したのは五時。へとへとになつたが、ピールと夕飯(カレー)がうまかった。八時就寝。

八月十四日

三時起床。星がきれいで今日も好天になりそうだ。(以後、天候のことは省略。連日快晴)お茶漬を食べて、源治郎尾根に向かつて五時出発。鉈沢の雪渓を歩き、これを左に分けて平蔵谷の雪渓に入り、間もなく源治郎尾根(峰)の取付きに着いたのは七時頃。直後、そこに人が雲霞の如く集まつて來た。おそらく鉈沢上部の別山平のテント場から來たのだ。我々の後ろに三十人ぐらいの行列ができたが、

直前に七人程の一パーティが居る。これが運が悪かった。そのパーティの中に慎重を要する人がいるらしく、極く簡単な場所でも固定ロープを張るので、遅々として進まない。追い越すのは危険なので待つしかない。

また、峰の下半部ルートは、ハイマツではないけれども松の小ぶりなのが生い茂つてゐる所が多く、その枝の下を枝に引っ掛かるなどして極めてやっかいだ。私は、これは一般の縦走コースの方がましんだな。と、かわいげのないセリフを吐いた。

そんな場所からやつとイワバチツクな所に抜け出した時は、ギラギラした太陽が高く昇つていて暑い。その後は容易な岩登りとなつた。途中で狭い窓状になつた場所があり、人が登るのを待つてゐる間、「ここに百年居たい」と思った。結局一度もロープを使わず、最後は歩いて昇り、峰の頭に着いた。

源治郎尾根は、峰と峰を持つている。前方に、峰がある。峰の頭から、峰へ、峰間のコルには三五メートルの懸垂で降りる。十人程降りるのを待つてから、へたくそな懸垂下降をした。峰の頭への登りも簡単でロープはいらぬ。そこから鉈の頂上までは大部分歩いた。正午頃、頂上に着いた。「一九九八メートル」眼下に富山市と日本海がよく見える。頂上には五十人程いて混雑している。畠田さん

が初めての試みとして携帯電話で浦和に電話した通じた。正野さんは広島に電話し、これも通じた。剣岳の頂上から、史上初かもしない。

まもなく、「あゆむ」の水谷さんら二人が「心臓がバカバカしている」といいながら大汗をかいて登ってきた。八ツ峰をやつてきたという。

下山は、池ノ谷乗越方面への岩の脆い稜線を経由して、長次郎谷を下降した。長次郎谷の上部は傾斜が急で、高橋君は雪渓の歩きが初めてなので、ロープを使った。稜線からの落石に備えてヘルメットもかぶつたままにした。途中で八ツ峰、峰フェースに取り付いているクライマーを今度は間近に見たが、源治郎尾根の上から見たときよりも迫力は薄い。

登姿というのは、ある程度離れた位置から眺めると最も迫力を感じるものらしい。四時頃テント場に帰着。肉丼ぶりを食つて、八時就寝。

八月十五日

三時起床。五時出発。今日は八ツ峰上半（ト峰～ナ峰）をやる。長次郎谷を歩き、熊の岩の手前右側にある草原状の傾斜をジクザクに約五〇メートル登つて、のコルに向かう。中山さんが「この辺にはウンチが落ちていることがあるから、気をつけろ」と言う。ここでウンチに触つたりしたら、戦意喪失して帰ります。

のコルに七時頃着き、ここが取付きた。目の前にあるのは容易に登れそうな岩場だが、用心して固定ロープを使う。正野さんがリードして相田さんがビレイをして取り付けてくれた。以後、全ルートの三分の一ぐらいで固定ロープを使つた。懸垂下降が三回ぐらい。中山リーダーが中心になつてルートファインディングをした。巻いたり直登したり容易な岩登りだったが、ルンゼの通過が多く、落石が頻繁に起きた。

八ツ峰は源治郎尾根よりも複雑だ。ト峰だけでも頭が五つある。しかも、毎度のことだが、先輩に金魚のフンみた

いに付いて行くだけなので、今現在どこにいるのかというのがよくわからない。峰（Dフェース）の頭は、そこから後立山連峰が最初にきれいに見えていた。あそこかもしれない。我々がその頭に到着すると同時に、女の子クライマーが崖からひょっこりと姿を現し、直ぐさまビレイをやり始めた。白馬岳が間近に見え、池の平小屋と仙人池ヒュッテもよく見えた。すぐ後方には、峰が立ち上がり、峰の頭から、のコルに切れ落ちている壁がすごい。五〇メートルぐらいある。つまり懸垂下降するのに四五メートルロープを二本使つても下に届かない。いったいどうやつて降りるのだろう。

その後、峰の頭も通過したはずだ。右前方にクレオバトラニードルとその後方にチンネを望んだ、あそこでと思う。クレオバトラニードルは文字どおり針峰だ。あの頂上に立つたら、さぞかしかつこいいだろう。チンネの左稜線（こちら側から見ると右側にある）に二人、パーティが取り付いていて、じわりじわりと登つっている。スカイライン上にいて、すごい迫力だ。左稜線ルートは取り付きから頂上まで二〇〇メートルぐらいありそうだ。下から次々と登つて来る三十分程後にはチンネの頂上に十人程立つている。

向こう側にあるはずの正面壁を登つた人達も加わったのだろ。左稜線に取り付いているクライマーが近くに見えるようになると、迫力はやや薄れた。オレでもできそうだ。  
最後、峰の頭は省略した。時間がかかりそう、あるいは落石が起きそろいう理由だとと思うが、とにかく中山リーダーの判断に従つた。それで、峰の頭の手前のビックから池ノ谷乗越へ、岩がボロボロなので落石を起こさないように慎重に懸垂下降して、一時頃、めでたく八ツ峰は終了。

前日と同じく長次郎谷の雪渓を下降し、三時頃テント場に帰着。テントの横で、刺すような日差しを浴びながら酒盛りをした。スパゲティーと赤飯を食べて、八時就寝。

三時起床。涼しいうちにハシゴ谷乗越を通過するべく、テントを撤収して五時出発。意外と快調にハシゴ谷乗越に着いた。あとは黒部ダムまではほとんど下りだけ。満足感に浸りながら歩いた。最後に黒部川に架かる橋の手前の大高巻きと、橋を渡つてからのジグザグの登りを頑張つて、一時頃黒部ダムに到着。皆で握手。この下山途中では他の登山者とはとんと会わなかつたが、ダムからのトロリーバスの中でも、でかいザックを背負つてるのは我々だけだった。他の乗客の様子から、我々の身体から悪臭が放たれているのがわかつた。子供が「お母さん、このバス酸っぱいよ」と言つていた。

大町市内の公衆浴場「薬師の湯」で身体を洗つた。次いで、「福来屋」という食堂で昼食。ここはお薦めです。信濃大町駅前の大通りを右へ三分程歩くと「一日の出通り」といふのが交差している。ここにあります「普通の定食屋」のようだつたが、うな重、焼き肉定食、カツ定などを食べた。安くて量が多い。店内の雰囲気が落ち込んでいる。「今度から

大町ではここを使おう」ということで、全員一致した。

三時半頃、特急列車に乗り、帰る



九十四年度冬合宿より

## 冬のキレット越え

槍ヶ岳奥穂高岳縦走

日付 九十四年十二月三十日～一月三日

山名 槍ヶ岳奥穂高岳縦走

参加者 中山法行・掛川統之・相田益功  
筆者 横田益功

十二月三十日

新穂高より槍平に入る。快晴無風でまったく冬山の気がしない。初日がこんなに楽でいいのか？

十二月三十一日

槍ヶ岳山荘へ向けて大喰岳西稜経由で曇り空のもと歩き出す。縦走バー（テイ）三人プラス槍ヶ岳登頂バー（テイ）五人が一列で進むが、急登となる頃には一手に別れて飛騨乗越で強風に遭い、ガスのなか中岳小屋にたどり着く。

一月一日

大キレットへ向けてスタートする。吹雪のなかデボ品が増えて重くなつたザックを背負つてアイゼンをきかせて歩く。飛騨乗越は風が強いが昨日ほどではない。中岳で間違つて直進してしまつが、すぐに間違いに気付き登りかえして左折した。コルから南岳に向かう大ダルミで風が強く耐風姿勢の連続となる。一時間経つてもいくらも進まないので、中岳直下のコルでテントを張る。風で何度も飛ばされそうになる。いつも使つているテントを張るのに二時間がかかつた。テントに入つてからも風におおられて押さえるのに必死だった。「山男の歌」の意味がよくわかつた。

一月二日

昨晩はトランシーバー交信もできず、大喰西稜経由で下山と決めていたが、朝になつて風が收まり、青空がのぞいている。支度をしてテントを撤収しながら「どうしようか」と

みなでいろいろ考えたが、「天気も何とか一日もちそうだしそれで北穂まで行こう。あそこにはなにしろデボ品がある。絶対に到達しよう」昨日一時間かかったところを

わずか十分で通り過ぎ、南岳に着く。快晴微風のなかハシゴを降りて、いよいよキレットの通過となる。僕らの通過中に風が吹かないよう祈るのみだ。両側が切れ落ちて低い位置にクサリがある。その一歩がとても悪い。慎重に

トランシーバーをしてやつと北穂への登りとなる。クサリを掘り出し一步づつ慎重に登る。天気もいいし、時間も十分にある。快適そのものだ。いつのまにか雪面の急登となる。ハケツはあるにはあるが、トランシーバーが悪い。息を切らせて一気に登り小屋の裏が見えた。あと十メートルここからが長かった。ああ疲れた。やつとこさつと北穂の小屋にたどり着く。デボ品もあった。よかったよかった。

一月三日

昨日の晴天がまだ残っていて北穂を気分よく出発した。松波岩をどう巻くのかわからずいぶん迷つた。涸沢側からよじ登つて越えたが、滝谷沢側からのルートのほうがやさしいようだ。南峰からの下りが悪い。緊張する。クサリを使ってどうにか降りきる。涸沢岳への登りもよくない。クサリの連続だ。雪面をぬけたらどうやらこれが最後の登りだ。ルンゼをつめて涸沢岳に出た。猛烈な風が顔を吹き付ける。天気が崩れてきそうなので、奥穂はやめてブランチ一に向けて降りる。風に飛ばされないようにルートを慎重にたどる。少し下つて樹林に入つてやつと一息つけた。あとは西稜の急な下りだ。もう足腰がガクガクだ。



九十五年個人山行より

## 勘七ノ沢の遡行

日付 九十五年五月二十一日

山名 丹沢 四十八瀬川

参加者 相田、加藤  
筆者 加藤

二俣から小草平へ行く尾根道に入り、小草平ノ沢にぶつかった後、この沢の岸を下降して勘七に入つた。しかし二俣の出合から入るのが正しかつたようだ。

遡行を始めぐに前方にいる二人バーティーが最初の五メートル滝を登るのにザイルを使つてゐるのを見たので、「おいおい、

ザイルを使つてゐるぜ」という話になり、急遽ハーネス・シューリングを腰につけた。しかし必要なかった。この五メートル滝の直後、何かの動物の死骸が流れの中の岩にひつかかって浮かんでいて驚いた。その後はまことに快適。「初心者を沢登りのとりこにすること請け合いである」というガイドブックの説明通りの沢だつた。すべてノーザイルで越えることのできた約十本の滝は水量が多く、なかなかのスケールの大きさを感じた。核心部の十五メートル大滝だけは、こわかつたので高巻きをした。

前のバーティーのセカンドは身に付けている物がすべて新品で、ヘルメット、ザック、ハーネス、シューズ、すべてカビツカビツ。すぐ追い越したが、彼らはザイルをたびたび使つていてもかかわらずなかなか速く、十五メートル大滝の上で休憩をとつていて追いつかれた。その後は彼らもザイルをほとんど使わなかつたので、我々の後ろにびつたりついてきた。追いかけられて逃げていてよう

な氣分だった。最後、大倉尾根に抜けるガレ沢のつめで、ルート選択をミスして、あつさり追い抜かれた。くもり、昼過ぎから時々雨、の予報だったので不安だったが、どうにか降られずに済んだ。よかつた、よかつた。渓流タビでやつたが冷たい水のために足が痛かつたので、帰りに新大久保の石井スポーツで渓流シユーズを買った。

九十五年度個人山行より

## 小同心ルンゼ～小同心左右峰

### 正面クラックルートの登攀

日付 九十五年六月二十五日

山名 八ヶ岳 横岳

参加者 桐田、加藤

筆者 加藤

六月二十四日(土)

この日は赤岳山荘において瀬藤さんの結婚を祝う宴会(渓谷+バビヨン)。木曜の山話会において、週末の天気が悪そうだという理由で土曜・午前～午後の沢登り(笛吹川又沢)は中止となつた。しかし金曜の夜になつて週末の天気予報が好転した。そのため桐田さんにお願いして日曜に岩登りの本チャンをやらせてもらうことにした。

六月二十五日(日)

朝、目がさめるとほぼ快晴。6時50分、赤岳山荘を出発。赤岳鉱泉に8時15分着。鉱泉8時45分発。まず小同心沢に入る雪崩で木がなぎ倒されて荒れている渓谷のゴーロ帶。歩きにくいし、二日酔いで頭痛もして、楽しくない。沢の上部とそれに続く小同心ルンゼの下部は急傾斜の雪渓。ピッケルが無いので、滑落したときに停止するようと言つて、桐田さんがハーケンを一本オレに渡す。桐田さんの履物はジョギングシューズなので、棒切れで雪を削つてステップをつくる。後半は登山靴を履いている自分がキックステップを切りながら恐る恐る登つた。雪渓がなくなつて最初に現れたのが細かい階段状の岩溝。段は斜めで水が少し流れているので滑りそうだ。岩が脆いのでハーケンを打てない。桐田さんがノーザイルで登つて行った。何を難渋しているのか不思議に思つたが、かなりの時間が経つてからやっとザイルが下りてきた。階段の上はホールドの無いざらざらした赤い岩の斜面。その両側は草着きゲズゲズの泥壁。この泥壁のテラスで桐田さんが

肩がらみで立つて確保している。支点は無い。このような形ばかりの確保は初めてだ。次に同じテラスで自分が肩がらみ確保をやって、桐田さんが登つて行く。足元の土が崩れる。桐田さんが落ちたら止められないだろう。一連托生。

九十五年度夏合宿より

## 剣岳・チンネの登攀

日付 九十五年八月十二日～十六日

山名 剑岳

参加者 中山、掛川、桐田、加藤

筆者 加藤

小同心の岩肌はコンクリートに多数のホールドを埋め込んだよう。幅の広い溝はクラックルートといつよりもルンゼのルート。ホールドはしつかりしていて、しかもガバガバしていて安心した。チヨックストーンもある。ツルベで登つて一ピッチめ約40メートル、「ピッチめ約20メートル、三ピッチめ約15メートル」。それだけであつけなく終わつた。二時。気持ち良かつた。桐田さんに「登り方がだいぶ安定してきた」と言われ、うれしかった。残りの岩稜を、肩がらみの確保を交えて慎重に歩き、あるいは攀じ登り、

雪崩。赤岳鉱泉に8時15分着。鉱泉8時45分発。まず小同心沢に入る雪崩で木がなぎ倒されて荒れている渓谷のゴーロ帶。歩きにくいし、二日酔いで頭痛もして、楽しくない。沢の上部とそれに続く小同心ルンゼの下部は急傾斜の雪渓。ピッケルが無いので、滑落したときに停止するようと言つて、桐田さんがハーケンを一本オレに渡す。桐田さんの履物はジョギングシューズなので、棒切れで雪を削つてステップをつくる。後半は登山靴を履いている自分がキックステップを切りながら恐る恐る登つた。雪渓がなくなつて最初に現れたのが細かい階段状の岩溝。

段は斜めで水が少し流れているので滑りそうだ。岩が脆いのでハーケンを打てない。桐田さんがノーザイルで登つて行った。何を難渋しているのか不思議に思つたが、かなりの時間が経つてからやっとザイルが下りてきた。階段の上はホールドの無いざらざらした赤い岩の斜面。その両側は草着きゲズゲズの泥壁。この泥壁のテラスで桐田さんが

肩がらみで立つて確保している。支点は無い。このような形ばかりの確保は初めてだ。次に同じテラスで自分が肩がらみ確保をやって、桐田さんが登つて行く。足元の土が崩れる。桐田さんが落ちたら止められないだろう。一連托生。

上部では大きめの岩が重なつていてホールドを取りやすいが、やはり脆い。危険を冒してなんとか小同心・右岩峰の基部に着いたときにはすでに正午を回っていた。帰りのバス時間が気になる。左岩峰ヘトラバースしてラックルートの取り付き十二時五十分着。

小同心の岩肌はコンクリートに多数のホールドを埋め込んだよう。幅の広い溝はクラックルートといつよりもルンゼのルート。ホールドはしつかりしていて、しかもガバガバしていて安心した。チヨックストーンもある。ツルベで登つて一ピッチめ約40メートル、「ピッチめ約20メートル、三ピッチめ約15メートル」。それだけであつけなく終わつた。二時。気持ち良かつた。桐田さんに「登り方がだいぶ安定してきた」と言われ、うれしかった。残りの岩稜を、肩がらみの確保を交えて慎重に歩き、あるいは攀じ登り、

雪崩。赤岳鉱泉に8時15分着。鉱泉8時45分発。まず小同心沢に入る雪崩で木がなぎ倒されて荒れている渓谷のゴーロ帶。歩きにくいし、二日酔いで頭痛もして、楽しくない。沢の上部とそれに続く小同心ルンゼの下部は急傾斜の雪渓。ピッケルが無いので、滑落したときに停止するようと言つて、桐田さんがハーケンを一本オレに渡す。桐田さんの履物はジョギングシューズなので、棒切れで雪を削つてステップをつくる。後半は登山靴を履いている自分がキックステップを切りながら恐る恐る登つた。雪渓がなくなつて最初に現れたのが細かい階段状の岩溝。

段は斜めで水が少し流れているので滑りそうだ。岩が脆いのでハーケンを打てない。桐田さんがノーザイルで登つて行った。何を難渋しているのか不思議に思つたが、かなりの時間が経つてからやっとザイルが下りてきた。階段の上はホールドの無いざらざらした赤い岩の斜面。その両側は草着きゲズゲズの泥壁。この泥壁のテラスで桐田さんが

肩がらみで立つて確保している。支点は無い。このような形ばかりの確保は初めてだ。次に同じテラスで自分が肩がらみ確保をやって、桐田さんが登つて行く。足元の土が崩れる。桐田さんが落ちたら止められないだろう。一連托生。

九十六年度会・個人山行より

## 八ヶ岳裏同心ルンゼ

日付 九十六年一月十三日

山名 八ヶ岳

参加者 牧野、風間、相田、内海

筆者 内海

久し振りの山行である。二年前に椎間板ヘルニアになり、その後山には行けなかった。学校の卒論も終り、体の調子も良くなってきたころ、山にいきたいと思い始めた。

一月十三日

前夜に浦和を出発、高速のサービスエリアで仮眠を取つた後、早朝に美濃戸についた。そこで身支度を整えて赤岳鉱泉に向けて出発した。二年振りの山行だったので、とにかく疲れた。バテてしまつたので、赤岳鉱泉まで二時間掛かった。そこでテントを張り、少し休憩した後、ショウゴ沢にいった私はアイス・クライミングは初めてなので、そこで教えてもらうことにした。人のを見ていると、結構簡単そうに見えるのだが、これがなかなか難しい。バナナ・ピックのバイルを初めて使つたが慣れるまで時間が掛かつた。アイゼンを氷に蹴り込むにしても旨く蹴り込むことができず、氷が割れるだけでまたく刺さらない。人がやっているようにいかないものである。少しずつ慣れてきた頃に、ショウゴ沢を少し上部まで行き、少しは楽しめるようになってきた。

一月十四日

この日は裏同心に行く日である。この日は牧野、相田、内海で行くことになった。出会から沢を詰めていくと、F1についた。先行バーイーがいたので、いなくなつた後、F1に取り付いた。ほとんど雪に埋まつていて、氷が露出している部分は、ほとんど無かつたが、急な雪壁のうえノーザイルだったので緊張した。その後もほとんど氷が雪に埋まつていたので、雪の沢を詰めているような感じだった。F5まできて一〇メートルくらいの氷壁が現れ

た。そこで初めてアンザイレンした。F5の中央にある凹角状の所を登つた。慣れない氷をしがみつくようにして登つた。F5を上つたところから右手に見えるルンゼを登り、終了した。

九十六年度春合宿より  
剣岳小窓尾根

日付 九十六年四月二十七日～三十日

山名 剑岳

参加者 相田益功、牧野要雄、掛川統之、中島正巳

筆者 牧野要雄

四月二七日

正月の素晴らしい好天下の登頂で味をしめ、年甲斐もなく剣岳に出かけてきた事を、歩き始めてすぐに重荷に後悔してしまった。外熊の谷渡りやカモシカの出迎え等で、気を紛らわせられたが、やはり重荷に喘ぎながらの小窓尾根入りは、私だけでは無い様である。(但し若いリーダーは除外)

正月の素晴らしい好天下の登頂で味をしめ、年甲斐もなく剣岳に出かけてきた事を、歩き始めてすぐに重荷に後悔してしまった。外熊の谷渡りやカモシカの出迎え等で、気を紛らわせられたが、やはり重荷に喘ぎながらの小窓尾根入りは、私だけでは無い様である。(但し若いリーダーは除外)

残雪が多い御陰で徒歩も無く、陽がさんさんと輝くピーク一六〇〇メートルに十二時半に着く。

先行したバーイーは昼食や、日光浴を楽しんでいるが、私は本日の予定通りに幕営にとりかかる。プロックを積む

我々を、「まだまだ先が遠いのに」とさげすむ様な視線を残して外のバーイーは過ぎていく。

上方に向かうバーイーの後ろ姿がいつまでも見えていた。今日はここで幕営して良かったと思つていてのは私だけではないだろう。

四月二十九日

小窓ノ頭でかわいいオコジョと朝のあいさつを交わす。

三ノ窓への下降は、一ピッチだけはアップザイレンで、後は古いフィックスロープに二〇メートルほどを補強して降り立つた。三ノ窓からは、今まで見られなかつた、白馬や鹿島などの後ろ立山連峰が残雪をまとい、大波の様に見え

ノ谷側を下降氣味にトラバースしているが悪いらしく、

ドームは三ピッチほどザイルを使用と有つたが、白秋側より取り付きノーザイルで登れた。ドーム上で、先行の二人バーイーに追い付いたが、このバーイーはここから下山して行った。

ナイフエッジの最後のピークを回り込む所が悪いらしく、

先行のバーイーが苦戦している。それを眺めながらナイフエッジ手前のピークでゆっくり昼食を取る。(下山後に分かった事だが、この狭い所で八年前の冬に中山バーイーが

二日間も停滯していたとの事)

はるか上方のマツチ箱直下の斜面をトップバーイーが行

くのを見て、我々も思い腰を上げる。見た目よりも楽にナイフエッジを越したが、白秋川に切り落ちた凹角は古く、フィックスロープも雪と氷に埋まり、前者の落とす氷塊を溶びてのダブルアックス登攀となり、緊張させられた。これが中山君よりフィックスロープの設置を指示の有つたチムニーだった)

マツチ箱の岩壁下を右上気味に喘ぎ喘ぎ、チムニーはまだかと登り続けていると、あつけなくマツチ箱の稜上に飛び出す。資料では三ノ窓までは僅かと有つたが、小窓ノ王南壁基部の下降点まで小窓ノ頭などの登り下りがあり、明るい内には三ノ窓までは行き着けそうもない。富山の町を見下ろし、夕日に輝くテンネを仰ぐ。こんな良い幕営地はない、と、若いリーダーを口説いて、マツチ箱を下つた広いコルに四時半に荷を投降す。

今日も雄大な山のみをつまみに、残り少なくなった酒をいただく。

四月二八日

早朝出勤で飛び出したが、ピーク二〇〇〇メートルまで

は遠く辛かった。ニードルは見掛けだおしで、小さなモロイ壁を越えて呆氣なく立つた。古いフィックスロープは池

た。

朝日を受けだした池ノ谷ガリーをノーストップで登り、

## その他 初めての冬山

新井 千鶴

池ノ谷乗越しで休むつもりだったが、場所がなくて池ノ谷ノ頭まで追い上げられてしまつた。アイゼンに付く雪を気づかしながらも、快晴下の三〇〇メートル級の稜線歩きは気分が良い。

五ヵ月ぶりの剣岳頂上は、流石に連休中で人も多かつた。登頂の感動もそこに二時に下山する。

早月尾根は雪が腐つて、正月より時間がかかり、早月小屋に五時半に着く。

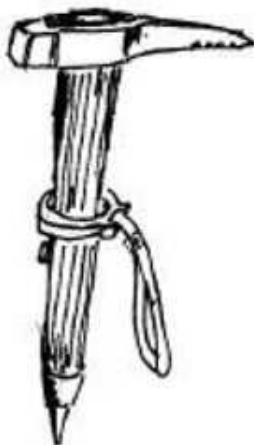
四月三十日

ズボズボと沈む悪雪に悩まされながら、暑い暑いとぼやきながら、十二時に馬場島に下り立つ。

入山時には利用できた馬場島荘の軽トラックが故障で動かないでの、駐車した青少年研修センターまで歩かねばならなくなつた。

しかし道は四日間ですっかり春めき、雪も減つていて、道端には黄色いフキが、山肌には桜が白く咲き競つて、道のりの長さを忘れさせてくれた。

北陸道の車中より振り返る剣岳が、一段と美しく雄壮に見えた。



「ゴーゴー今にもテントを押しつぶしそうな風の音。」  
「スルスルバサツカ方が降り始めた雪がテントの屋根を滑る音。なかなか寝つけない夜がゆっくりゆっくり過ぎて行く。」

翌朝、「谷川にしては良い天氣だ」という誰かの声に目が覚め、私もテントから顔を出して空の様子を眺めてめた。

空はどんよりと曇つて低い。少しも良い天氣には見えなかつた。

食事が終わると、テントが撤収された。誰が指示するわけでもないのに、手際良く作業が進められるのを感じして眺めていると、「じゃあ、お先に」という言葉と共に、中山さん、宮本さん、そして私を残して、他の方達は出発していった。

今日の訓練は関口さんと一緒に受けるものとばかり思っていたのに、彼女は先輩達と行つてしまつた。なんだか心細くなつてきたが、この際二人の先輩にしつかり雪山を教えていたたくよう頑張ることにした。

中山さんに、雪山の装備、歩き方、ビッケルの持ち方等を教えていただき、頭では納得したものの、いざ歩き始めると、凍つた雪の上を歩くことの難しさをいやというほど思い知られた。

必死で登つたので、どこをどう登つたのかはつきり覚えていないのだか、とても静かな登りだった。単調な登りが続いて疲れを感じ、後ろを振り返ると樹林の合間に遠くの山々が顔を出していた。ラクダのこぶの下の風陰で休んだ時、頭に雪を乗せた山々に統いて、遙か遠くの雪のない山が藍色に輝いているのが見えた。

アイゼンを着け、両先輩に挟まれてアンザイレンし、さらに上部に向かった。十五分ほど登ると森林限界を過ぎ、吹きさらしの稜線となつた。右も左も真っ白な白の斜面が

谷底まで続いているだけ。屋根の幅は狭く、立っているのが恐ろしかつた。どうにかラクダのこぶには辿り着いたが、

とてもここから先へは登れそうもなかつた。ここまでにしよう。」中山さんの言葉がとても嬉しかつた。

ラクダのこぶで風間さん、山下(京)さん、関口さんと合流し一緒に下山した。下りは恐い所もあつたが、すっかり雪にも慣れ、なかなか面白かった。先輩のまねをして尻セー

ドなるものもやつてみた。

駐車場で山頂まで行つた掛川さん、中村さん、根布さんを待ち、無事山行を終えた。

同行してくださった皆さん、印象に残る山行をありがとうございました。初めての雪山、とても楽しかつたです。これからもよろしくお願いします。

## 娘達に残すもの

秋田誠

子供がふたりいます。まだ幼い娘達なので、男の子と同じように木登りや崖登りが大好きです。親は元気に遊ぶ娘達を嬉しく思ひながらも、怪我を心配して気をもみます。春が近づくと、近所の泥壁にフキが芽を出します。姉がそれを摘みに行くといえれば、幼い妹も、私もついて行きます。一小時間もすると泥だらけになつた二人は、両手いっぱいのフキの新芽と抱えきれないくらいの冒険談を

土産に意気ようようと戻つて来るので、さつく母親が調理して夕食のテーブルに添えます。小鉢にひと盛りのフキ味噌。自らの手で収穫した自然の幸に彼女達の瞳は輝きます。

父も母も都会より不便でも環境に恵まれたこの田舎の暮らしが気に入っています。庭の杏の枝に、リンゴの一種を刺しておくと、何處からかツグミやモズがやって来るのです。来て! 大きな鳥がリンゴを嘴つているよ、娘達のはずむ声。少しの間、小首をかしげながらリンゴをついぱむツグミが我が家の主人公です。

一昨年の夏、娘達を連れ二泊三日の日程で白馬岳に登りました。白馬大池と頂上でテントを張つて泊りました。三千メートルに近い高山に登るのは彼女達にとって初めての体験でした。雪渓で滑つて転んだり、雨に降られてびしょ濡れになり、寒さに震えたりしながらも、泣きごと一ついわず頑張りました。余りに大きな自然の前に、泣く余裕すら失してしまったのかもしれません。親の心配をよそに、姉は勿論のこと当時まだ三才であった妹も、とうとう殆ど手を借りずに頂上に立つことが出来ました。幸い頂上では天気に恵まれたので、アルバムには標石の上に立ち得意満面な娘達の写真が飾られています。この折り、長年我が家で飼っている犬も一緒に連れて登つたのですが、日頃一緒に遊んでいる犬と同じ体験を持てたことは、彼女達にとってさらにこの山行が印象深いものとなつたようでした。

家族がみんなで協力して同じ目標に挑む。平凡な日々の暮らしの中ではなかなか経験出来ないことが出来た。ともすれば薄れがちな昨今の、家族のきずなというものを再確認出来たのは収穫でした。

娘達に残せるものは多くはありません。せめて、人間の手でアレンジされていない、ありのままの自然に接する機会を、出来る限り作つてやりたいと考えています。

(昭和六十二年一月)



## 冬合宿感想

正野嘉宏

ワカンをはいての雪をかき上げるラッセルは、大変なものです。新潟特有のベタ雪は踏み固めるには速いが、ワカンにどうしても載るため、重りを付けて歩いている様なものでした。疲れもありますが、腰までの雪の時は足の疲れが速いので、しまいには手をももの後ろに当て持ち上げながらラッセルしました。トレースがあるとないとでは、全然スピードに差が出ます。もつと体力をつけなきや。

吹雪の中では、どこを歩いているのか全くわからないので、駒の小屋まで非常に長く感じました。春来た時はこんな傾斜のところ有つたかなと言うのが度々出てきて困惑しました。

最後に、みんなテントの時はキジはいつ打つていたのでしょうか? 私は小屋では時間が有つたので打ちましたが、テントでは色々あって、ついに打ちませんでした。みんな知らない内に打つて来ているのでしょうか。



## 浦和渓山岳会活動記録（会山行 1991年度～1996年度）

日付	分類	山名	参加者	備考
91/03/21	会	佐野グレンデ	瀬藤	
91/03/24	会	佐野グレンデ	瀬藤	
91/04/21	会	谷川岳西黒尾根	瀬藤、楫田	
91/05/03 ~05/05春合宿		白馬岳主稜	牧野、中田	
91/05/03 ~05/05春合宿		白馬岳主稜	掛川、山下、正野	
91/05/03 ~05/05春合宿		鎌ヶ岳北稜	中山、秋田、根布	
91/05/03 ~05/05春合宿		杓子岳双子尾根	中村、楫田、中島	
91/06/02	会	北岳バットレス	風間、山下、秋田、白子、正野	中止
91/07/07	遭対	秩父二子山	風間、瀬藤、秋田、牧野、中田、掛川、山下、正野、白子、村田	
91/07/28	会	谷川岳一ノ倉沢南稜	山下、正野、村田、秋田、根布	
91/08/14 ~08/17夏合宿		北穂高滝谷/前穂	風間、掛川、山下、秋田、正野、村田	
91/10/19 ~10/20会		北岳バットレス	中山、秋田、掛川、根布、村田、正野、楫田	
91/12/07 ~12/08会		八ヶ岳権現沢左俣	牧野、風間、山下、根布、正野、村田、門田	事故
91/12/29 ~01/01冬合宿		甲斐駒ヶ岳	宮本、正野、楫田、中山、根布、風間、掛川、牧野	
92/02/01 ~02/02岳連		那須雪上講習	牧野、中田、正野、楫田、村田	
92/02/16	会	八ヶ岳峰ノ松目沢	瀬藤、掛川、風間、楫田、牧野、山下、中山、中島、正野	
92/03/21 ~03/22会		妙高三田原山（スキー）	宮本、中村、正野、楫田、村田	
92/05/02 ~05/04春合宿		西穂高-間の岳沢	掛川、風間、中島	
92/05/02 ~05/04春合宿		前穂高北尾根	中山、中村、正野、楫田	
92/06/07	会	新潟御神楽岳湯沢ダイレクトスラブ	正野、風間、山下、宮本、中島	
92/06/07	会	新潟五頭山	瀬藤、楫田、門田	
92/06/14	市民ハイク	四阿山	中田、中島	
92/07/19	会	谷川岳一ノ倉沢二ルンゼBルンゼ	風間、宮本、正野	
92/08/13 ~08/15夏合宿		西穂高岳-南岳	掛川、風間、山下、中山、正野	
92/09/26 ~09/27会		至仏山狩小屋沢	中山、掛川、山下、正野、中島、村田、門田、館	
92/10/17 ~10/18会		奥秩父笛吹川流域西沢溪谷	正野、中山、中島、門田、瀬藤、村田、掛川、風間、中村	
92/11/08	会	遭対訓練	風間、山下、門田、瀬藤、牧野、村田、中山	
92/11/22 ~11/23会		八ヶ岳行者小屋BC-赤岳	中山、牧野、中田、風間、関根、山下、瀬藤、宮本、中村、正野、楫田、中島、村田、門田、内海	
92/12/13	会	谷川岳西黒尾根	掛川、牧野、風間、関根、山下、中山、宮本、正野、村田、門田、内海、楫田	
92/12/30	冬合宿	北ア穂高岳-西穂高	掛川、風間、正野、楫田	
92/12/30	冬合宿	北ア西穂高岳	山下、牧野、関根、瀬藤、宮本、門田、内海	
93/01/23	会	八ヶ岳西面	中山、楫田、山下、掛川、中島、村田、瀬藤、中村、風間	
93/02/20	会	谷川岳中ゴー尾根	中山、瀬藤、内海、楫田	
93/02/20	会	谷川岳天神尾根	山下、掛川、関根、村田	

93/03/20	会	八ヶ岳石尊稜	掛川、風間、山下、瀬藤、中山、中島、内海
93/05/01	春合宿	北ア穂高岳	中山、掛川、内海、中村、牧野、風間、白子、村田
93/05/22	会	古賀志の岩場	
93/06/06	会	谷川岳一ノ倉沢南稜	瀬藤、正野、内海
93/06/06	会	谷川岳一ノ倉沢ダルケルカツP	風間、帽田、中山、掛川
93/07/25	会	谷川西ゼン、中ゼン、東ゼン	
93/08/13 ~08/16	夏合宿	北ア北穂滝谷クラック尾根	掛川、風間、帽田、加藤、門田
93/08/13 ~08/16	夏合宿	同 第4尾根	中山、中島、内海
93/08/13 ~08/16	夏合宿	同 潤沢	牧野、村田
93/09/25 ~09/26	会	北岳バットレス・シェバ ルツカンテ	正野、加藤
93/09/25 ~09/26	会	北岳バットレス・ローテルブ ラット	中島、内海、牧野
93/09/25 ~09/26	会	北岳バットレス・第4尾根	帽田、門田、白子
93/09/25 ~09/26	会	北岳バットレス・第4尾根中央稜	中山、掛川
93/10/10 ~10/11	会	巻機山五十沢川下ノ滝沢	帽田、中山、宮本、中村、村田、加藤
93/11/06 ~11/07	岳	登高祭、遭対訓練:秩父警察署人工壁	牧野、掛川、風間、山下、中山、瀬藤、村田、門田、帽田、他、
			計35
93/11/27 ~11/28	会	八ヶ岳阿弥陀南稜	中山、瀬藤、帽田、門田
93/12/12	会	谷川岳天神尾根-西黒尾根	中山、牧野、掛川、風間、関根、瀬藤、中村、村田、門田、帽田
93/12/29 ~01/02	冬合宿	北鎌尾根-槍ヶ岳	中山、瀬藤、帽田
93/12/30 ~01/02	冬合宿	槍平-大喰岳西稜	掛川、風間、牧野
93/12/31 ~01/02	冬合宿	潤沢岳西稜-奥穂高岳	関根、中村、中田、村田
94/01/23	会	足尾松木沢黒沢	牧野、瀬藤、中村、加藤、帽田
94/02/27	会	妙義裏谷急沢	中島、宮本、加藤
94/03/21	会	西黒尾根	中山、帽田、加藤
94/04/29	春合宿	槍ヶ岳	中山、掛川、瀬藤、中島
94/05/29	会	谷川岳一ノ倉沢南稜	牧野、瀬藤、帽田
94/07/30 ~07/31	会	北岳バットレスローテルブ ラット	中山、風間
94/07/30 ~07/31	会	北岳バットレス第1尾根	帽田、正野、加藤
94/08/13 ~08/16	夏合宿	剣岳:源次郎尾根、ハッ峰	中山、正野、帽田、加藤、高橋
94/10/16	会	谷川岳幽ノ沢V字右	中山、帽田、加藤
94/11/03 ~11/05	会	槍ヶ岳、北穂高(合宿荷上げ)	中山、加藤、村田、帽田
94/12/11	会	谷川岳巖剛新道	牧野、掛川、瀬藤、帽田、加藤、鈴木
94/12/18	会	谷川岳巖剛新道	中山、関根、中島
94/12/30 ~01/03	冬合宿	槍ヶ岳A:槍平-槍-潤沢	中山、掛川、帽田
94/12/30 ~01/01	冬合宿	槍ヶ岳B:槍平-槍	牧野、中島、村田、加藤、鈴木、瀬藤
95/02/18 ~02/19	会	八ヶ岳三又峰ルツ'右	牧野、帽田
95/03/19	会	谷川岳一ノ倉沢東尾根	瀬藤、中島、帽田
95/04/29 ~05/04	春合宿	立山-剣-早月尾根	中山、掛川、中島、加藤、帽田
95/05/21	会	表丹沢勘七ノ沢	帽田、加藤
95/06/24	会	瀬藤氏を祝う会in赤岳山荘	瀬藤夫妻、牧野、掛川、風間、山下、中山、帽田、村田、南夫妻、加藤、岩井田
95/08/12 ~08/16	夏合宿	剣岳三ノ窓BASE	中山、掛川、加藤、帽田
95/09/23	会	西沢渓谷東沢スク沢	中山、牧野、帽田

95/10/15	市民ハイク	吾妻連峰一切経山	牧野、中田、村田、加藤、梶田
95/11/03 ~11/04会		剣岳(合宿荷上げ)	中山、瀬藤、梶田、加藤
95/11/26	会	八ヶ岳阿弥陀岳北稜	牧野、中山、加藤、鈴木、梶田
95/12/09	会	谷川岳白毛門	梶田、加藤、鈴木
95/12/10	会	谷川岳西黒尾根	中山、中田、瀬藤、梶田、内海、 加藤、鈴木
95/12/29 ~01/03冬合宿		剣岳早月尾根	中山、牧野、中田、瀬藤、正野、 加藤、鈴木、梶田
96/01/13 ~01/14会		八ヶ岳ジヨゴ沢、裏同心谷	牧野、風間、内海、梶田
96/02/10 ~02/11岳		積雪期登山講習会(浅間山)	牧野、中田、加藤、梶田
96/04/21	岳	市岳連・雪上遭対訓練	牧野、瀬藤、沖山、加藤
96/04/28 ~05/01春合宿		劍岳・小窓尾根	梶田、牧野、中山、中島、 (瀬藤:サポート)
96/05/26	会	二子山・ローソク岩	牧野、梶田、関根、沖山
96/06/16	会	榛名山・黒岩	梶田、瀬藤、沖山、中村
96/06/16	岳	市民ハイク・北八ヶ岳	村田、加藤
96/07/28	会	奥多摩・水根沢谷	加藤、中村、山中
96/08/10 ~08/14夏合宿		劍岳・チンネ	梶田、風間、加藤、中村
96/09/28 ~09/29会		八ヶ岳	牧野、掛川、風間、梶田
96/09/29	岳	市岳連・遭対(妙義山)	瀬藤、内海、沖山、山中
96/10/05 ~10/06市民ハイク		岩木山・奥入瀬渓谷	牧野、中田、掛川、風間
96/11/23 ~11/24会		八ヶ岳・阿弥陀南稜	梶田、中山、加藤
96/12/15	会	谷川岳・天神尾根	梶田、沖山
97/01/03 ~01/05冬合宿		甲斐駒ヶ岳・黄蓮谷右俣	牧野、掛川、中山、瀬藤、沖山
97/02/02	会	八ヶ岳・峰ノ松目沢	牧野、瀬藤、沖山、他
97/02/23	会	八ヶ岳・石尊稜	梶田、加藤、他

以上

\*編集後記\*

みなさん発行が大変遅れたことをお詫び  
申し上げます。

というわけで待望の会報がやっとできまし  
た。

前回の会報は手元の資料によると昭和六十  
年の発行で、実に十二年ぶりの会報です。

今回は四十周年記念号としましたが企  
画が不十分なためこの間に書かれた未発  
表原稿をただ単に並べた様になってしまい  
ました。

私も考えてみると当会に入会して七年にな  
ります改めてこうして編集をしていると  
懐かしいことが結構でできます発足～十  
二年前～現在それぞれのんびり昔を想い  
出し懐かしんで見て下さい。

最後に原稿を頂いたOB諸先輩方をはじめ  
会員の方々に感謝すると共に編集にご  
協力頂いた私の妻と友人H氏に感謝致しま  
す。



発行者	浦和渓稜山岳会
	336 浦和市東高砂町 8-17 (牧野方)
代表者	048-887-0139
編集者	牧野要雄
表紙	村田雅治
発行日	牧野要雄 (原画)
	平成9年8月25日



浦 和 渓 稜 山 岳 会